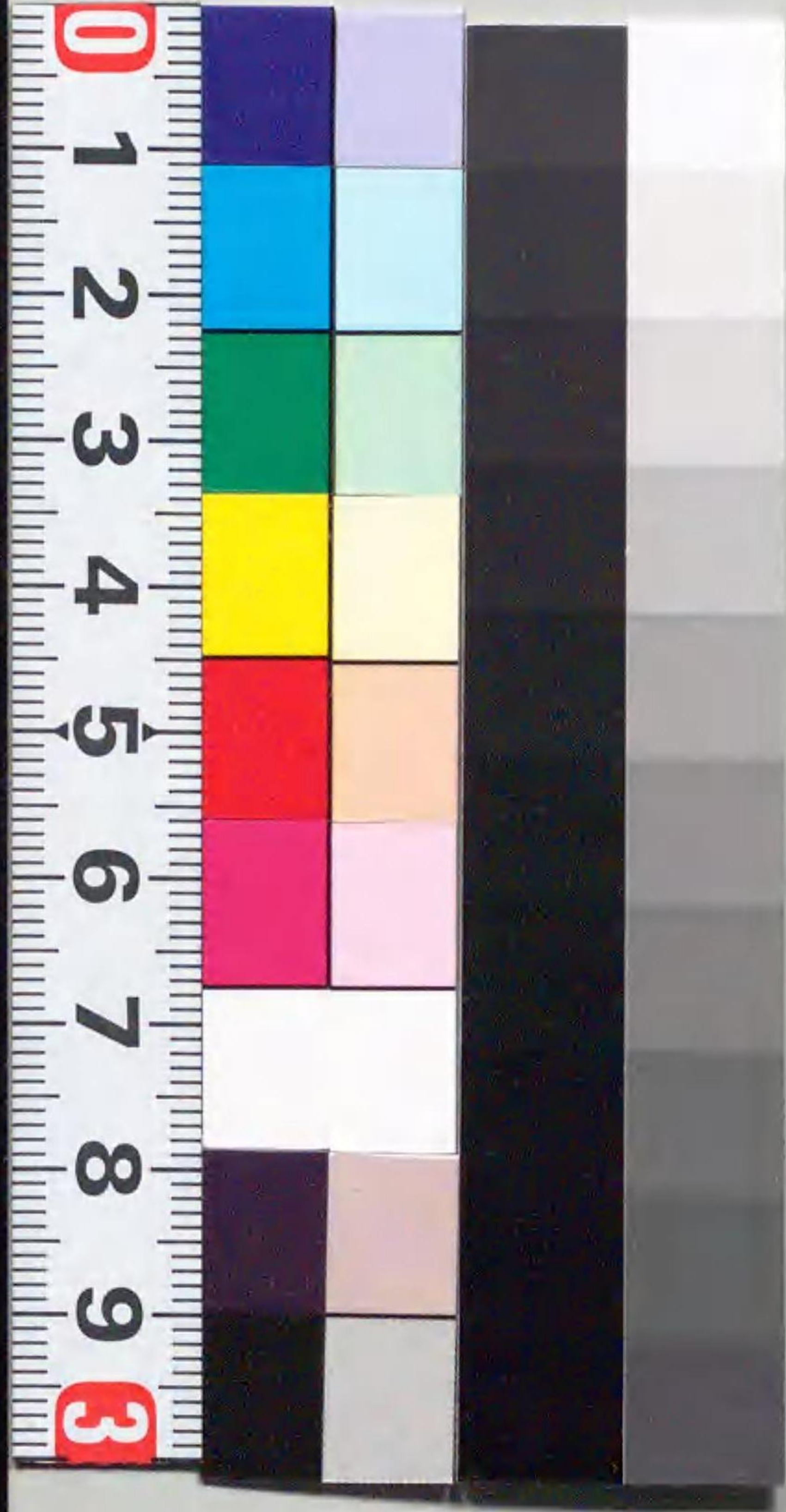


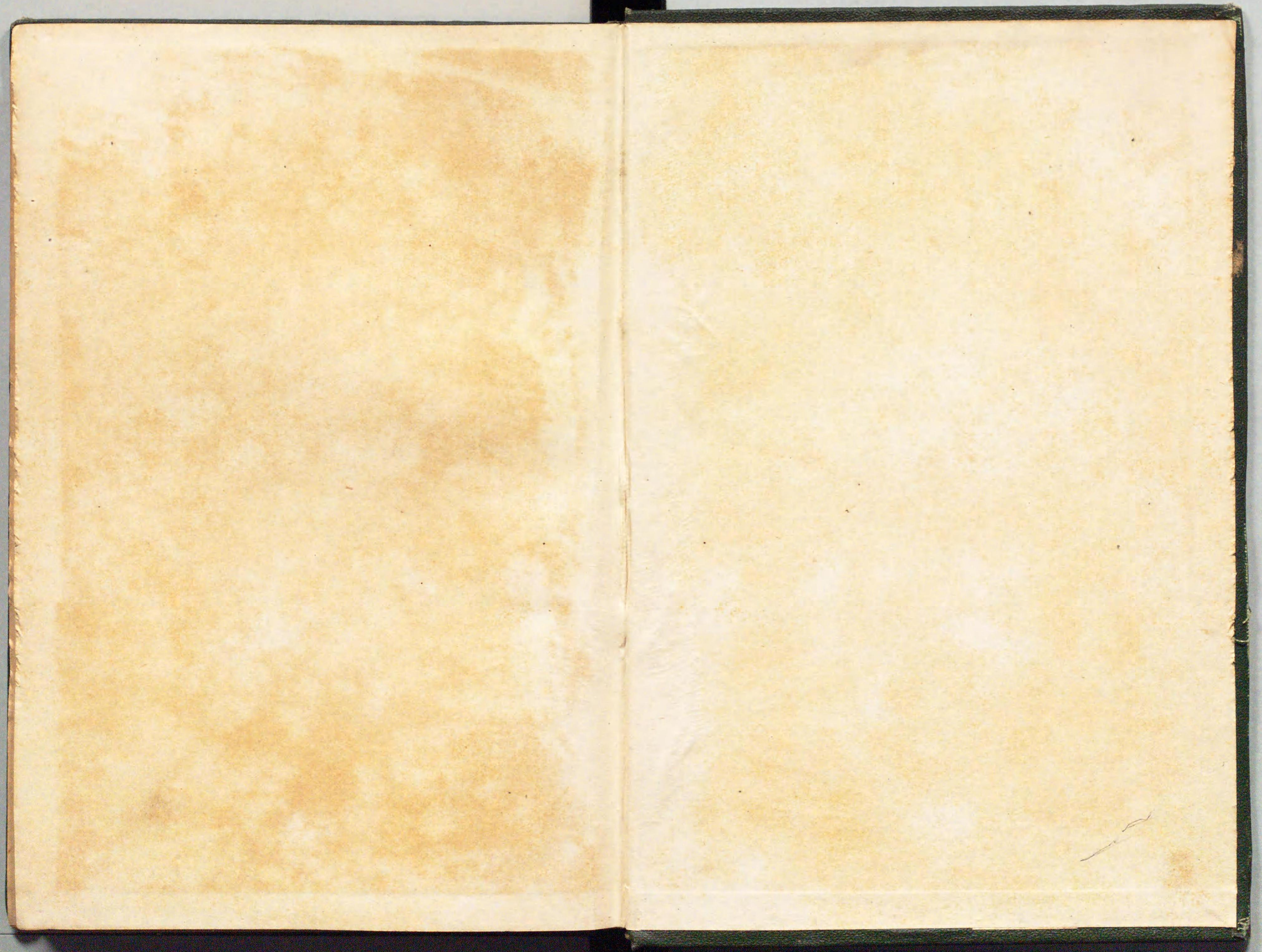
210.08
Ko5483



X

複写







評

文學博士

萩野由之

文學士

笹川臨風

議

文學博士

黑板勝美

文學士

菊池謙二郎

員

文學博士

松本愛重

文學士

三宅米吉

黑川真道編

國史叢書

將

軍

記

續

撰

正記

全

國史研究會藏版



評

文學博士

議

文學博士

員

文學博士

萩野由之

文學士

笹川臨風

黑板勝美

文學士

菊池謙二郎

松本愛重

文學博士

三宅米吉

黑川真道編

(順ハロイ)

國史叢書

將

軍

記

二

續

撰

清

正

記

全

國史研究會藏版

210.08
K05483



712654

解題

續撰清正記 七卷

本書は、寛文三年出版に係る清正記五卷本の誤を訂正し、清正の正傳を知らしめむとて、遺臣某の編輯したるものなり。

本書内容は、清正の系圖より筆を起し、次に清正、秀吉公へ出身の始、及び一生の事蹟を記し、筆をさしおきたり。其の事蹟に於ては、清正記とは異傳なる所あれば、清正の事蹟を研究せんには、是れ彼れ對照する要用あること、茲に云ふまでもなかるべし。

本書作者は、清正の遺臣にして、匿名したれば知るに由なし。但本書の次序に記する所によれば、作者の祖父某は、清正肥後入國の翌年、招きに應じて家臣となり、父某は、若年より清正の側を離れず忠勤を盡し、清正逝去以後、忠廣に仕へけ

るが、致仕して東關に蟄居し、正保年中、齡八十歳に及びたる由。されば作者は、此の長壽の父より、清正一世の行狀を聞き置けるに、清正記出版を見て、其の誤れるを知り、續撰清正記を著作せし由記されたり。

本書著作の時代及び出版の年月を記さずといへども、次序の文に、爰に加藤肥後守清正朝臣は、若年の頃より武勇に達し、天下の相として凜々たる威風日域に振ひ、而して堂々たる意氣朝鮮を動す云々。二世忠廣代に當つて、國破れ家亂れて、剩へ遠流の身となり給ひ、而して子孫跡を晦し、群臣離散す云々。何れの許の人といふことを知らず。又其姓字を詳にせずと雖も、他家の臣とは見えざる者、清正先祖より逝去迄の事を書記して、清正記と名付け、去ぬる年(寛文三年)の孟春に、梓に鏤めて世に行ひて以て之を顯す。其志豈盛ならざらんや云々。清正逝去慶長十六年より、今茲寛文四年の曆までは、五十有四年に相當れり」と見えたるによれば、寛文三年出版の清正記を見て、作者が即時に筆を執り著作し、翌寛文四年に成りたるものなる事は知られたり。されば本書出版も、尋で行はれたるもの

と推定して可なるべし。たゞ茲に底本とせし予が藏本に、出版年月を記さざるは、後世求版などの節に、削り去りたるものにて、最初出版本には、必ず出版年月を記せしものと考へらるれば、出版年月は、他日古本によりて發見せらるべしと、一言ことわりおくなり。

大正四年五月

黒川眞道識

例言

- 一、本編には將軍記後編五卷並に續撰清正記七卷を採收す。
- 一、將軍記原本二十卷中、十五卷迄を前編として採收し、本編には、十六卷以下を收めて、其後編となせり。
- 一、將軍記校訂上に就いては、前編既に詳載せる所の如し。
- 一、續撰清正記校訂に際し、讀誦の平易を計るが爲め、語尾を補ひたるもの例の如しと雖も、其甚しきに及ばざりき。時に讀み誤り易きもののみ振假名を施したるも、朝鮮の地名及人名の如きは、原本に従つて假名書の儘とし、必ずしも漢字に改めず。又語格は、原本の一定せるは、之を改竄する事なく、殊更其儘に保存したり。



目次

將軍記二

第十六 一

豐臣秀吉記中之一

第十七 三

同 中之二

第十八 七

同 下之一

第十九 九

同 下之二

第二十 三

同 下之三

目次

續撰清正記

序.....一三

卷第一.....一七

- 第一 清正、秀吉公へ奉公に出でらるゝ事
- 第二 秀吉公因幡國鳥取城攻附加藤虎之助働の事
- 第三 秀吉公備中國冠の城攻并清正働の事
- 第四 秀吉公山崎表に於て日向守と合戦、清正物見の事
- 第五 秀吉公、瀧川左近將監誅伐并近江新七討死の事
- 第六 柴田一類誅伐の事附戸波隼人討死の事
- 續志津嶽合戦物語の事
- 第七 織田信雄卿・秀吉公合戦の事
- 第八 秀吉公九州表へ御出馬、島津義久和睦の事

第九 主計頭肥後國拜領の事

第十 秀吉公より佐々陸奥守家來共に下さるゝ御書の事
續清正肥後國拜領致度旨望まれ候事

第十一 肥後國天草志岐林專一揆の事附主計頭、小西行長へ加勢の事

第十二 志岐落城、主計頭働の事

續天草合戦の事 續木山彈正を討ち給ふ事 續加藤善右衛門働の事
續諸卒穿鑿の事 續南部無右衛門の事 續木村又藏が事

卷第二.....二七

第一 本渡落城の事

續本渡城より鳥獸夜出づる事 續本渡落城の時女人働の事 續金延付の
刀脇指の鞘切られたる事

第二 志岐・本渡落城の様子、秀吉公へ清正御物語の事

第三 秀吉公、小田原攻め給ふ事

- 第四 秀吉公、主計頭に、朝鮮御詫仰付けらるゝ事
- 第五 主計頭釜山浦に着き給ふ事附秀吉公より御書遣さるゝ事
續釜山浦にて牛に乗る事 續釜山浦に着船の時毒酒飲む事
- 第六 主計頭ちく州に着陣の事、主計と小西口論の事
續南大門道にて大河を渡る事
- 第七 清正朝鮮の都に着き給ふ事、王子兄弟生捕の事
續王子兄弟を追ひ奉り咸鏡道押行く時の事 續王子兄弟生捕の事
- 第八 清正おらんかい表の働の事、ゑんたん落城の事
- 第九 清正陣所へ、おらんかい人夜討、則ち唐人等敗北の事附清正内裏へ押詰め
火をかくる、帝王都を落ち給ふ事
- 第十 清正鏡の城へ歸陣、おらんかい人狼藉糺明の事
- 第十一 清正、王子官人等召具し吉州へ歸陣。梅天と軍の事

卷第三

- 第一 大明敕使に清正對面、大王よりの敕書披見の事附返書并美女殺害の事
續朝鮮國の美女殺害相違の事
- 第二 清正、おらんかい朝鮮人等軍の事并唐人敗軍、都靜謐の事
- 第三 清正諸大名問答の事并かせんは川の陣所へ夜討の事
- 第四 朝鮮王子歸京の事、王子より主計頭へ禮書
- 第五 晋州落城附森本飯田後藤堀、先陣後陣論の事
續晋州の城の斥候の事 續晋州の城攻の時龜甲作る事 續秀吉公より御
感狀に、角兵衛儀太夫名字不審ある事
- 第六 小西行長、秀吉公へ、清正を讒言する事
- 第七 清正歸朝、御勘氣蒙らるゝ事 第八 大地震の事、清正登城の事
續大地震の時の事 續梅木田民部とこふ者、本渡の城を取りしを、策を以て
取返す事

卷第四

- 第一 清正勘氣御赦免の事、行長讒言露顯の事
 - 第二 梁山・南原落城の事 第三 大明人朝鮮人百萬の人数催する事
 - 第四 清正居城蔚山へ、楊鎬・吳惟忠百萬騎にて押寄する事
續蔚山へ大明人寄せんとする時、西生浦より清正蔚山へ籠らるゝ事 續蔚山城へ入る時の軍令の事 續蔚山籠城の事 續加藤清兵衛、蔚山城へ入りたる時の事 續大明人、謀に引退く事 續漢南人共の、城を攻めたる様子の事 續漢南人、楯の板を取る事并戦中働の事 續蔚山の城にて不思議共ある事 續高麗にて働に甲乙次第の事 續馬草刈を追來る時出合ひて働の事 續枯木を旗と見て敗軍致す事
- 卷第五……………三六
- 第一 左馬助幸明順天の城守る事 第二 大明梅柏、蔚山の城へ押詰むる事
 - 第三 秀吉公御他界、朝鮮在陣衆歸朝の事
 - 第四 朝鮮在陣衆と石田治部少輔不和の事

- 第五 小西朝鮮陣中の惡事、在陣衆中より秀頼公へ申上げらるゝ事
- 第六 石田治部少輔謀叛の事
續清正内儀、人質として大坂に置きたるを盗み出す事 續石田治部少輔と合戦に及ぶ由、家康公より飛脚到來の事 續家康公への使、四國にて自害致す事
- 第七 清正、宇土の城攻めらるゝ事
續宇土城攻の時、石の瀬の町破る事 續三宅角左衛門、南條伯耆と鍵合の事 續宇土城より忍びて出でたる飛脚捕へ候事 續相田權六郎働の事 續宇土の城より夜討出でたるを突返したる事 續田中兵助手疵改め給ふ事 續宇土城際の沼田に懼ぢたる事 續宇土の城請取る事
- 第八 清正、西國筋方々働の事
續立花左近將監後飛驒守と申すなり、内小野和泉、鍋島と合戦の事 續柳川の城開渡す事 續立花左近將監下城の時、清正陣屋に火事出來の事

卷第六……………

- 第一 清正・如水兩將、薩州働として出勢の事
- 第二 清正、家康公へ御目見えの事
 - 續秀吉公他界の後、利家公北國へ、家康公息を證人に取りて行かるゝ事 續肥後國拜領の郡共の高の事 續熊本城新に取立て給ふ事 續京都本國寺に於て萬部の經讀誦の事
- 第三 名護屋普請に、清正歌舞伎興行の事
 - 續尾州名護屋普請の時大石引く事 續興次兵衛歌舞伎の座にて足輕喧嘩致す事 續尾州熱田大明神の門造營の事 續八幡の國といふ歌舞伎女、肥後國へ下りたる事 續踊に狸の腹鼓打ちし事
- 第四 秀頼公・家康公御對面の事
 - 續家康公と秀頼公御對面の時御進物の事 續秀頼公大坂へ御歸の時於伏見御膳被上候事 續熊本在城の時、年頭の作法其外常の仕置の事 續常に定め置かるゝ軍法の事 續清正鎧の事 續旅行の時の事 續上野國くつ

といふ所にて、馬の靈になり庄屋を取殺し候事 續石川玄蕃頭より、馬申請けられ候事 續稻田一夢鐵炮の弟子に家來の者共なる事 續美須の彌次右衛門奉公いたす事 續家中への知行割の事

卷第七

- 第一 清正家中へ申出さるゝ七箇條
 - 續七箇條の法度相違の事
- 第二 清正逝去の事、家來中へ遺言の事
 - 續清正病に付きて駿河へ使者差越す事 續清正逝去の事 續遺言相違の證據の事 續清正遺言に軍神になり給はんと宣ふ言相違の事 續追腹切りたる様子の事 續清正逝去の時家來の者共駿河へ伺公致したる事 續清正遺物の事 續家來の者共の書立の事 續清正跡相違なく虎藤肥後國拜領致し候事 續清正葬禮の事附廟所の事 續本妙寺法談の事

目次終

將軍記第十六

豊臣秀吉記 中之一

天正十四年の春、秀吉公、羽柴下總守勝雅を遣して、東照大権現、早く京都に上洛ありて、秀吉公に御禮あるべしと勸めしめらる。羽柴勝雅罷向ふ。大権現、折節三川の吉良といふ所に、御鷹狩し給ふに参り逢ひたり。大権現、使の言葉を聞きて宣はく、我れ何ぞ京に上りて、秀吉の庭に、手を束ね腰を折らんやと。勝雅暫く旅宿に歸りて、其有様を窺ひ見るに、大権現は、只鷹をする狗を走らかして、遊獵するのみにして、秀吉の仰は、耳にも聞入れざるが如くにおはしませり。次の日下總守、大権現に目見え致せしに、仰せられけるは、汝未だ歸り上らざるや、何ぞ周諄くりごとを申す。斯る言葉は聞くも懶し、早く歸り上れと。下總守申して曰く、貴公若し従ひ給はず

ば、秀吉大に怒り給はん事疑なし。然らば軍を此國に起されなば、危き事なるべし。今某、當國に來りて見るに、城廓おろそかに、要害疎まばらなり。夫に只鷹狩をのみ、好み給ふ事は何ぞや。貴公能く心得給へと。大權現宣はく、下總守能く聞くべし。秀吉の軍兵多しといふとも、十萬餘には過ぐべからず。我兵は、二三萬計なり。さり乍ら秀吉の軍兵は、當國不案内の者共なり。如何に多勢なりとも、難所に引受け打取らん事、風の草を靡かすが如く、大石の卵を壓すに似たるべし。我れ更に憂へ恐れず。汝來りて、無用の言ことばを我に語る。汝は佞奸の人なり。重ねて來らば、一命危からんと宣ふ。下總守又空しく歸りて、大坂の城に參り、此由申すに、秀吉、少しも怒り給ふ色なくして宣はく、大權現のいふ所、誠に理に當れり。我れ如何にも智慮を連らして、京都に召上さんものをとて、其夜既に更けて後、秀吉、俄に下總守を呼び給ふ。勝雅周章て騒ぎて出でたり。信雄公も、城に參らせらる。秀吉公昌披おびとまひらひして、手に脇指と細帶を提げて出で給ふ。小姓一人、手燭燈ととして従ふ。下總守に語り給はく、我れ既に大權現を、京都に召上せたるぞやと。下總守驚きて物いはず。秀吉公

の曰く、我が妹を、彼が妻になさん。夫に家人等疑はゞ、我が母の大政所を、人質に遣さん。然らばいかでか上洛せざらんやとて、又下總守を遣して、上洛あるべき由申さしめらる。下總守、先づ吉田に至りて、酒井左衛門尉忠次に逢ひて相談し、忠次と打連れて、共に行きて申す。

大權現益怒りて、佞人又來れるや。我れ何ぞ之に對面すべきと。家人皆強ひて見えしむ。下總守、即ち秀吉の仰を述べたり。大權現宣はく、然らば上洛すべし。秀吉僞りて不義をなさば、秀吉の罪なるべしとなり。下總守、大に悦びて京に歸る。秀吉も、甚だ悦び給ふ。

大權現、則ち榊原式部大輔康政を使者として、上京せしめらる。康政京に來り、富田左近が家に入りける所に、秀吉先づ來りて宣はく、我れ榊原康政に對面せん事を、望みし心、切なり。此故に、汝が登城するを待兼ねて、爰に來れるなり。先年小牧山の對軍の時、汝康政が狀に、秀吉更に主君を知らず、信雄卿と軍を結ぶ。其惡逆無道なる事此の如し。誰か之を疾まざらん。然るを諸軍多く秀吉に與せり。尤も

理と義とに背けり。我れ更にうけずと書きたり。其頃此状を見るに、怒胸に満ちて置所なく、軍中に仰せて、榊原康政を打殺さん者には、恩賞は望に任すべしと。其後康政汝が首を見て、我が心を快くせんものをと、憤り思ひけるに、今大権現と和睦し、交親しくなりて、汝に對面するに、日頃の鬱憤、一時に散じたり。汝、君に忠あるに深し。我れ尤も之を感ず。我れ汝を、疎に思はんや。今より後は、諸事言合すべしとなり。康政頸を傾け拜辭して、未明に登城せしに、様々もてなし給ふ。斯くて康政下國す。其後秀吉、其妹を大権現に遣す。女房達百六十人を相添へ、淺野彈正等供奉せらる。道中の男女、其奇麗美々なるを見物して、目を驚かす。

五月十四日、濱松に至り、御輿を榊原式部大輔が家に寄せ、夫より城に入り奉り、婚姻の禮を行はる。秀吉言送らるゝ趣は、我れ妹あり、濱松の城に遣して、箕帚の妾とし給へとなり。其後秀吉思はく、今は大権現上洛あるべしと。されども終に上洛なし。世に沙汰するやう、大権現、終に秀吉と不通して上洛なくば、秀吉、定めて秀康を害せらるべしと。此事東國に風聞す。大権現思ひ給はく、我れ秀康を以て、

人質とせず。秀吉の養子とせり。若し其子を殺さば、秀吉の不慈不義ならん。古より互に婚姻をなす事あれども、敵國となりし者多し。我れ何ぞ容易く上洛せんや。秀吉聞傳へて、即ち重ねて、母堂大政所を岡崎に遣して人質として、其心を打解けしめらる。美濃守秀長大に怒りて曰く、御母を以て敵に遣す。是れ武家の大なる恥なり。彼れ既に命に背きて従はず。一戦を遂げて雌雄を決せんと。秀吉宣はく、秀長が心、甚だ隘し。再びいふ事なかれと。秋九月、終に其母を送る。或人疑ひて曰く、夫にはあらずと。時に秀吉の妹、濱松より岡崎に來りて、窺ひ見て曰く、實に是れ我母なりと。是に依りて疑を晴れたり。彼の妹とは、東福寺の内南明寺と申せし是なり。此月、豊後の國主大友義統、使を秀吉公に遣して曰く、島津修理大夫義久、既に薩摩大隅日向三ヶ國を領じて、屢軍兵を豊後に押出して、國を犯す。義統相戦ふと雖も、之に克つ事能はず。此度加勢を給はらば、永く臣下とならんとなり。秀吉公、即ち仙石權兵衛長曾我部元親を、豊後に赴かしめらる。先づ使者を以て、島津義久にいはせらる。島津義久、己が國にありて、恣に官位を進み、萬事雅意

島津義久
を攻む

に任する條、不義の甚だしき事いふ計なし。正に昨の非を悔みて、早く京都に上るべしとなり。島津義久、大に罵り笑ひて曰く、彼藤吉猿面郎が、我を京に上らせんとす。誠に嗚呼がましやとて、仙石權兵衛が書狀を披き見もせずして、投捨てたり。仙石聞きて大に怒り、即ち六千餘騎の軍兵を率して、義久が家臣に、伊集院の某が領地に陣を取る。大友義統が軍兵も、同じく相従ふ。義久、即ち島津中務少輔家久を遣して、二萬餘人を以て、防ぎ戦はしむ。長曾我部信親一陣に進み、家久が陣に駈入りて討死す。郎從廿餘人、盡く死す。島津が兵、既に信親が首を取り、銳に貫きて差上げ、大に呼ばはりて打つて懸る。仙石、大友が軍兵、大に亂れたり。長曾我部元親は、信親が討たれたるをも知らず、島津に亂されて引退きしが、元親が郎從主を落さんとして追重なる。敵を打拂ひくしける間に、竹田新介桑名太郎左衛門、大友が郎從十河新太郎、矢野、田宮以下、皆討死す。仙石も、只一騎虎口を遁れて、豊後に入りけり。島津が武威、大に九州に振ひしかば、彌、秀吉を恐れず。

東照大權現、既に秀吉の所望に依りて、井伊兵部少輔・本田中務大輔・榊原式部大輔、が親族、各一人宛京に上せて、人質とせらる。大權現は、井伊兵部直政・本多作左衛門重次を以て、秀吉の人質大政所を、岡崎にして守らしむ。大權現上洛ありてより、大政所の屋形の周圍に、柴を積み置く。是れ若し大權現、京都にして大事に及び給はば、大政所を焼殺さんが爲なり。大權現、上洛首途あり。本田中務大輔忠勝・榊原式部大輔康政・阿倍伊豫守・永井右近大夫直勝等供奉して、大坂に着きて、先づ美濃守秀長の家に入り給ふ。秀吉公忽ち來りて、大權現に對面し、手を取りて、遠路の上洛を喜び申し給ふ。秀長を以て、様々もてなしの事、善盡し美盡し給ふ。此時に、雨戸を開く者あり。關東の家作には雨戸なし。此故に、大權現御供の面々、大に其聲に驚き色を夫ふ。富田左近將監之を推察して、其事を語り申すにこそ、色を直しにけれ。次の日大權現、大坂の城に上り給ふ。尾張内府信雄卿も登城あり。秀吉公、大庭まで迎に出で給ふ。大權現と信雄卿と、跡先に行く辭退ありけるを、秀吉公、大權現の手を取りて、先に行かしめ、物語して入り給ふ。大權現と天守に上らる。珍物の道具、山の如く飾られたり。利休に仰せて、茶を點せしむ。斯くて大權現、御

暇を告げらる。秀吉、即ち不動國行の太刀、白雲といふ茶壺を參らせらる。大權現、洛中御見物あり。聚樂に屋敷を參らせらる。秀長、既に秀吉の命に依りて、臺所并に門を作りて參らせらる。藤堂與右衛門高虎、奉行たり。淺野彈正長政、京都の馳走人たり。十月四日、大權現を、權中納言に任せらる。斯くて濱松に歸り給ひ、大政所をも、京に返し上らせらる。大權現、井伊兵部少輔直政を、御禮の爲め上洛せしめらる。秀吉公もてなして、石川伯耆守を相伴人とせらる。兵部少輔、其不義なる事を嫉みて、一日の内、物もいはず。其後秀吉公、御茶を給はりしに、伯耆守又相伴たり。直政又一言をも交さず。心に思はく、伯耆守は、是れ人の面にて、獸の心なる者なり。譜代の主君を背きて、秀吉公に従ふ。不義といひ臆病といひ、武士の大に惡む所なりと。此有様を見聞く人、皆伯耆守が恥かしさ、直政が道義ある事を褒貶す。

此月、黒田官兵衛孝高、小早川左衛門尉隆景、八千餘騎にて豊前に至る。一揆の輩、宇呂津の寨を守り、道を切塞ぐ。黒田、小早川、急に攻破りて、凶賊數百人を殺す。

秀吉公、感狀を給はる。小早川又軍を進めて、障子嵩の城を落し、香春の城を取巻きしに、城主高橋、降人に出でたり。即ち河原が嵩に陣取りて、秀吉公の西國立を待ちけり。

十一月、仙石權兵衛打負けて、島津義久、家久が、武威を振ふ由を秀吉聞きて、大に怒り給ふ。

十二月、秀吉公、太政大臣に任ず。自ら姓を改めて、豊臣とせらる。

秀吉公、卅七ヶ國に回文して、軍兵廿餘萬騎を招き、小西隆佐、建部壽徳、吉田清右衛門、宮城長次郎に仰せて、兵糧秣等の事を辨す。

大權現、濱松より駿府に移徙あり。月迫なるを以ての故に、御家人等、家を移す者少し。大久保治部大輔忠隣等、漸く從ひ移す。其外の人々は、年を越えて移り住す。

此年、秀吉公思し立ちて、東山に、大佛殿を建立せんとす。徳善院立以、淺野長政、増田長盛、石田三成、長束大藏に命せけるやう、昔日南都の大佛殿は、廿年にして成就せりといふ。此度は五年にして、其功を終るべき才覺あるべきやうなり。各、立以齋

大佛殿を
建立す

が家に會議して、奈良の大佛師宗真法印・弟宗印法眼、大佛殿棟梁の大工を呼寄せて、委しく尋ね究め、秀吉公へ申し上げたり。秀吉宣はく、材木を先とするや、佛像を先とするやとなり。五奉行相計りて、材木を取るべき國々を記す。土佐九州信濃の木曾・紀州の熊野、宜しからんとて、奉行廿人・番匠廿人を選びて、國々に遣す。秀吉公宣はく、五奉行に問ひなば、事毎もとほり難く、日を重ねん。只玄以一人に問うて、定むべしとなり。斯くて四國・九州の人は、土佐の山中に入りて、木を出し舟に載せて、淀・鳥羽に着くる。伊勢・尾張・美濃の人は、木曾の山中より材木を伐出して、勢州の桑名に送りて、大坂に着けたり。畿内・中國の輩は、大佛殿の地形・石垣・築山等の事を勤む。東山佛光寺に、地形を定む。役に與かる者、廿一ヶ國を三に分けて、一は地形、一は石垣、一は築山を司る。佛像の事は、銅を以て鑄立つるは、成就する事遅し。只木像にして然るべし。漆膠を以て塗立て、五彩を以て飾るに、如く事あるべからずとなり。異國の佛師、豊後國にありしを召して問はるゝに、答へて曰く、異朝にて、大像の佛を造るには、木を以て作り、漆膠を塗立つれば、百年は保へて、

朽崩れすと申す。秀吉公に申し上げたりければ、則ち宗真宗印に仰せて、佛像をば作らせらる。片桐東市正直盛・糟屋内膳正・古田兵部少輔・寺西筑後守・早川主馬首・間島彦太郎を差添へらる。堂の高さ廿丈、佛の高さ十六丈、是れ古より定れる法なれば、今以て之に違ふべからずとなり。漆膠は、泉の堺今井宗久を奉行とす。池田備中守・川尻肥前守・上田主水正を差副へらる。異國の佛師申しけるは、佛像出來せざる以前に、牡蠣殻一萬俵を集むべしとて、即ち伊勢・尾張に人を遣して集めらる。されども事遅々に及ぶ間、高野山の木食上人興山を呼びて、其營を差計らはしむ。興山は、斯様の事に物馴れし上人なり。佛光寺の邊に草庵を構へて、取急ぎしかば、程なく佛像は作り立ちたり。築山を、佛像の東に構へ、轆轤を以て虹梁を繰上げければ、凡そ千人にても、動かし難き虹梁を、百人計りにて引廻す。古に替りて、其工、大に手早く取扱ふ。四方の石垣、初は小石にて築きけれども、人若し盗み取らんかとして、大石を以て築直さる。毎日五千人にて引營む。興山上人、奉行を勤む。棟木は、富士山にありと申す。秀吉公、即ち大權現に使を遣し、其木を伐らせて、大坂に廻さ

しむ。其一本の費、五萬人の用、黄金千兩に當れりとかや。既に日を経て、大佛殿成就す。又大なる鐘を鑄て掛けらる。是彼供養の式に至る迄、國家の費、萬民の勞、誠に夥しき經營なりけり。

同十五年正月二日、謠初あり。諸大名御禮の儀あり。

二月、島津義久退治の爲め、諸國の軍士を、西國に赴かしめらる。或は難波の浦に纜を解き、或は須磨・明石に鞭を上げて、前陣、既に門司・赤間關に着けば、後陣は、未だ兵庫・昆陽野に支へたり。斯くて諸軍筑紫に着く。同三月に、秀吉公京を打立ち給ふ。其出立華やかなり。安藝の嚴島に至り給ふ。社人内侍參り調す。蠻人は、貝を拾うて奉る。内侍は、清盛の古を明神に奉納あり。夫より關戸に着きて、軍評定あり。美濃守秀長を大將軍として、薩摩に押入らしむ。蜂須賀阿波守家政・長曾我部土佐守元親・尾藤右衛門尉等、凡そ四國・中國の勢八萬餘騎なり。毛利右馬頭輝元四萬餘騎、備前宰相浮田秀家一萬餘騎にて、秀吉公の命を受けて、都喜枝城を構ふ。黒田官兵衛・龜井武藏守を相添へらる。秀吉公は、軍兵を進めて豊後に至り、秀長は高城

秀吉自ら
島津義久
を攻む

豊後日向の境に取懸け、急に攻めらる。島津兵庫頭義弘加勢す。宮部善祥坊が陣に至りて、大に戦ふ。宮部が家臣南條某が働に、義弘敗北して、軍兵多く討たれたり。島津中務少輔家久二萬餘騎にて、豊後の府内の城に籠る。秀吉公押寄せ給ふ。家久防ぎ屈して、雨風烈しき夜、城を落ちたり。秀吉公、即ち大友宗麟・義統父子を居ゑて守らしめらる。

秀吉公、四月に、岩石城を攻めしむ。豊前筑前の
丹波少將秀勝を大將軍とし、蒲生飛驒

守氏郷は、大手に向ひ、前田肥前守利長は、搦手に向ひ、谷大膳・小野木縫助を軍奉行として、急に攻めて、城に火をかけ採落す。秀吉公大に喜びて、氏郷・利長に感状を給はる。氏郷が家臣坂小板後に蒲生源左
衛門と號す、城の一番乗しけり。秀吉公、之に金錢を給はる。東照大権現の使者本田豊後守廣孝來り合せ、同じく進みて城を攻めつゝ、大に戦功を勵ましければ、秀吉公感じ給ひて、羊皮の羽織・金鐔脇指を給ふ。

小熊の城には、秋月種長籠り居たりける所に、岩石の城落ちたりと聞きて、城を開退き山中に隠れ、誓紙を捧げて詫言申しければ、秀吉公許し給ふ。種長大に喜び、

奈良柴の茶入を奉り、小熊の城に歸され、秀吉公の先陣を勤む。

彦山といふは、豊前・豊後・筑前三ヶ國に、根をさして蟠り、最高き名山なり。山嶮しくして、中に僧徒是れ多く住せり。開闢より此方、守護の者なく、王命にも従はず、武威をも恐れず、唯己が心に任せ、恣に國民を惱まし、凡そ西國に起る盜賊の張本、多くは彦山の法師原なり。近隣の諸民之を憂へて、秀吉公に訴へ申す。秀吉公、さらば退治すべき由、うけがひ給ふ。彦山の僧徒聞傳へ、滿山會合して、評定區なちくなり。中にも老僧の曰く、此頃西國に名を得し武勇智謀の人々に、克つ事能はず。皆降參する程の秀吉ぞかし。彦山の法師原、争でか之に對して克つべき。只降を乞うて、彦山を安全にせよとて、僧一人を遣し、淺野彈正長政に付きて、秀吉公の陣に參り、赦免せられん事を求む。秀吉公の命に依りて、彦山の僧徒、連署の起請文を捧げたり。則ち御許されを蒙りて歸る。富田左近將監・奥山佐渡守を遣され、彦山寺中の仕置を定められけり。秀吉公の武威、高く揚り遠く振ひて、西國の諸城、攻めずして皆開退く。即ち軍兵を入替へて守らしめらる。秀吉公思ひ給はく、遠國絕域

の者共、一人も残らず誅せば、無慈悲の至なりとて、仰出さる、趣は、此度諸方の城兵、逃落ちたらん者を、殺す事勿れ。城主降人にならん者は、許し宥めんとなり。此由聞傳ふる者、誠に仁政の至りなりとて、皆參り來りて、對面を遂ぐる輩、壹岐・對馬・平戸・五島・筑紫・龍造寺政家・麻生重貞・高橋草野安心院・佐田宗像・中八原田・立花・杉野・城井等、皆從ふ事、風に靡く草の如し。

五月に、秀吉公進みて、薩摩國千代川の邊太平寺に陣を取り、兵糧秣等を、諸軍士に分ち與へ、九鬼大隅守嘉隆・脇坂中務少輔安治・加藤左馬助嘉明を奉行として、千代川に橋を渡さる。秀吉公の先陣十五萬餘騎、既に鹿兒島に至る。鹿兒島は、島津修理大夫義久が居城なり。義久が家臣評定して曰く、秀吉公の武威、其猛き事焰の如く、其銳すどとなる事、洪水の堤を破るに似たり。今之に向つて防がんとする事、譬へば卵を以て、盤石に向ふに等しからん、忠久數代の血脈、忽に絶えなん事疑なし。只同じくは時代に從ひて、島津の家を、末長く保ち給へかしといふ。此儀に如く事あるべからずとて、伊集院右衛門大夫入道幸侃馳せ出でて、大和大納言秀長の陣に至

りて曰く、義久不義の行、誠に述べ難し。然れども憐を垂れて助けられれば、義久永く臣下とならん。若し宥め許されずば、力なく、城を焼きて自害すべしとなり。秀長卿、即ち木下半介を以て、金吾中納言秀秋卿に申さしむ。伊集院幸侃、同じく行きて申して曰く、義久御赦免を蒙らば、髪を剃り衣を着して、参り申すべし。若し然らば、忠節を秀吉公に盡さん事、更に違背あるべからずとなり。秀吉公聞きて宣はく、島津義久、數年此方、王道を蔑にし悔りて、奸謀恣なり。此故に今我れ來りて退治するなり。島津一家は、枝葉を翦枯らさんと思へども、島津氏は、忠久忠勤の勳功に依りて、頼朝卿より封せられて、四百餘年に至れり。今之を打亡さん事、我本意とするにはあらず。只其悪行を懲さんとなり。先非を悔えて従はば、本領相違あるべからずとなり。幸侃大に悦びて歸る。義久及び家人等、甚だ大に悦ぶ。義久髪を剃り僧衣を着し、童一人を具して、太平寺に至り、秀吉公に對面す。秀吉公懇意を加へらる。島津兵庫頭義弘、同右衛門大夫俊久、同中務少輔家久、及び家老伊集院幸侃、平田美濃守、本田下野守、野村兵部少輔、皆御禮申しけり。

義久降る

秀吉公、夫より龍造寺政家、前田肥前守利長等を、大隅に遣し、羽柴秀勝、徳川秀康、長岡越中守忠興等を、日向に向はしむ。兩國所々の諸城、皆秀吉公の威風に靡き、砦を開渡し、旗を伏せて降参す。阿蘇の山中は、地形嶮しく樹木茂く、盜賊等、多くは此山に籠りて、人を惱まし犯す。秀吉公、之を攻平らげんとし給ふに、盜賊等聞傳へて、皆來りて降を乞ひ、自今以後、更に盜賊不義の悪行を致すべからずと申す。故に即ち宥め許され、是より西國、平らかに治まりぬ。

六月、秀吉公、肥後國熊本に至りて、二日逗留あり。肥後國を、佐々陸奥守成政に給はりて、熊本の城に居らしむ。筑後國を、毛利輝元が一族吉川元春に給はる。肥後國は、龍造寺政家、年久しく領知す。元より志を、秀吉公に通せし故に、今以て相違なし。政家年未だ少し。此故に鍋島加賀守直茂、即ち國政を執行へり。

秀吉公、筑前安樂寺に至り給ふ。島津義久、新に茶屋を構へて、もてなし奉る。秀吉公、大に悦び給ふ。又博多の筥崎に至り、八幡宮を拜し、其邊に一の殿を作らせらる。諸大名皆然なり。筥崎の風景、誠に人の心を蕩し目を奪ふ。秀吉公大に興じ

給ひて、人々に歌を讀ましめらる。千宗易、泉の境より來りて、筥崎の松原にして茶を煎じて、秀吉公の興を催す。秀吉公、爰に廿日計りおはしけり。筥崎は、元是れ十萬家の人屋ありて、目出度き地なりけるを、龍造寺隆信と大友宗麟と、年々合戦に及びしかば、人家皆焼失はれて、唯礎の跡のみ残り。秀吉公憐み給ひ、里の翁を呼集め、堅横の町小路、古の如く分ち立てさせ、人の家居を定め興へらる。里人大に喜びて、其徳風を仰ぎ奉る。

毛到輝元の一族小早川左衛門佐隆景は、豊後大隅の國政を執行ひて、博多に參り向ふ。秀吉公之を感心して、筑前國を給はりて、立花の城に居らしむ。同七月、秀吉、筥崎を出でて、宗像小倉に至り、豊前八郡の内六郡を、黒田勘解由孝高に給はり、二郡をば、毛利壹岐守に給はりて、小倉の城に居らしむ。秀吉公、赤間關に至る。大和大納言・大友宗麟・毛利輝元、來り集まる。秀吉公胄を出して、輝元に給ふ。其夜關の戸の御泊に、輝元酒肴持參あり、一獻を勧め、千鳥の太刀を參らせらる。秀吉公御腰に差し給ひ、忠光の刀を輝元に給ふ。大友宗麟は、瓢箪の壺を捧げらる。

秀吉公、大和大納言秀長卿に問ひ給はく、高城の軍に、島津義弘が手より、宮部善祥坊が陣を破る事叶はずして逃げたり。此時、我軍兵を進めて急に打つならば、義弘首を授けん事疑なし。何ぞ拙く怠りけると。秀長等答へて曰く、我等皆取懸らんと申せし所に、尾藤左衛門佐、堅く止めたりける故なりと申す。秀吉公大に怒りて、尾藤が愚弱なる所なりとて、尾藤を疎みて、讃岐の領知を削られき。

秀吉公、赤間が關を出でて、風波を過ぎて、陸よりして、同月十四日、大坂に歸り給ふ。敕使來りて賀し申さる。秀吉公、聚樂に移り住みて、秀次を京に居らしむ。肥後の國人、多く佐々陸奥守成政を反く。成政之を打平げたり。秀吉公、使を立て、曰く、公義の許されを受けず、私に軍を起す事、然るべからずとなり。

同十六年正月、佐々陸奥守成政、肥後國を立ちて、尾崎に來り、秀吉公の氣色を伺ふ。秀吉公、使を遣して曰く、成政、國家の仕置甚だ苛くして、人民を惱ます。故に人民惡み恨みて反く。此故に軍起る。是れ成政が大罪なり。夫れ切腹すべしとあり。成政、即ち自ら首を搔落して死す。人皆惜しみけり。秀吉公、黒田官兵衛に仰せて、

肥後の國人等、公義の命をも受けず、私に成政を殺さんとせし罪科輕からずとて、筑後・肥前の諸大名に仰せて後、一揆の輩を誅せしめ、其後肥後國を、加藤主計頭清正に給はる。

秀吉公、奏聞を遂げて、聚樂の行幸を望まる。敕して許し給ふ。德善院法印玄以に仰せて、其事共を辨せしめ、永享九年室町殿行幸の例を用ひらる。遠國・近國の上下、皆京都に集まる。其繁昌賑かなる事、いふ計りなし。

後陽成天皇聚樂の幸

四月十四日早天に、秀吉公、禁中に参りて、行幸を催さる。帝後陽成院、南殿に出御ありて見え給ひ、既に内野聚樂の第に行幸まします。鳳輦は、四足の門より出でて、北に正親町を過ぎて、西に聚樂に至る。十五町の間、警固辻堅、六千餘人に及ぶ。其行列は、國母・准后・女御の輿を先に進め、典侍・御局・勾當等、凡そ輿車五十餘あり。其次に塗輿・六宮御方・古左丸・中務卿邦廉親王伏見殿、准三宮九條兼孝公・准三宮一條内基公二條殿、從一位藤原昭實二條殿、菊亭右府晴季・德大寺前内府公維・飛鳥井前大納言雅春・四辻大納言公遠・勸修寺大納言晴豊・大炊御門前大納言經頼・中山大納言親綱・白川三位雅

朝王等なり。其の次に、左右の前駟數十人、次に近衛次將左右六人、次に貫首二人、次に左近衛大將鷹司大納言信房・右近衛大將西園寺大納言實益、次に伶人四十五人、安樂城といふ樂を奏す。次に鳳輦、次に近衛左大臣信輔・織田内大臣信雄・烏丸大納言光宣・日野新大納言輝資・久我大納言敦道・東照權現・大和納言秀長・近江中納言秀次・備前宰相秀家、其次に關白太政大臣從一位豊臣秀吉の輿、次に前駟の騎馬七十餘人を、二行に連ぬ。左は増田右衛門尉長盛等なり。右は石田治部少輔三成等なり。次に雜色卅人、次に隨身六人、次に布衣三人、次に加賀少將前田利家・穴津侍從・織田信兼・金吾侍從羽柴秀秋・三川少將德川秀康以下、諸國の大名、數を盡して供奉せらる。各皆馬上にて、裝束は五色の地に、四季の花鳥を唐織・浮織・蜀江の錦・吳郡の綾、凡て美を盡し花を飾れり。遠近の男女貴賤、棧敷を構へ假屋を打つて、集り見る事市の如し。鳳輦既に聚樂に至る。右大臣晴季、車の簾を卷上ぐる。帝、御車を下り給へば、萬里小路頭辨光房、裾を取る。秀吉公拜謁して、着座の儀式を調べ、酒七獻。其第三獻の時、天盃を下し給はる。第七獻の時、秀吉公、御劔を奉る。山海

の珍物肴菓、數を知らず。庭の面、夏木立繁り合ひつゝ、遅櫻散残りて若葉に交り、池水小細波寄せて岸を洗ひ、魚の戯れて、己が心に任する有様、天顔大に御快げにおはします。夜に入りて御遊の管絃、五常樂、郢曲、太平樂なり。夜更けて秀吉退出あり。次の日、^{十五}公卿臣下、假の皇居に參らる。秀吉公、既に菊亭勸修寺・中山に條章を示さる。京中の地子錢五千五百卅兩を、禁中の料とし、地子米八百石の内、三百石を以て仙洞の料とし、五百石を、六宮殿の料とし、江州高島郡八千石を、諸門跡諸公家の料とせらるべしとなり。秀吉公・信雄卿・大權現・秀次・秀家・利家に、誓紙を獻せしめ、禁裏・仙洞・公家・門跡料を、妨げ奪ふべからずと云々。斯くて秀吉公、既に張即之が千字文・名畫三幅・沈香百斤を、主上に捧げ、名畫二幅・阜比一枚・堆紅の盆一個・小袖三重・太刀一振を伏見殿に、其外公卿殿上人、各祿を給はる。十六日、和歌の披講あり。各懷紙を、座次に依つて之を取る。一番、大和大納言秀長、二番、大權現以下、廿八番、關白秀吉なり。今日七獻の禮あり。獻毎に、秀吉公捧物あり。黄金百兩・金欄廿卷・麝香臍廿個・吳服百領・絹百疋・金建蓋金臺二個、白銀の

北野の大茶湯

盆に載せ、御馬十疋。斯くて披講讀師、各其事終る、和歌の題は、寄松祝といふ事を詠めるなり。十七日は、伶人の舞あり。萬歲樂・延喜樂・太平樂・拍梓・陵王・納蘇利・採桑老古鳥蘇・還城樂・拔頭、凡そ十番あり。此日仙洞より、御製を秀吉に賜ふ。十八日、還幸あり。秀吉公、書を菊亭勸修寺・中山に送りて、行幸の喜び申さる。主上仙洞、共に詠歌を賜ひけり。十月、秀吉公、北野の松原にして、茶湯を催さる。是れ都鄙の茶湯者の風情、道具の好悪を見んが爲めなり。先づ所々に札を立て、茶湯者を招かる。京都並に泉塚遠近、凡て茶を嗜む者、大に喜び集まる。徳善院玄以、千宗易を以て、茶湯者三百五十餘人を、北野に會せしめらる。各北野・右近馬場の左右・松の本・梅の陰・岩の狭間に、茶店を圍ふ。萱葺に柴の垣、苦葺に蘆の垣、篠葺に竹の垣、心々にしつらひ、茶の具掛物以下、思ひくゝに飾る。秀吉公も、小店の圍をしつらひ、茶具色々を連ねて、諸人に見せしめらる。秀吉自ら茶を點じて、諸大名に給ふ。近衛信輔・日野輝資・大權現・信雄・信兼。秀長・秀次・利家・氏卿・稻葉貞通・千宗易。織田有樂・羽柴秀勝・蜂

屋賴隆・浮田秀家・細川忠興^三。斯くて秀吉公、茶店を巡りて見給ふ。立入りて茶を喫し、興を催さるゝ所に、或茶店に、年の頃五十有餘の僧一人あり。茶店の有様、奥深くしつらひけり。秀吉公立寄りて、茶ありやと宣ふ。僧の曰く、茶はなしとて、木の枝に掛けたる瓢を取下す。其中には、^{こがし}焦樹あり。漲りたる白湯に振浮かして參りする。秀吉公、其淡薄一興なる事を感じ、之に過ぎたる風流あらじとて、聚樂に歸り給ふ。諸人店を毀ちて去りぬ。北野の大茶湯とは此事なり。

同十七年三月、前田利家は、秀吉公の渡御を望み申さる。御うけありて、四月、利家の第に渡御あり。公卿武夫相隨ふ。拜領進上、山の如し。酒肴菓等、唐の日本の數を盡し、猿樂五番の後に、利家の家臣十餘人、御禮に出でたり。日暮れて秀吉公還御、秀吉公攝州有馬の温泉湯治十餘日を経て、青銅二百貫を、有馬の里中に賜はりて歸らる。

五月、秀吉公思ひ給はく、天下を掌に收め、金玉に乏しからず。空しく貯へ積みて用ひざれば、金玉と石瓦と、何ぞ別ならん。之を分ち與へて贍さんとて、聚樂の門内二町の間、金銀を臺に積みて並べしむ。見る者、目をくるめかし、魄を驚かす。夥しき事いふ計りなし。公家・武家參り集ふ。五奉行承り、金銀を積む事、臺毎に百枚、四人して之を昇出し、一人宛召出し拜領す。總高金銀卅六萬五千兩なりといへり。

此年の秋、秀吉公、使者を相州小田原北條氏政・氏直父子に遣して曰く、子等數多の國押領し乍ら、王命に従はず、參内をもいたさず。恣にして天を戴き地を踏むの國賊なり。早く京都に上らるべしとなり。氏政・氏直聞きて思はく、若し上洛せば、禍我身に罹らんかと。此故に、氏直が伯父北條美濃守氏規を、上京せしむ。秀吉公、懇にもてなし給ふ。必ず氏直上洛あるべしとて、氏規を歸らしめらる。

同年の冬、富田左近將監津田隼人を、小田原に遣して、上洛あるべしと勸めらる。氏政・氏直思はく、筥根は、第一の嶮難なり。要害甚だ固し。小田原は、又京を隔つること百餘里なり。秀吉いかで輕々しく、軍兵を差下さん。縦ひ多勢を向はしむとも、難所に引受け打果さん。古、平家數萬騎にして、東國に赴きしも、水鳥の羽音に

驚きて、相戦はずして逃げ上りしぞや。秀吉も斯くの如くならん。畿内・西國の軍兵、思ふにさこそあるべき。皆生捕にし、塵にせん。只秀吉に隨ふというて、京には上るまじ。年月重なる間には、北條家の繁昌する事共多からんものと、家中一同に悔りて、富田・津田を疎にもてなして、歸り上らしむ。此由秀吉公に申しければ、大に怒りて宣はく、北條家、我を以て、平家の維盛に譬ふるや。然らば來春馬を出して、民政・氏直等が首を刎ねんものと宣ふ。

十一月廿四日、秀吉公、書を民政・氏直に遣さる。五ヶ條の篇目を擧げて、科を戒め罪を斷り給へども、北條家の運傾さける故にや、驚く色なくして、只馬耳風・蛙頭水の如し。

秀吉公廻文して、諸國の軍兵を催さる。長束大藏大輔、兵糧米を點檢す。

台徳院殿秀忠上洛し給ふ。井伊兵部少輔直政等、供奉せらる。秀吉公、甚だ喜び對面ありて、座させ起たせ歩ませ參らせて宣はく、誠に能く生長おひたちまませり。然れども髻の様・衣紋の様、是れ田舎の風なりとて、女房達を召して、奥に入れ參らせ給

ふ。大政所手づから其髻を取上げ、小袖を改め、肩衣袴の衣紋引繕ひ、秀吉公、別に金龍の大小刀を奉り、即ち御手を引きて表に出で給ひ、井伊直政に語りて宣はく、我れ此息の鄙風おなかぶりを改めて、都様になす事、汝見よ、また善からずや。父家康に見せしめば、大に喜び給はん、早く連れて歸國せよ。あなかしこ、道中無事なれやと、直政拜謝して罷立ちて、秀忠公、不日に歸國あり。

同十八年正月十四日、南明院殿、聚樂の第にして薨じ給ふ。年四十八。

三月、五畿・南海・山陰・山陽・北陸・近江・美濃・伊賀の軍勢十二萬騎、大權現の軍兵參遠。駿・甲・信州より二萬五千餘騎、信雄卿伊勢・尾張の軍兵一萬五千餘騎、皆相州に赴く。秀吉公、京都を立ち給ふ。其出立花を飾れり。京・奈良・泉堺・大坂の諸人等集り見る。斯くて伊豆の三島に着き給へば、先陣の諸軍、皆迎へ出で奉る。

北條氏政・氏直此由聞きて、兵を分つて諸城を守らしめ、其身は、小田原の城にあり。山中の城には、松田右兵衛大夫を居ゑて、北條左衛門大夫氏勝・間宮豊前守好高・朝倉能登守を相加へて守らしむ。民政、此三人に太刀を給はり、卿等忠節を盡すべし

北條氏政
氏直を攻
む

と。間宮好高が曰く、心易かるべし。戰若し急ならば、我必ず討死せんと。座中大に感ず。朝倉能登守退きて、親しき人に語りて曰く、北條家の滅却遠からじ。夫れ山中の城は、要害疎なり。大軍を防ぐこと、叶ふべからず。而も今民政の心として、家久しき者に仰せて守らしめらるゝは、古老の臣三四人を捨て給ふなり。嗚呼口惜しくも、北條の亡びん事を。北條氏勝討死せば、我も亦死なんと語りき。葦山の城をば、北條美濃守氏規を以て守らしむ。

秀吉公、即ち織田信雄卿に、蜂須賀阿波守家政・福島左衛門大夫正則・細川越中守忠興・蒲生飛騨守氏郷・中川藤兵衛尉秀政・森右近大夫忠政・戸田氏等、四國の兵を相副へて、葦山の城に向はせらる。

東照大権現は、長窪を越えて、本山中に至り、近江中納言秀次・堀秀政は、山中の城に向うて、等しく之を攻めらる。秀吉公、中村式部少輔一氏を召して曰く、山中の附城、爰を去る事十餘町餘りなり。我が陣程遠し、附城に傍そばはしめよとなり。一氏と諸軍勢、同じく進みて、山中の城を攻むる事急なり。秀吉公の寵臣一柳伊豆守討死

す。中村式部少輔一氏、能く戦うて城終に落ちたり。北條左衛門大夫氏勝朝倉能登守は落行きぬ。松田右兵衛大夫・間宮豊前守は、腹搔切つて死す。秀吉公、大に中村一氏が軍功を賞し給ふ。北條左衛門氏勝は、相州甘繩の城を守る。

松田尾張守・上田上野介・原式部大輔等、一萬二千餘騎にて、宮城野口を堅め、千葉新介は、八千餘騎にて、湯本口を固め、北條陸奥守氏輝・成田下總守・壬生上總介・蜷川山城守廣照は、一萬餘騎にて、竹浦口を固めたり。山中の城、既に落ちたりと聞きて、小田原の城中、大に恐れ騒ぐ。諸軍色を失ひて、上を下に返しけり。關左八州の諸人、手足わなゝきて肝を冷す。

四月、秀吉公進みて、湯本の眞覺寺に陣を取り、松山に要害を構へ、軍兵を分ち遣して、宮城野・湯本・竹浦の口々、皆打破り攻崩すに、防ぐ兵共、楯を捨て旗を引きて、小田原の城に逃籠る。城内十方に昏れて、爲方なく亂れ騒ぐ。氏政・氏直、大に驚き惑ふ。秀吉公の軍兵勝に乗りて、小田原の城邊に至る。秀吉公、高き所に上りて、大権現を召して耳語きて曰く、敵は我目の中にあり。小田原の滅亡、只今にあり。我

れ必ず關東八州をば、足下に授け參らせんとなり。諸軍勢、既に小田原の城を取圍みて攻むると雖も、さすが城中強く防ぎて、容易く攻干し難し。

五月、伊達政宗奥州を立ちて、越後より甲斐に至り、宮根に着きて秀吉に謁す。時に政宗廿四歳なり。秀吉公、使を以て曰く、我れ大軍を率して、北條が罪科を戒しむ。上杉景勝・佐竹義景等、皆使者を來らして、我が威風を恐れ仰ぐ。政宗獨り然らず。されば日頃侵し取りたる會津・仙道を、早く返すべし。米澤等卅餘萬石は、元の如く領知あるべし。此旨を背かば早く歸れ。汝が會津に歸らん頃、北條を攻干して、直に會津に馬を進めんと。政宗答へて曰く、我身を、君の爲め匹夫になして、此所に来れり。まして命に背かんや。況んや郡邑の地をや。會津・仙道は返し奉るべしとて、暇を給はりて國に歸る。政宗を放ち歸さるゝは、秀吉の不覺なり。定めて謀叛すべしと、諸人思へり。陣中風聞するやう、大權現・信雄、皆志を小田原の城中に内通し給ふとて、諸方の陣中、ひそめき立ちて靜ならず。秀吉聞き給ひ、小姓五六人を具して、大權現・信雄卿の兩陣に、替るゝ來りて、戯れ遊び給ふ事、半日計りに

して歸り給ふ。是に依つて陣屋々々の諸軍、安堵して靜まりぬ。

小田原の長陣に、諸軍退屈して苦しまん事を憐み給ひ、秀吉公、或は茶を給はり、又は謠の曲節を聞かして、其艱窮を慰さめらる。

上杉景勝・前田利家・利長・毛利河内守秀頼・真田源五、其勢三萬五千餘騎にて、上野松枝の城を攻めらる。城主大道寺駿河守・同子新四郎、防ぎ戦はんとせし所に、寄手目に餘る程の多勢なるを見て、城を出でずして固く守る。景勝・利家等、急に攻めしかば、堪へずして、大道寺父子、降人になりて出でたり。松山の城主上田上野介は、我家老難波田因幡守・木呂子丹波守・金子紀伊守・山田伊賀守に、松山の城を守らせ、其身は小田原の城にあり。景勝・利家之を攻むるに、四人の大將、降人に出でたり。箕輪・厩橋・川越の三城皆降參す。又北條安房守氏邦が居城鉢形の城も、同じく降人に出でたり。

將軍記第十六終

將軍記第十七

豊臣秀吉記 中之二

景勝・利家、小田原に來りて謁す。秀吉公、更に此軍功を賞せられず。景勝・利家、數多の城を攻め降しぬれば、大に勸賞あるべきを、さもなく不興にもてなさるゝ事は如何にと、恨み疑うて罷出でたり。秀吉公、近習衆に語り給はく、此度彼二人が手柄大なり。されども數多の城、皆降人となるを受許す。其中に一城は、大將軍兵一人も残さず打殺しなば、一は宥め一は滅す。是れ軍の法なり。我れ深く賞すべしと。景勝・利家聞きて、誠に尤なりと甘心し、又軍兵を率して、八王寺の城を攻む。城主は、北條陸奥守氏輝なり。家人横地監物に本城を守らせ、中山勘解由・狩野一庵に中の丸、近藤出羽介に、山下の陣を守らせて、其身は小田原の城にあり。大道寺

父子・難波田・木呂子・金子・山田・小幡等の降人、景勝・利家の命を受けて、山下の陣を攻むるに、近藤出羽討死す。中山勘解由・狩野一庵、三百餘騎を集めて曰く、我等北條氏輝の大恩を蒙りし事年久し。今大軍に圍まれて、我等必ず討死せん。汝等は落ちんと思は、落ちよ、恨更になしと。三百餘人皆曰く、我等何國いづくに落行くべき。只諸共に討死せんといふ。斯くて景勝・利家が、大軍、中の丸に付きて攻懸る。中山・狩野少しも驚かず、城中鳴を靜めて、矢を放ち鐵炮を打出すに、寄手多く打倒され射伏せらる。横地監物は恐れ顛いて、本城を捨て、逃げ落ちたり。中山・狩野、三百餘騎を左右に立て、打つて出でつゝ、大に戦うて本城に引籠れば、僅に十餘騎に打なされ、痛手薄手負うて、今は是迄なりとて、一同に腹切つて死す。さてこそ景勝・利家、一城みなをろし鑿の素意を達せられけれ。

六月、秀吉公、山中山城守を召して曰く、汝は忍の城主成田下總守と相知りて、睦ぶ事久し。試に書を遣して、我に降參せしめよとなり。山中則ち狀を認めて、成田に遣しければ、兎も角も降人に出づべし。能きやうに計らひ給へと返狀す。山中其の

返狀を、秀吉公に見せ奉る。秀吉大に喜び、大權現を召して曰く、足下そこの陣より、成田が返狀を、氏直に遣して申さるべきやうは、關左八州の諸城、皆志を秀吉に通せずといふ事なし。小田原の城、夫れ終に抄々しく持遂げ難からん。氏直早く秀吉に降參して、其家門を全うせられて然るべしと、仰せ呉れよとなり。大權現、其如く仰せ遣されしかば、是より小田原の城中、互に疑を起し、心を措合ひければ、雜説まぢまちに風聞し、軍評定も一決せず、諸方の手賦てくばりも、あしくなり。

民政、即ち成田下總守に人を遣し、評議すべき事あり、急ぎ來るべしと。成田は、心地相煩ふ事ありとて來らず。使三度に及べども、病重しとて參らず。民政又使を遣して曰く、汝二心ある由、密に聞きたり。實か偽か、其故を問はんが爲めに、三度迄召すと雖も來らず、如何なる事ぞやと、醫師安栖を以ていはせらる。成田答へて曰く、敵大軍を以て、忍城を取圍む。我れ既に城中の女房子供を、盡く殺さん事の憫なれば、山中山城守を頼みて、秀吉に降を乞ふ。此事偽にあらずと。民政聞きて大に怒り、山上郷右衛門を以て、八千の軍兵を差副へて、成田が陣を警固せさす。

武藏國岩付の城は、北條十郎氏房氏直の舎弟が守る所なり。氏房が家人伊達與兵衛に、本丸を守らしめ、妹尾下總守・片岡源太左衛門に、三の丸を守らしめて、氏房は小田原の城にあり。秀吉公、淺野彈正長政・木村常陸介・本多中務大輔・忠勝に、一萬餘騎を相添へて、岩付の城を攻めしむ。妹尾・片岡、強く戦うて之を防ぐ。忠勝が長男平八郎忠政後に美濃守と號す、生年十六歳、鎧押取りて一陣に進み、突合ひ込合ひ、終に妹尾を突伏せ、首取りて差上ぐる。片岡も、痛手數多負うて戦死す。伊達與兵衛は、恐れ顛いて降人になり、本丸を開渡す。

小田原の城中には、八王子・岩付兩城の落ちたるを聞きて、大に恐れ惑ふ。十郎氏房、即ち舎兄氏直にいふやう、城中の軍兵、親子兄弟夫妻に別れて歎き悲しみ、諸方の砦皆攻落され、色を失ひ力を落し、抄々しく軍をも心に入れず。此城、始終持遂ぐべからず。只速に大權現に付きて、此城を秀吉に與へ、城中諸軍の命をも繼ぎ、我身一族をも全うし給へかといふに、氏直は唯茫然として、思分けたる方なし。

松田昆張守は、北條家累代の老臣として、郎從數千騎を抱へ、關八州には、人の恐れ

敬ふ事、其威勢限りなし。松田思ひけるやう、北條家の滅却、天運盡果てたり。角の如く爪の如く背の如く翼の如く、頼み切つたる諸方の城共、蟹の足を振ぐが如くに、片端より落入りて、獨り小田原の城のみ残り。運を開かん事あるべからず、只身を全くして、子孫に傳へんには如かじと思ひ、密に使を遣して、降人にならんといふに、秀吉公許し給ふ。松田大に喜び、其子左馬助を呼びて曰く、頃年氏政・氏直の、我を疎みて蔑にする事、外様新參の者に劣れり。誤なきに、眦しりめに睨み、面拜すれども言もつはず。君臣の禮を失ふ事、數しばしばなり。恨を含むと雖も、色にも出さいりき。今此時に當りて逆心を企て、日頃の憤を散せんと思ふはいかにと。左馬助聞きも敢ず涙を流して曰く、君此心ある事は、誠に人たる道にあらず。君は是れ北條家累代の元老なり。恩澤を蒙りて榮花を極め、關左八州の諸士に仰がれて、威勢強くおはせし事、風に嘯く虎の如し。皆君の沓を戴かんばせきて、顔を解かんことを求めしぞや。夫に今、恩を忘れ義を失うて、逆意を起し給はい、天下の諸人、指を指して笑ひ、恥を後世迄に残されん事はいかに。假令一旦の恨ありとも、義の重き事は太山の如し。一

命を鴻毛よりも軽くして、忠戦の功を勵まし給はずば、死して泉下に、何の面目ありてか、忠死する諸軍に差向ひ給はん。願はくは御志を、改めおはしませかしと申す。松田大に恥ぢて、我れ誠に汝に恥見せられたり。此上は自害して死なんといふて、刀に手をかくる。左馬助押止めて曰く、義理の重き、一旦申せし計なり。身の爲め家の爲め、兎も角も、君の御心に従ひ申すべしといふ。父大に喜んで、反逆の行てたてを評議して、左馬助を返す。日を経て後、松田尾張守・其長男笠原新六郎・次男左馬助・三男彈三郎家人内藤左近大夫・太田肥後守を呼びて、様々もてなし、密に曰く、此城の滅せん事近きにあり。此故に我れ志を秀吉に内通せり。明夜長岡越中守忠興・池田三左衛門輝政が軍兵を、我が張場に引入れんと、筈を取りて定めたり。汝等心得よとなり。左馬助、潜に氏政の前に行きて曰く、松田尾張守が一命を、某に給はらば、一大事を告知らせ申さんと。氏政、誓言を以てうけがひ給ふ。左馬助涙を流して、父が反逆の事を申す。氏政、即ち松田尾張守を召して、陸奥守氏輝・岡江雪を以て譴めて曰く、密に聞く事あり。汝逆心を含み、長岡・池田が軍兵を城中に入れて、

氏政・氏直を亡さんと結構する由。是れ何事ぞや。敵方より、密に我に告げたり。此事信なりやと。松田答へて曰く、往年武田信玄と合戦を挑みし時に、敵人既に松田こそ、北條を反きけれと風聞せしも、我れ更に其心なくして、忠を盡し奉りき。今以て敵に與せんや。是又敵方より君を誑して、斯様に風聞するならんと。氏輝江雪重ねて曰く、子息左馬助が申せしなりと。是に於て尾張守諍はず。

七月、北條美濃守氏規の許に、氏政父子の書状あるに依りて、韭山の城を、大権現の家臣内藤三左衛門信成に渡して開退く。秀吉公、新庄新三郎・石川兵藏を遣して、城の仕置を監せしむ。

大権現、井伊直政・本多忠勝・榊原康政を、相州甘繩の城へ遣し、城主北條右衛門大夫氏勝を賺して、秀吉公に降參せしめらる。其使三度に及びて、氏勝、終に降參す。

秀吉公、小寺如水・羽柴下總守勝雅を、城中に遣して曰く、氏政・氏直降參あらば、伊豆・相模兩國を參らせんと、北條安房守氏邦を以ていはせたり。氏政の曰く、我れ久しく關左八州を領す。今僅に兩國を領せんよりは、城を枕として討死せんとして、和

睦の氣色なし。氏邦思はく、此和睦事成らば、我は上野一國を領すべきものと残り多くて、頻に氏政に和平の事を勸む。

小田原の城中、雜説風聞あり。軍兵は妻子兄弟の行方を思ひ、萬づ心細くして、甚だ苦めり。氏直、つらく運命の開き難く、城中心亂れて、一統し難きに付きて、行末心細く思ひ、又軍兵共の命をも助けん爲め、松田尾張守に腹切せさせて後、氏直馬に乗り、山上郷右衛門一人を具して、大権現の陣に來りて、其故を告げらる。大権現稱歎ありて、羽柴下總守勝雅が陣に行かして、秀吉公に達せしむ。我れ今、秀吉公の幕下に降す。氏政以下城中軍兵共の命を助けられれば、明日必ず城を開渡すべしと。秀吉公許し給ふ。氏直喜びて城に歸り、城中の軍勢を皆悉く出して、思ひ思ひにならしむ。秀吉公、即ち脇坂中務少輔安治・片桐東市正直盛を遣して、城中の諸事奉行せしめ、井伊直政・本多忠勝・榊原康政を以て、城を請取らしむ。

氏政・氏直等は、醫師安栖が家におはしけり。秀吉公宣はく、此度我れ馬を出しける事は、北條家を亡さんが爲めなり。然るを今悉く宥め許さば、先言、僞になるべし。

氏政・氏直
降る

氏政氏輝
自盡

氏直高野
山に入る

氏直死去

氏政・氏輝を殺して、氏直を許さんと思ふと。是に依つて石川備前守・蒔田權佐・中村式部大輔一氏・佐々淡路守・堀田若狹守を、安栖が家に遣す。榊原康政は、大權現の命に依りて、同じく行向ふ。石川・蒔田・中村等、既に秀吉公の意を述べんとするに、痛はしく思ひて言兼ねたるを、氏輝察して、沐浴の暇を求め、浴びて後に、氏政・氏輝、各和歌を詠じて腹切り給ふ。氏政生年五十二歳、諸人皆悲しみけり。

大權現、兩人の首を持たせて、秀吉公に示す。秀吉公宣はく、王命を恐れざる者の果なりと、即ち石田治部少輔三成に仰せて京に上せ、一條戻橋に梟けらる。又氏直をば、高野山に上らしむ。美濃守氏規・左衛門大夫氏勝・松田左馬助・大道寺孫九郎・内藤左近大夫等卅人、凡そ従者三百人、同じく赴く。秀吉公懇に勞はり給ふ。次年十一月、氏直生年卅歳にして、高野山に卒す。

秀吉公、即ち關左八州を、大權現に授け給ふ。井伊兵部少輔直政・本多中務大輔忠勝・榊原式部大輔康政に、采地各十萬石を賜ふ。小田原の城は、大久保七郎左衛門忠世に、附授け給ふ。

秀吉公、軍兵を率して奥州に至る。伊達政宗、那須野に來り迎ふ。南部大膳太夫信直も、來りて拜謁し、東國悉く平ぎぬ。

秀吉公、諸國を分ちて諸士に給ふ。此頃軍忠の功を勵みける輩、皆恩祿に誇り、富貴の榮名を保ちけり。内大臣信雄卿、秀吉公に梓楯の事ありて、出羽の秋田に流し奉る。其後歸京せらる。

奥州九部修理亮政實謀叛して、木村伊勢守が居城を攻む。城甚だ危し。蒲生飛驒守氏郷聞付けて、會津を打立ちて、寄手を追拂ひ、伊勢守を連れて會津に歸る。南部の大膳大夫信直、飛脚を以て京都に申す。秀吉驚き給ひ、秀次に軍兵を添へて、政實を打たしむ。秀次、二本松に陣取り給ふ。蒲生氏郷・淺野彈正長政・堀尾帶刀吉晴・井伊兵部少輔直政先陣たり。南部信直馳せ來り、諸軍進みて九部の城を攻むるに、城落ちて政實降人となる。其族黨は皆誅せらる。

秀吉公、木村伊勢守を追拂ひ、伊達政宗を、葛西の大崎に移し、米澤を蒲生氏郷に加増あり。

或人、秀吉に申す。伊達政宗謀叛すと。秀吉公、政宗を召すに、皆曰く、彼必ず來るべからず。來らずば、實に反きたるなりと。政宗左右なく京に來る。秀吉公、富田左近に宣はく、政宗來れりと。左近が曰く、其上君播州におはせし時、或人讒して曰く、秀吉謀叛すと。信長宣はく、彼は大なる奢者なり。さもあるべし。若し召すに來らずば、謀叛疑なしとて、試に召し給ふ。君、左右なく安土に參り給ふ。信長、讒者の僞なりと知り給ふ。今以て相似たりと申されし。

十一月、秀吉公、三河の吉良に狩して、十二月歸京あり。其狩得たる所の鳥、大小となく皆竿にかけ荷ひ連れて、京中を二行に練り、秀吉御輿に召され、諸士は手毎に鷹をすゑて、聚樂の亭に歩み入り給ふ。主上、皇子、月卿雲客、棧敷を構へて見給ふ。見物の老若市の如し。次の日、竿の鳥を、公卿殿上人より、洛中の町人迄に賦り給はる。

千宗易は、當時茶湯の宗匠、古實を極めし者なり。秀吉公、甚だ茶を好み給ふ故に、宗易其厚恩に誇る。世の人敬うて、疎にもいはす。宗易、茶湯道具の目利して、其

價を定む。是に依つて家大に富めり。大徳寺の僧宗陳古溪長老と親しみ、相議りて、宗易、己が木像を作り、之を寺の山門の上に立たせ置く。此頃宗易私欲を構へ、茶湯道具の目利をせさするに、己に親しき者の持來るは、新きをも舊しといひ、似假物をも正真といふ。我に疎き人の物は、好きをも悪きと貶しめ、真なるをも似物に取成し、其價を擧下げて、人をたぶらかしければ、秀吉公聞きて大に怒り、是れ國賊なり。禁めずば我が過なり、將來の嘲を殘すなりとて、宗易を誅せらる。

大權現前田利家、細川越中守忠興、徳善院法印玄以等、秀吉公の命に依つて、大徳寺に赴き破却せんとす。是れ古溪長老宗陳が所爲として、宗易が木像を、山門の上に立たせ置きたる罪を以てなり。上使等大徳寺に行きて、宗陳等の長老數輩を召して問難せらる。宗陳は、脇指を懷に差して出でたり。其氣象、少しも恐れ臆せずして曰く、佛法の興廢は、時節の到來なりとて、奉行等と問答して屈せず。宗陳思はく、此事若し落居せずば、脇指にて自害すべきものをと、傷む色なし。大權現宣はく、徳善院に依つて詫言いたし、秀吉公の怒を宥められよとなり。玄以歸りて、秀吉公

宗易を誅す

に取成し申されて、御許されあり。大徳寺を破却せずして立てられ、宗易が首を、一條戻橋の許に梟け、彼木像の足に踏ませ、柱にて結立てさせらる、數日の間晒されて、見る人市の如し。

朝鮮國の使者黃允・金誠一・許咸之の三大夫來朝す。秀吉公接對して、返書を送らる。其趣は、秀吉公の母、夢に日輪懷に入り給ふと見て、孕める所なり。誕生の後、相士原ゆめはせして曰く、日は是れ遍く照す徳ありて、萬物、其惠をうけずといふ事なし。此兒、後には世を掩うて、萬民に仰がれん事、疑あるべからずといへり。我れ其詞を忘れず、時の運に乗じて、飛龍の雲に上るが如く、四海を平らかに治めて、誠に日の出でて、萬物皆照されずといふ事なきが如し。我れ思ふに、人間一生、百歳を持つ者なし。其間に、只本朝のみを治めて、徒に月日を費さんや。大軍を起し大明に入りて、一劔の霜を、支那四百餘州の天に満たしめ、扶桑の武威を、異國迄に輝かさんとす。若し其時は、必ず朝鮮を以て先陣とすべし。然れば彌々朝鮮と日本と、交を結ばんといふ事を書送られたり。

同十九年正月元日、秀吉公參内。

秀吉公、屢々家臣の家に遊び給ふ。南都の猿樂を集めて、其舞曲を見物あり。凡そ京中の繁昌いふ計りなし。

四月、秀吉公の妾、淺井備前守長政が娘、古今の絶色なり。たましく男子を産めり。其名を棄と號す。秀吉公、年五十に越えて、終に一子もなし。今年初めて産す。秀吉大に喜び給ふ事、誠に類なし。諸大名御家人等、皆産養うぶやしなを送り、馬太刀等を捧げて之を賀す。從二位大納言大和・紀伊・和泉三州牧豊臣秀長卒す。秀吉甚だ悼み歎き給ふ。是れ秀吉公の舎弟なり。世に大和・大納言と申せし是なり。

秋、棄君早世あり。秀吉憂へ悲しみて、思の火、胸を焦し心を爛たいらかす。諸將御家人等、皆髪を斷りて、歎の情を示す。いつしか京田舎の諸民、家々ひそみ返りて物淋し。秀吉、餘りの悲しさに、憂を忘れんとて、清水寺に遊ぶ。滞留する事三日なり。然れども歎は彌々重なりて、涙は音羽の瀧に争ふ。是に於て、初めて朝鮮に入るべしと思ふ志あり。是れ自ら憂を慰むべき爲めなり。諸臣如何にともすべき事なし。

豊臣秀長
逝去

秀吉公、關白職を秀次に譲らる。世に秀吉を太閤と申す。

秀吉公思ひ給はく、古より此方、支那震旦より、我が朝を取らんとせし事は度々にして、日本より異國を打つ事は、神功皇后の昔、新羅百濟高麗の三韓を、征伐し給ひてより此方、數千歳に例なし。然るに我れ、今賤しきより出でて高位を踏む。富貴榮花、何の不足かあらん。正にたま〜設け得たる掌中の珠、碎けて返らず。泉下の璧、埋もれて見えす。憂甚だ我齡を縮む。大丈夫、あたは百年の命を、此物思ひに隕さんや。秀次を都の守とし、日本國を司らしめ、我は異國大明に入りて、皇帝となりなん。去年書を朝鮮に遣して、此事を告げたりけれども、朝鮮今に返答の書を捧げず、甚だ奇恠なり。さり乍ら先づ大明を抛ち、朝鮮を征伐すべし。朝鮮我に従はば、即ち先陣として、連れて押入るべし。若し従ずば、悉く攻め平げて、直に大明に入る事も、難かるべきにあらずとて、諸臣を集めて評議せらる。大權現・前田利家・浮田秀家・毛利輝元・小早川隆景を以て、天下の大老とし、生駒雅樂頭・中村式部少輔一氏・堀尾帶刀吉晴を以て、中老と定め、淺野彈正少弼長政・德善院玄以・増田右

朝鮮征伐の軍議を催す

衛門長盛・石田治部少輔三成・長束大藏大輔を以て、五奉行とす。此等の諸臣承りて、大に驚きて思はく、秀吉公、棄君御愁歎の色深く、餘りに切なる御物思ひに、狂氣し給ふかと怪まる。頃年方々軍陣の疲れ、去年漸う治りて、諸士安穩の休息を致す。今若し軍兵を異國に出されば、上下の費人民の苦勞、限あるべからず。秀吉公狂亂の故かと、皆同じく思へり。然れども其心に違ふ事を得ずして、皆答へて曰く、此事然るべしとなり。是れ誠に、古神功皇后より此方、例なき大事なり。武將の威を外國に輝かす事、君にあらずば叶ふものあらじと。秀吉公大に喜びて、即ち九鬼大隅守嘉隆に仰せて、伊勢浦にして、大船數百艘を造らしむ。中にも殊に大なる舟を、日本丸と號せらる。其外中國・四國・九州の諸大名、各戰船を調へ兵糧を貯へ、軍勢を催さる。秀吉公、諸國に觸廻らしめ給ふ。來年正月には、先陣の軍兵、早く濱邊に出合ひて、二月三月に至りなば、諸軍次々に渡海すべし。秀吉公は、肥前國名護屋に陣を居ゑられ、軍旅の手遣をなさるべし。名護屋は、古松浦小夜姫が住みし所なり。東國の兵は、舟の利に便なし。名護屋に止り、其國の遠近に依つて、軍兵を出すべし。南海・四國・九州

の兵は、舟の訓練に馴れたれば、皆朝鮮に渡海すべしとなり。又大坂の守護、京都の警衛の士卒を定めらる。秀吉公、御書を琉球に遣さる。其趣は、秀吉卑しきより起りて武運開け、六十餘州を掌に治め、異國遠方より、來り従ふ者尠からず。正に今大明を征伐して、天の授くるを取らんと思ふ。琉球の小國未だ通せず。我れ大明國に赴かん時、必ず來り従へ。若し來らずば、大軍を遣して、打亡さんとなり。琉球大に驚きて、官臣鄭禮を遣して大明に赴き、福建の巡撫使趙參魯といふ臣下に付きて、日本の軍兵來り打つべき由を告ぐる。又江右人許儀といふ者、近年薩摩にありけるが、醫道を業にす。同郷の朱均旺といふ者に付きて、福建の守護に、此由告げたり。大明帝、更に驚き給はず。大に侮りて、何程の事かあらんとて、只海邊に住みける武士に仰せて、兵船を調へられたり。

秀吉公、既に軍兵の渡海すると、名護屋に陣する事を定め給ふ。小西攝津守行長宗對馬守義智・松浦式部法印・鎮信、都合一萬五千人。其外諸軍士一萬八千七百人を一列とす。加藤主計頭清正・鍋島加賀守直茂、都合二萬二千八百人を一列とす。小西行

長と加藤清正と鬪を取りて、日を隔て、先陣をいたす。黒田甲斐守長政・大友豊後守義統・島津兵庫頭義弘、都合二萬五千人を一列とす。福島左衛門大夫正則、其外の軍勢、都合一萬二千五百人を一列とす。蜂須賀阿波守家政七千二百人を一列とす。長曾我部土佐守元親・生駒雅樂頭、其外の軍士、都合九千二百人を一列とす。小早川左衛門佐隆景・立花左近將監宗茂、都合一萬五千七百人を一列とす。毛利右馬頭輝元三萬人を一列とす。凡そ陸路の軍勢十三萬騎、海路の兵士は、九鬼大隅守嘉隆・藤堂佐渡守高虎・脇坂中務少輔安治・加藤左馬助嘉明、都合九千二百人、皆渡海すべしとなり。

東照大權現・大和中納言秀俊秀長の子なり・前田利家徳川秀忠・織田常眞・上杉景勝・浦生氏郷・佐竹義宣・伊達政宗・最上義光・森右近大夫忠政・丹波五郎左衛門長重・木下勝俊後に、京
靈山に隠居して、和歌を詠じて心を樂みける、長嘯子是なり、都合十萬餘人は、名護屋に在陣なり。秀吉公、又別に軍兵六萬人を集めらる。朝鮮渡海の軍士十三萬餘騎、誠に多しと雖も、大明若し多勢にして加勢せば、之を防ぎ拂はん爲めなり。

此年奈良の町人、金銀を借りて、高利を償ふ者あり。富裕の人、之を借し與ふ。其借り者、今借りたる利を、又借したる人より取り、又借の者、又人に借して利を取る。其初めは一割の利にて借りて、二割に又借し、夫を又三割の利にて借し、取りては四割五割に借しければ、後に借る者は、七八割の利を取る。終に金銀を町中に積上げ、家々山の如く取扱ふ。其同類數百人、皆富み榮えて奢り楽しむ。されども畢竟何の爲めにするといふ事なし。只利分を取りて、一旦の榮耀を致し、後日の害を知らず。是れ盜賊の類に同じ。秀吉公聞き給ひて、奈良の町人數十人を磔にかけ、又命に曰く、金銀の多きまゝに、盗み金を假借る事、盜賊と同罪なり。之を宥めて、其借金に一倍して金銀を出せとて、皆奪ひ取りて、公儀の庫に納めらる。世に之を奈良借といへる是なり。

其初め、秀吉公、法度を定めらる。凡そ喧嘩口論を致さん者は、理非をいはず。左右方共に罪科に行ふべしとなり。是れ總じて喧嘩をさせじが爲めなり。爰に泉の境に、富裕なる者茶湯座にして、亭主と客と相論を仕出し、互に切合ひて死す。秀

吉聞き給ひ、法度に背く曲事なりとて、亭主客人共に理非なく、三族の罪科に仰付けらる。喧嘩致しける者こそあらめ、其親其子迄を殺さん事、思設けぬ非快なりとて、様々詫言申せども、許されず。泉境は、古より福人多き所なり。皆大に歎き驚き、財寶を出して之を贖ひけり。秀吉公、即ち贖銅の法に任せ、金銀多く出させ、一門の者共合力して、漸うに命を買戻しぬ。夫より罪科ある者、皆其一族一門親類兩隣にかゝりて、金銀をこき取り給ふ事、數を知らず。是より泉境衰微になりたり。文祿元年、諸國の軍兵等、秀吉公の命によりて、先づ筑紫に赴く。朝鮮に入らんが爲めなり。

二月十日、關白秀次の聚樂の亭に行幸あり。其儀式、大抵天正十六年の如し。三月、秀吉公、筑紫に赴かんとす。家臣申して曰く、君名護屋におはしまして、遙に朝鮮を打たせられんに、大明・朝鮮の書簡、往來する事多からん。文才ある者を、召連れらるべし。然らずば大明・朝鮮の書簡を読み、其返狀をも出す事、叶ふべからずやと申す。秀吉公の曰く、我れ即ち日本の伊呂波を、大明・朝鮮に遣して、此文字に

て、大明日本の言葉遣、別なれば、埒明くまじき事なりと申さんとすれども、御氣色を窺ひて、又申返さず。其夜秀吉公、つらく思案して、即ち相國寺の僧承兌・南禪寺の僧靈山・東福寺の僧永哲長老三人を、名護屋に召連れらる。

文祿元年壬辰三月朔日より、先陣小西攝津守・加藤主計頭打立ちけり。打續く其勢、夥しき事肝を消す。同廿六日、秀吉公、都を立ち給ふ。其出立行列正しく、花やかなる装、京中の貴賤之を見る。此夜秀吉公、攝津國茨木に着き給ふ。後備の軍勢は、廿七日より打立ちて、四日五日に至る迄、引きも千切らず押立ちけり。

四月、秀吉公、安藝嚴島に至り、社邊に眺望し、長門國に至りて、仲哀天皇神功皇后の社拜み、赤間が關阿彌陀寺に詣で給ふ。寺中に、安徳天皇の小影・平家一族の畫像あり。古人詩を賦し歌を詠じける。皆其傍に張付けたり。斯くて名護屋に着き給ひ、諸大名に命せて、旅館を作らせらる。築山・遣水・樹木などは、態とならずして、庭前に籠めたり。四方の要害よりして、内々廊下敷寄屋の取合まで、其風景奇麗なる事、いふ計りなし。秀吉公、即ち四十八萬人の米穀を、諸軍勢舟子・馬の料とて與へ

朝鮮征伐
の師を起す

給ふ。

海路の諸大將、まづ船大將なれば、九鬼大隅守嘉隆が家に集り、軍評定あり。各誓詞を書きて、互に私あるまじき旨七ヶ條を上げて、連判せらる。其後酒宴あり。

先陣小西攝津守行長・加藤主計頭清正・黒田甲斐守長政等十餘萬騎、名護屋を立ちて、壹岐の風本に着き、逆風故に數日逗留す。攝津守行長思はく、風直りなば、舟共一同に出でなん。只諸軍に先立ちて、早く朝鮮の王城に入るべしとて、其夜子の刻計り、小西密に纜を解き、對馬豊崎に至る。加藤・黒田等、小西に出抜かれたりとて、船を出せしに、五六里行きて、又逆風に、元の風本へ吹戻さる。小西行長、豊崎にして風を待ちけれども、吹止まず。されども加藤清正等に先をせられじと、終に風を凌ぎ波を分けて朝鮮の地に着き、釜山浦といふ所に至り、頓て城に取懸けて、急に攻め落し、八千五百餘人を虜にし、生捕二百餘人を得たり。是に通事を入れて、近きあたりの事共を問ひければ、生捕の者申すは、是より卅里行きて城あり。登萊の城と名づく。小西行長、諸軍勢に向ひて曰く、今朝の勦、誠に比類なし。此儘休息せば、

人馬疲を直すべけれども、登萊の城、既に釜山浦の落城を聞かば、要害強く手賦して、攻め難くならん。いざや朝鮮の兩城を、一日の中に攻落して、名を後代に上げ、秀吉の大なる御感に預からんと、軍勢皆一同して、進みて登萊の城に取懸けしかば、釜山浦の敗れたるに創りて、防ぐ事を得ず、皆逃落ちて崩れたり。行長が家臣小西主殿助、木戸作右衛門等、北ぐるを追詰め、九百餘人が首を討取る。小西行長大に喜び、登萊の城に陣を取りて、人馬の息をぞ休めける。夫より又軍兵を進めて、忠州に入らんとす。生捕の者の曰く、忠州は、地形の要害宜しく、王城の固として、軍兵六七萬もやあるべき。而も兵糧豊にして、弓の手垂多く籠れり。此城誠に強ければこそ、王城は騒ぐ事もなしといふ。行長聞きて領く。

備前宰相浮田秀家は、其備第八番なり。されども小西行長、先陣として深入し、敵の虜とならば、秀吉の損なり。我れ又小西に志を懇にする事、年來なり。此度憐まらずして捨つべきか。いざや進みて、小西を救はんとなり。家老以下、皆尤なりと同意す。其夜秀家、船を出して釜山浦に至る。小西が家人城を守る。秀家に逢ひて、行

長が手柄を申す。夫より飛脚を立て、備前宰相秀家の渡海せし事を、告遣さる。行長大に喜ぶ。

加藤主計頭清正、先陣を小西行長にせられて、大に口惜しく思ひて曰く、小西行長が攻通りし路を、踏まん事も無念なりとて船を出し、熊川の方へ梶を直し、岸に着きて陸に上り、小西が軍功を聞きて、いよく怒を起し、今日よりして、先陣を他人にはせさすまじ。我れ獨り先登せんといはれし。

小西行長は、加藤清正等、既に渡海着岸せりと聞きて、家人等と評議して曰く、早く忠州を攻め落して、いよく武名を上げべきとなり。行長が舍弟主殿助及び家人木戸作右衛門、さらば打立ち給へとて、俄に忠州の城に攻め懸りければ、思ひ寄らぬ夜中の事にてはあり、城中亂れ騒ぎ遽てふためきて落行く所に、城の兵六千計落止まり、矢を放つ事雨の如く、劔を抜き鋒を振りて防ぎ戦ふ。行長攻あくみしが、軍兵を分けて、城の後の山下に廻し、小屋に火をかけて焼立てしかば、すはや敵は、後よりも込入るはとて、前後の度に迷ひ、死する者數知らず。城は頓て落ちたり。

其首共を、秀家の許に遣しければ、大に感せらる。朝鮮に、八方の道あり。京畿道・江原道・咸鏡道・平安道・黃海道・忠清道・慶尙道・全羅道なり。此内慶尙・全羅の二道の外は、皆破れたり。慶尙・全羅の二道も、早や危くなりて、防ぎ兼ねければ朝鮮の王城恐れ騒ぎ、上を下に亂れ惑ふ。朝鮮の王李哈は、忠州の城落ちたりと聞きて、大に色を失ひ仰天して、取る物も取敢ず、北の方義州を指して落ち給ふ。后妃女御及び太子臨海君肆・次子順和君瑋は、周章てふためき臥轉びて、兀良哈を指して落ち給ふ。其外臣下等、女子共の有様、物の哀れを止む。

加藤主計頭清正・同遠江守・黒田甲斐守長政・鍋島加賀守直茂等、忠州に會合して、小西攝津守行長と軍評定あり。加藤清正が曰く、我れ必ず先陣すべしと。小西行長笑うて曰く、朝鮮の先陣は我なり。是れ秀吉公、日本にして定め給ふ所なり。今私に改めば、軍法を破るなり。清正が曰く、縦ひ軍法はさもあれ、先陣は武勇にあるべしと。行長怒りて曰く、武勇の事、我れ汝まされりと思はんやとて、同士軍せんとす。鍋島直茂押止めて曰く、先陣は固まことに小西なり。然れども行長は早や武勇智略

を以て、城を三ヶ所迄落されたり。今玉城に入るには、行長・清正兩方に別れて、然るべしとやといふ。小西和ぎて曰く、玉城に行く道二つあり。南大門は、百里計りなれども道に大河あり。東の大門は、百餘里にして、少し遠けれども川なし。何方なりとも、清正の心次第なりと。鍋島等、小西に其實義ある事感ず。清正の曰く、縦ひ大河ありとも、道の近きに進まんとて、南大門に赴く。行長、水練の者廿餘人を、南大門の道に遣し、清正の未だ行着かぬ先に、大河近邊の舟筏を切流したり。清正夢にも知らず、馬を飛ばせて馳せ赴き、大河に打望み見れば、流水藍をもみて底深く、漲り落つる有様、瀧鳴つて凄しく、廣さ十餘町なり。馬人の渡るべきやうなし。河の上下三里の程、舟を求むるに之なし。瀨を尋ねて渡らんとすれども、洲もなく瀨もなし。川端に陣を取りて、兎や角やとする程に、其の日は暮れにけり。小西行長は、玉城に着きて、東大門に至りければ、關貫差固め、石垣高く峙ち、門の高さ十餘間なれば、入る事叶はず。門の傍に水門あり。五尺四方計なり。鐵を以て打付けたれば、如何にともすべきやうなし。木戸作右衛門、鐵炮の臺を外し、其筒

を以て、水門をこぢ放したり。行長、軍勢に法を出して曰く、備を亂すべからず。財寶を濫妨すべからず、酒屋に入る事なかれとて、備を立固めて、斥候しやくこうを入れて見するに、敵一人もなし。行長靜に王城に入りて、四門を守らしむ。加藤清正先陣、漸う王城に至り、大門を開かしむ。番の者曰く、小西行長、昨日既に王城に入りて、我等を居ゑて四門を守護せしむ。御用の事あらば、五三人を入れ給へ。大軍は入れ申すまじといふ。清正聞きていと口惜しく思ひて曰く、今は王城に入りても益なし。國王太子を追懸け止めんとて、城の外に陣取り、家臣を集めて評定しけるやう、我が志、先陣を遂げて、都に入らんと思ひ、秀吉公の軍法を破りけれども、大河に隔てられて、小西早や入りたり。我れ口惜しき事いふ計なし。此上は、國王太子を追止めんと思ふ。明朝にならば落延ぶべし。今夜亥の刻より、軍兵を進めんと思ふと。家人等皆兵糧つかひ、馬も秣飼うて出立ちたり。庄林隼人佐に、軍勢を集め調へしめて、清正打立ちて、急に馳せ行く程に、既に兀良哈の境に至る。されども國王には逢はざりければ、いよく腹立ちつゝ、齒齧をして、空しく歸らんとする所

に、太子の落行くに會ひたり。清正大に喜び、備を立て、相待ちけり。王子は敗羸と疲れたる軍兵數百人を率して、或小家に立入りて休み給ふ。供奉の輩、此四五日は湯水をだに口に入れず、大に飢え渴えて、手足も働かず、力も落果てたり。清正使を遣して曰く、我等追懸け參らせて、爰に來れり。逃れ給ふべからず。早く我陣に入り給へと。太子の軍臣答へて曰く、日本の大將、若し情ありて、太子の命を助け參らせば、汝が陣に入れ奉らん。若し助くまじくば、太子爰にて自害せんと。清正重ねて申す、何ぞ妄に殺し奉らん。王子若し我陣に入り給はば、日本大將軍秀吉公に申うけて命を助け、朝鮮・日本和睦をなし、好を結ばん時は、元の如く送り返さん。縦ひさもなくとも、太子の命は苦しかるべからず。我れ更に猥に僞らすといふに、太子の心和悦あり。近臣申して曰く、軍勢此四五日食に飢えたり。清正來りて食を送れ。多勢にて來るべからず。只十人計り參るべしとなり。清正疑ある故に、數百人に膳部持たせて至り、清正と太子と對座して、禮義行ひて膳を勧め、酒三獻に至る時に、清正の家臣肴を出さんと、立走りけるを、太子の臣等俄に驚き、太子

を欺き害するかと思ひ、半弓に矢を番うて、清正に向ひ放たんとす。清正理をいへども、詞通せず。いよく進む。清正危く見えしかども、すべきやうなし。清正思はく、異國には印判を以て、誓約をなす由思出し、印判を取出し、紙に貼して投げ與へ、太子を捕へて、人質に取りしかば静まりぬ。清正、既に朝鮮の太子臨海君肆次子順和君瑋を生虜り、大に喜びて王城に歸り、書を名護屋に遣して申す。秀吉公大に喜び感狀を給ふ。

太子の落足に、女御后妃、同じく打連れて落ち給ふ。召使ふ女房達は多からず。何れも一尺計の黒き色したる物を、頸に懸け覆面して、走るともなく轉ぶともなく、涙と共に落ち給ふ。首に懸けたる物は、牛の脯なるべし。清正が先陣、之を奪ひ取らんとす。清正制して曰く、女房達の顔を見るべからず、持ちたる物を奪ひ取るべからず、觸れ犯すことなかれといふ。斯くて何にてありけるも知らず。飲食を參らせて、女房の子は逃行かじめたり。朝鮮人、皆清正が武勇骨柄を恐れ、又情深き事を感ず。されども後陣の軍兵亂れ入りて、朝鮮國王先祖の廟を、發おほき崩して、財寶を

取りけるとなり。

六月、秀吉公思はく、朝鮮既に破れたり。大明の兵來るべし。定めて大軍なるべし。味方十三萬騎といへども、敵對なり難かるべしとて、又軍兵六萬騎を、渡海せしめらる。増田右衛門尉長盛・石田治部少輔三成・大谷刑部少輔吉隆・前野但馬守長康・都合一萬七千二百人を一列とす。淺野左京大夫幸長・南條左衛門尉中川右衛門大夫秀政、都合一萬五千五百人を一列とす。岐阜少將・羽柴丹後少將・長谷川藤五郎秀一・木村常陸介・糟屋内膳正・片桐東市正直盛、都合二萬五千五百人を一列とす。伊達政宗は、淺野彈正長政に付きて、朝鮮渡海の事を望む。秀吉公許して、淺野幸長を副へて渡海せしめらる。長盛・三成・吉隆に、秀吉公御書を副へて、朝鮮在陣の諸大將に仰せ遣さる。軍法いよく、定めぬ如く守らせ、先陣は、行長・清正・長政、代るべくいたせとなり。

秀吉公、假屋を濱邊に作らせらる。長さ百數十間、十間毎に柵ありて、料理の間、竈・爐・椀・皿・炭・薪・精・鹽・噌しらびを揃へ置き、漁父泉郎千百人を召して、大綱を引かしめ魚を

取せらるゝに、數もなく引上げけり。鯛千尾に鹽をさせ京に上せ、禁中に參らせらる。其外大政所以下、ほどくに従ひて品あり。其餘の魚共、引上げく山の如く重ねて、諸大將に、假屋に取入れて、様々思ひく料理せらる。秀吉も立交り遊びて、諸軍を慰めらる。小西行長は、數度の手柄を顯せしかども、太子を捕へざる事を恨みて、加藤清正と中善からず。行長は、平壤の古き都に陣を取りて、心に思はく、大明の軍兵來らば、待受けて戦ひ、追崩すか討死するか、此二に極めたりとて、即ち玉城に陣取りし味方の諸將の許へ、使を遣して曰く、鴨綠江を渡りて、直に大明に打入らん事、いと易かるべし。諸大將衆、若し援けて後備し給はば、我れ先陣を致すべしとなり。諸大將答へて曰く、慶尙・全羅の兩道の城共、固く守りて未だ落ちず。是れ大敵前にありといふものなり。然るに今之を差置きて、輕々しく鴨綠江を渡らんば、危き事なり。先づ陣を取固めて、全羅道の城を攻めんには如かじとなり。小西行長聞きて大に怒り、即ち僧玄蘇を使として、書を朝鮮國王李哈に遣しける。其趣は、日本と大明と、軍兵を相構ふる事は、不敵の至りなりと雖も、是れ日本

大將秀吉公の命なり。日本一州一統して、國豊に民般まかんなれば、異國をとらふの望なく、まして財寶を貪る心にもあらず。秀吉公大明を伐たんとする事は、只怨あだを報ずる爲めなり。朝鮮は、日本と大明と、兩國の間に介はさまる。朝鮮若し日本に従はば、何ぞ攻干すべき。夫に城を構へ兵を集めて、我が軍兵の道を妨げ塞ぐ。故に今斯くの如し。大王既に鴨綠江に陣する由、我等向うて攻むべしとなり。朝鮮王李哈大に驚き、大明に飛札を遣して加勢を求め、羽檄の往來、楡の子を引くが如し。大明皇帝諸臣下、大に驚き騒ぎて曰く、日本既に朝鮮を犯し、中國を窺ふ。是れ二百年此方の大事なり。早く加勢を遣して然るべし。されども頃年諸方に亂逆起り、軍兵を疲らかしぬれば、今俄に又加勢の兵も催し難からんとなり。李哈、隙なく加勢を乞ひければ、さらば遣すべしとて、遼東巡按使李時孳、遼陽守道荊州俊、既に大明帝の命を受けて、遼の大將軍祖承訓、遊擊將軍史儒に、軍兵三千を添へて、鴨綠江を渡りて朝鮮を救ふ。

七月、祖承訓、史儒、既に鴨綠江を渡る。兩大將、更に朝鮮の地形を辨へず、又日本人

と相戦ふ法を知らず。折節打續きて雨降りつゝ、晴間もなかりしかば、山水漲り落ちて、馬の蹄爛れ、兵の足損じて、進退心の儘ならず。小西行長、二萬餘騎にて平壤を守る。朝鮮の王城より、道遙に遠ければ、其間諸所に砦の要害を構へ、大友豊後守義統・黒田甲斐守長政・久留米侍従秀包・小早川隆景、籠りて守る。軍若し急ならば、駈出でて救はん爲めなり。

祖承訓・史儒、僅に三千餘騎を率して、平壤の安定館に至る。小西行長之を聞きて、歩立の兵を以て、夜打に寄せたり。大明の兵騒ぎ亂れて、落行く者も多かりき。其夜は軽く引取りて、行長、次の日安定館に取懸けて攻めけり。甲冑・馬具・足・旗・相符、皆華やかなり。祖承訓・史儒と、行長と相戦ふ所に、大明の馬共、日本の武者の出立を見て、恐れて進まず。兩大將、軍兵に教へて、馬より下りて、歩立かちだちになりて戦ふ。軍兵皆泥土に足を踏入れこね返して、駈引自在ならず。行長急に打つて、馬にて乗倒し、駈惱まして打破りしかば、備亂れて史儒討死す。祖承訓は、只一騎落延びて助かる。三千餘騎の軍兵、僅に十餘人命を助かりて逃歸る。大明聞きて震ひ驚く。

おはまんどころ 大廳秀吉公の御母、京都に坐して、女房達に仰せけるは、太閤は朝鮮に坐するや。京を去ること幾千里ぞや。之を平げん事、何を限とする。吁再び見る事あるべからずや

と、常には憂へ給ふ。女房達答へて曰く、太閤は、肥前國名護屋といふ所におはして、諸國の大將達計り、朝鮮には遣し給ふなりと申せども、大廳、更に信まこととも思ひたらず、終に戀ひ悲しみて病となり、日を重ねて重くなり給ふ。關白秀次、屢見廻り給ふ。太閤聞き給ひ、急ぎ名護屋より立ちて、諸事暫く大權現に委せ置き、夜を日に繼ぎて京に歸り給へば、大廳は、早空しくなり給ふ後なり。秀吉公絶入して甦り、呆れ惑ひ涙なし。醫師、藥を奉るに、人心地附きて、涙雨の如くして、書院に出でて宣はく、此度母の死期に會はず、千歳永く再會の時なし。悔みても猶怨ありとて、徳善院玄以に命じて、大徳寺にして、王仲和尚を以て、葬禮いらいめ厳しく行はれ、御弔様々なり。

九月、母堂大廳の忌終りて、秀吉公、又名護屋に赴き給ふ。敕使來りて、渡海の事を止めしむ。秀吉、敕答申し給ふは、救命固に忝しと雖も、大軍を朝鮮に遣し、軍既に

勝つと雖も、大明より多勢若し來り救はゞ、勝負知り難し。我れ京都にあり乍ら進退すべきや。救命を背くにはあらず、只速に、大明、朝鮮を攻平げて、我朝の武威を輝かさん爲めなりと。敕使歸りて奏聞しければ、主上叡感ましませり。此度名護屋より上洛の時、赤間が關に至りて、御舟、石に當りて碎けつゝ、既に溺れ死なんとし給ふ所に、毛利右京大夫秀元輝元の一男なり、幼少なる故に在國してありし、名護屋御見舞に參り、供奉して上りしが、急に我が乗りし舟を差寄せ、秀吉を助け奉る。秀吉甚だ喜び、聲にせんと約束し、船頭赤石與次兵衛、首を刎ねらる。

沈惟敬といふ者は、異國にして科に落され、一族皆誅せらる。我身も殺さるべかりしを、逃げて潜に日本に來り、小西攝津守行長に知られて住みけるが、世代りて本國に歸り、吳妓陳澹如に知音して親しむ。澹如が僕に、鄭四といふ者、數年以前、日本に來りて捕へられ、當年逃げて歸り、沈惟敬に逢うて日本の事を語る。惟敬、元より志す所あり。鄭四が物語を聞きて思はく、今大明、兵を出して日本を防ぐ。此亂に當つて我が勳功を立て、家をも榮えんと思ひ、大明の都に行きて曰く、我れ能く日本

の事を知れりと。此頃司馬石星といふ者、朝鮮の事を司る。其妾に、文表茂といふ女房あり。吳妓澹如が家に遊びて、沈惟敬が言ことばを聞きて、司馬石星に語る。石星大に喜びて、家に抱へ置きたり。祖承訓が敗軍の後、石星謀をなす。夫れ今大軍を起さずば、日本を防ぐ、事叶ふべからず。又容易く大軍集め難し。其程先づ惟敬を遣して、和睦の事をいはせ、其間に大軍を集めんと謀りて、惟敬を遣す。沈惟敬先づ金銀錢を石星に乞取りて、之を以て日本の諸大將に賄して、和睦をなさんといふ。石星之を與ふ。惟敬、即ち金銀を散らして、織物等の奇麗なるを買ひ求め、朝鮮に來り、使を平壤に遣して、小西行長が心を取る。行長元より和睦を好む。惟敬と小西と、乾伏山けんぷくの麓にして對面す。惟敬、極めて和睦の事を述べ。行長七ヶ條を上げて、此事うけがはゞ、和睦の議に従はんと。惟敬先づうけがふ。此故に行長及び諸大將、皆心を許して、大明の返報を待つて、平壤の要害をも疎にし、増田長盛、石田三成、大谷吉隆も、皆同じく怠り、朝鮮の諸城をも、攻口を甘くつろげて、只晏然として日を重ぬ。小西行長、書を惟敬に遣す。其趣は、日本久しく勘合船の通路なし。秀吉、數

年、朝鮮と親をなさんと求むれども、日本の望に従はず。此故に軍兵を遣して、攻
亡さんとす。然るに今足下平壤に來りて、和睦せんことを求む。是れ國家太平の
基なり。足下既に大明帝に奏聞し、使者を日本に遣し、交親の誓約をなさば、幸
之に過ぐる事なからん。官の使若し來らば、五十日を以て期とし、日本より甲冑、弓、
箭、劔、太刀を送らんとす。次の日惟敬、日本の鐵炮を求む。此時、又小西行長、書を
遣して曰く、朝鮮國王李昫は、義州におはすといふ。足下彼に行きて、是に告知らせ、
少時も遅々せず、早く大明に歸り、和親を五十日の間に定むべしとて、官位姓名を書
載せたり。曰く、日本國攝津州前司小西祕書少監豐臣行長、傍將對馬州前司宗拾遺
侍中豐臣義智なり。惟敬は、大明に歸り、奏聞すと雖も、諸臣下の議定、未だ果さず。
十月、大明帝王、即ち總兵將、李如松を提督軍上將とし、南北守護の軍兵、多く差加へら
る。侍郎武者宋應昌を、經略使軍奉とし、大軍を催して、朝鮮を救はる。宋應昌は、能
く日本の事を知りたる者なり。應昌は、遼陽に赴く搦手なり。提督李如松は、鴨綠
江を渡り、大手の方なり其軍兵を二列に分つ。中列の大將は、楊元と名づく。右列の大將

は李如松、左列の大將は張世爵と名づく。吳惟忠といふ者は、南兵三千餘人を率し
て、右列に屬し乍ら、遊軍の備の如し。凡て軍兵五百餘人なり。同月廿七日、山海
關を打立ちて、十二月廿五日、軍兵を調へ備を設けて、鴨綠江を渡る。

此年、呂宋國より、古き壺多く來る。茶を能く持ちて損せず。世の人、之を眞壺と
名づけ、又は蓮花王と號して、愛し弄ぶ。商人等、海を渡り持ち來る事、百餘りに及
ぶ。廬同が道を尋ね、陸羽が風を慕ふ。世の好事の數奇者、爭ひ買求む。秀吉公聞
きて宣はく、異國より新に來る者、何ぞ言上して、公儀をも伺はず、私に之を買おぎ
のる。固に罪科ありとて、奉行を遣して、家を闕所し追出さる。其買ひたる者に
は、直の金銀に一倍して出さしむ。國主大名と雖も、皆斯くの如し。未だ嘗て許され
ずとかや。

將軍記第十七終

將軍記第十八

豊臣秀吉記 下之一

文祿二年正月、秀吉公、名護屋にして御越年あり。諸大名、元日の賀儀申す。城州八幡の暮松新九郎、年頭の御禮に下向せしかば、秀吉公仰に、我れ猿樂を習ひて自ら慰とし、又諸軍在陣の輩をも、心を延ばさせんと思ふと。暮松大に感じ奉る。諸臣皆曰く、秀吉公、年既に開け給へり。只同じくは止め給へかし、さぞ嗚呼がましからめと。されども暮松を召しけるに、弓八幡は、天下を治め、民を恵む能なればとて、是より教へ初め參らせて、五十日の内に、五番の仕舞を習ひ給へり。近習伽衆に、仕舞の善惡、扇の差引、包ます申上ぐべしとなり。既に習ひ熟せられければ、舞臺にして御能ありしに、見る者大に感じ譽め奉る。是に於て大名諸士、相共に舞曲

をなして慰み給ふ。暮松斯くて御暇申しければ、秀吉公、即ち金銀小袖を興へて返さる。

大明の將軍李如松、軍兵五萬騎を率して、安定館に至る。朝鮮の軍兵多く加はりて、廿萬人に及べり。行長先づ其軍を試みんが爲めに、軍兵を出し戦はしむる所に、明の兵李寧といふ者、行長が小勢を押包み、打靡かすに、日本勢叶はずして七人生捕られ、残る兵、皆城中に引入りたり。小西行長、即ち城を固く守りて出でず。

李如松軍兵を進め、平壤の城を、十重廿重に取懸けて攻むる。平壤の有様、東には大同江とて、深く廣き江あり。西北は皆山なり。南一方は平地に續きて、城の外二里計に牡丹臺あり。臺の傍に柵をふりて、砦の要害とす。平壤の城中は、僅に一萬五千人なれども、死を一舉になして防ぎければ、攻落すべきやうもなし。李如松、楊元、張世爵、軍兵を進めて、先づ牡丹臺の砦を攻め落せとて、押寄せ攻め上らんとす。日本の軍兵、能く之を防ぐ。李如松等、即ち吳惟忠を以て、牡丹臺を攻めさせ、其外の軍兵は、皆平壤に向ひて攻めけるに、行長曰く、小勢を以て大軍を破るには、夜討

に如くはなしとて、夜半に兵を出して襲ひけれども、中々叶はずして城に歸る。次の日、寄手三方より一同に進み、かづき連れて攻上る。小西行長、力を勵まし手賦して、防ぎければ、大明の軍兵攻めあぐみて、少し引色に見えければ、城中城戸を開きて、突いて出でつゝ戦ふ。城の西の手に、防ぐ兵少なかりけるを、張世爵之を察し、南兵一萬人を率して、急に進みて攻め入りつゝ、鬨の聲を揚げたりければ、大明の軍兵、すはや城は攻め落さるゝぞ、進めやゝとて、同勢同じく打つて上る。其勢、誠に防ぎ難し。小西行長防ぎ兼ねて、諸軍を引上げ本城に籠る。李如松、續いて本城を攻めしむ。城中、今は遁れぬ所なり、心靜に敵を打とて、鐵炮を多勢の中へ打出すに、凡そあだ矢はなかりけり。寄手打立てられてゆらいたり。日既に暮れにければ、攻口を甘げ、明日は必ず攻落すべしと、李如松等大に勇む。小西行長が兵、一千六百餘人討たれ、明の兵も、四五千計り死しけれども、寄手は更に痛む事なし。初め行長、大明の軍兵、多勢にて來ると聞きて、使を大友義統・黒田長政・久留米秀包が許に遣して曰く、大明廿萬人を率して、近日我が平壤を攻めんとす。

急ぎ後詰せらるべし、ゆめく怠り給ふべからずとなり。然るに大友義統、素性物弱く臆せし人なれば、相救ふべき心なく、結局大明廿萬騎の大軍を聞きて、大に恐れ震ひつゝ、既に大軍斯くの如くならば、小西行長討たれんに治定なり。愁なる加勢して、用なき死をせんよりはとて、大友義統は、取る物も取敢ず、朝鮮の王城指して逃歸る。黒田長政・久留米秀包も、手勢少なき故に來らず、まして其道に大河あるを以て、評議區々なるに、日を重ねて終に決せず。斯くて小西行長、城中の兵を檢ふるに、或は死し、或は痛手負ひ、又は落失せて、殘る兵、僅に五千計なり。行長が曰く、加勢は來らず、城兵は少し。明の大軍を防ぐべき事叶ふまじ。又徒に討死せんよりは、軍は之に限るべからず。只先づ落ちて、重ねて謀らんには如かじとて、其夜密に城を出でて、王城に歸る。李如松、之をば夢にも知らず、未明に取懸けて、本城を攻むるに、城中更に一人もなし。李如松大に悔みて曰く、昨日急に攻め落すべきを、行長を取逃しける口惜しさよとて、軍兵を分つて追懸けしかども、早行長は、王城に歸り入りければ、空しくして引返す。

行長既に王城に歸る時、長政・秀包が砦に立寄りて語りけるは、李如松が大軍押來らんとす、早く我と共に王城に歸れと。長政・秀包答へて曰く、未だ敵の旗をだに見ずして、聞逃せば、武夫にあらず。足下は粉骨を盡し給へば、先づ速に歸り入り給へ。我等二人は、小早川隆景が陣に加はり、三人同心して、大明の兵と戦を決せんと。行長曰く、夫は御心次第なりとて、さしても強へず。増田長盛・石田三成・大谷吉隆の三奉行は、小西行長が平壤の難儀に及ぶ由、早く王城に歸るべしとなり。隆景答へて曰く、我れ渡海して、此地に來るよりは、命生きて再び日本に歸るべしと思はず。今明の大軍に逢うて、太刀の鋒より火花を散らし、馬の蹄に敵軍を蹴立て、箭をも厭はず、矛をもいたまず、大軍を物ともせずして、命を戦場の草の露と落さん事、是れ老後の幸なり。何國に立退くべき。縦ひ我れ死したりとも、何の恨かあらん。百萬の大軍來り向ふといふとも、我れ一足も、後には退くまじきものとなり。使歸りて此由をいふ。増田・石田之を聞きて、少しは恥づる心ありて曰く、大河を渡りて、大敵に戦はん事は、是れ上策の武勇にはあらず、又隆景を打捨て、歸らんも

難儀なりと。大谷が曰く、我れ必ず隆景を歸り入らせんとて、自ら行きて様々いひければ、隆景が心服して、大谷と打連れて王城に歸る。

加藤主計頭清正は、軍兵を兀良哈の境に出して、村里を取掠め、城を金山に築きて、加藤與三右衛門に、軍兵二千を添へて籠め置き、又一城を橋中に構へて、九鬼四郎兵衛・矢野助左衛門・山内甚三郎に、三千餘人の兵を添へて籠め置き、清正は威鏡道に至り、百姓等を憐み、酒肴を與へらる。百姓等大に喜ぶ。此故、人皆清正に思付きたり。斯る所に盜賊等、蜂の如くに起り立ちて、清正が釜山浦に歸る道を切塞ぎけり。王城にある諸大將達、如何にもして清正を呼取らんとす。浮田秀家、其家老三人の連署を遣し、速く王城に歸られよとなり。清正答へて曰く、我も歸らんと思ふ心ありと雖も、釜山・橋中兩城に、籠め置きし軍兵共の捨て難ければ、此等をも引連れてこそ歸らめとて、清正、夫より威鏡道を打立ちて、齋藤立本・庄林隼人・龍造寺又八郎、其勢五千人を遣して、金山の城加藤與三右衛門を迎へしむ。清正、跡より續いて進む。齋藤立本・庄林隼人等、既に金山に至る時に、盜賊等起りて金山を取

圍む。齋藤・庄林此由を見て、鞭を上げて馳せ寄せ、急に後より攻懸れば、盜賊等敗北して、討たる者甚だ多し。立本・隼人等城に入りて、與三右衛門を尋ねれば、敵と戦うて、討死たりといふ。立本・隼人大に憐み歎き、其屍を灰になして歸る。其後清正軍兵を率して、盜賊等を攻め平げ、金山・橋中の城兵を合せて、打連れて王城に歸る。

李如松十萬騎を率して、進みて開城といふ所に至り、王城の有様を聞き窺ひ、戦を決せんとて、忍を入れて窺はするに、張通事といふ者、李如松にいふやう、日本の武勇ある者共は、皆平壤の軍に討たれたり。王城にある者共は、是れ弱き臆病の軍士等にて、物の用に立つべくもなし。恐るゝに足らず。之を攻干して、大功の名を擧げん事疑なしといふ。李如松誠なりと思ひて、南兵をば開城に止めて、大明の軍兵計りを率して、高昇・孫守廉・祖承訓等二萬人を前陣とし、朝鮮の兵を後陣に立て、開城の大河を渡り、碧蹄館といふ所に着く。小早川隆景先陣として、立花左近將監・宗茂・久留米秀包・筑紫侍従等、之に加はりて評定す。敵既に開城にありといふ。定

めて是へ寄せ來らんかとして、斥候を遣して見せしむ。一夕立花宗茂が兵、李如松が兵と行合ひて、打合ひ戦うて相引にす。夜明方遙に見渡せば、一里計向ふに、大軍群りて、夥しく備を調へて、只今進み來らんとす。王城の諸大將、各先陣を争ふ。小早川隆景が曰く、某思ふ仔細あり。前陣は我にせさせよ。日本と大明の大事の戦は、今日にあり。我れ年老いたりと雖も、他人に先陣は讓るまじといふ。諸將うけがはず。隆景強ひて望みければ、石田・増田・大谷三奉行、さらば先陣は、隆景に讓り給へとあり。諸將此上はとて、其議に従ふ。隆景、我が人數を分つ。一陣は、栗屋四郎兵衛三千人、二陣は、井上五郎兵衛三千人、三陣は、隆景一萬騎にて押出す。立花左近將監宗茂二千五百人、久留米秀包・毛利大藏少輔元康六千騎は、遊軍となり、横合に懸らんと、備を隆景が陣の傍に立てたり。李如松が前陣高昇・孫守廉・祖承訓等と、栗屋四郎兵衛と相戦うて、栗屋引退く。井上五郎兵衛、入替りて戦ふ。大明の兵、勢ひ懸る。井上大音上げて、軍兵を進めて曰く、士の戦場に望む事は、死するを以て本意とす。逃げて生くるは恥なり。只一足も進めや者共、千騎が一騎にな

る迄も、引くなくと下知して戦ひしかども、さすが小勢なれば、大軍靡け難くて、井上既に敗北せんとす。其時立花宗茂、毛利元康、鼓を打ち馬を進めて、急に横合より打つて懸り、魚鱗に立て、中を衝破る。大明の兵、中をあけて開かんとす。小早川隆景之を見て、兵を進め打つて懸り、四角八方に駈廻り、雷の如く走り、電の如く閃きければ、李如松も、軍兵を進めて相戦ふ。李如柏、李如梅、李寧、李有昇等、同じく進みて戦ふ。互に汗馬の息をも繼がせず、追うつ返しつ入亂れて、巳より午の刻に至る迄、勝負はなし。隆景が兵共、明の大將李如松を討たんと目に懸けて、突退け、突退け進み懸る。李有昇、駈合ひく押隔て、手元に進む日本勢數十人切伏せ、終に鐵炮に中つて、馬より落ちて死したり。楊元は、王城の軍、大明急なりと聞き、開城より馳せ來る。李如松新手の加勢に力を得て、又進めて打つて懸る。隆景、宗茂、元康力を合せて、大に切つて廻るに、大明開き亂れて、崩れ立ちけり。李如松馬より落ちて、起上らんとする所を、井上五郎兵衛、是れ大將なりと見知りて、透間なく馬を駈寄せ、既に討たんとせしかば、大明の軍兵百餘人集り、李如松を他の馬

に助け乗せて、敵進めば突拂ひ、落行きけり。井上、其志を遂げざる事を口惜しく思ひ、齒嚙をして悔み怒る。隆景、宗茂、元康等、勝に乗りて追懸けしかば、明の軍兵、開城河に溺れ流れて、死する者數知らず。

凡て今日の軍に、明兵死する者、一萬餘人に及ぶ。日本の諸將皆曰く、李如松今は創りぬらん。軍兵等臆病神の覺めぬ内に、勝に乗りて追討たば、心の儘に打取らんものと。隆景止めて曰く、小勢を以て大軍を追はれん事、若し喰返りて打つて懸らば、由々しき大事なり。弓矢しまりたる良將は、さもなき事ぞやと。是に依りて王城に歸る。

李如松は、小早川隆景が武勇に後れを取り、既に軍兵を引拂はんとせし所に、南兵の新手、鐵炮五百挺を以て馳せ加はりしかば、李如松力を得て、開城に堪へて陣取り、大明の加勢を待ち居たり。

日本の諸大將皆曰く、大明の軍兵、誠に恐るゝに足らず。いざや開城に押寄せて、一攻攻めんといひしかども、大明廿萬人、猶開城に籠りければ、さすが大軍なるに

心置きて、猥に兵を出さず、明の兵の寄せ來るを待ちて止まりぬ。

王城の西南に當りて大河あり。川端に、數十間の倉あり。兵糧十萬石を籠めて、王城の諸將、今年の支度として、近き邊の柴木を、伐取りて薪とす。

安南府に兩山あり。山の間に沼あり。後は山嶮しく、巖峙ち、二方は沼深くして、馬の足立たず。南の方は、大河漲り流れ、西の方は山道細く、開城に行く道なり。

大明の兵、爰に砦を構へ柵をふり、柵の内には石垣高くして、兵多く籠れり。王城の諸大將、開城の軍に逢はざる事を残り多く思ひ、此砦を攻取らんとて、石田・増田・大谷に評定す。之を聞きて即ち二萬餘騎を率し、諸將にも牒合せず、山の峯に取上りて、城中を窺ふに、兵糧を炊ぐ煙も見えず、人の聲も聞えず。増田右衛門・加藤遠江守・長谷川藤五郎・木村常陸介等、大に疑ひ侮り、各能き兵十餘人を遣して、之を見せしむ。漸く城下に進みて見聞くに、城中物さびて靜なり。是に於て軍兵一同に詰寄せて、攻上らんとす。城中の兵折合ひて、大木大石を投懸けて防がんとす。増田・加藤等、自ら旄上げて軍兵を進め、柵を引退け外廓を打破る。城の兵驚きて、

矢を放つ事雨の如し。之に射白まされ、増田等、忽には攻落す事叶ふまじとて、軍兵を引入れんとす。城中機に乗りて、打つて出でつゝ追懸け、半弓を以て之を射る。増田・加藤等、大に亂れ逃ぐる。隆景・清正・行長皆曰く、増田・加藤等、定めて後れを取るべし。いざ行きて迎へんとて、兵を率して打出でたれば、追懸くる城の兵共此由を見て、取つて返し城に入りけり。次の日小早川隆景等、斥候を遣して見せしむるに、城中に軍兵一人もなし。皆落失せて開城に歸りぬ。昨日増田等押寄せて、柵を引退け、外廓を打破りたる時に、城中臆病の者共、恐れて皆逃走り、南大河に溺れて、命を隕せし者數を知らず。若し再び寄せて攻むる程ならば、城中は塵にならんものをと、増田等、悔みけれども益なし。隆景之を難じて曰く、此城落ちたりと聞かば、李如松等も、開城に足はためまじきを、押返して又攻めざる故に、城を退きける口惜しさよといへり。

増田右衛門尉・石田治部少輔・大谷刑部少輔連判して、書を名護屋に遣し、平壤・開城・川兩度の戦を告げたり。秀吉公、深く隆景・宗茂が軍功を賞し、感狀を遣さる。又大

友義統が臆病神の附きて、小西行長が、平壤の急難を救はざる事を、秀吉大に叱りて宣はく、是れ武士たる者の心にはあらず、日本の恥なり。武士たる者は、能く武道を嗜むべし。義統に似る事なかれとなり。

二月、近衛前左大臣信輔公は、朝鮮の有様御覽せん爲め、頻に渡海の志おはせしを、帝聞召し、之を止め給ふ。秀吉此由聞きて曰く、無益の尤甚しきは此事なりとて、徳善院を以て、渡海の事御無用なるべしと申させらる。是に於て帝より、御宸筆の敕書を、名護屋に遣し給ふ。秀吉之を頂戴して、大に喜び給へり。此故に近衛信輔公、思ひ止まり給ふ。

李如松、使を大明の京都に遣して曰く、近頃日本將軍關白秀吉、自ら廿萬騎の軍兵を率して纜を解き、帆を上げて朝鮮に來ると。大明大に驚き騒ぐ。宋應昌が許より、劉綎・陳璘に飛脚を立て、加勢す。大明の帝、黄金廿萬兩を出して軍陣の用として遣さる。是に於て李如松、即ち李寧祖承訓を以て、數十萬騎を相添へ、開城を守らしむ。楊元は、平壤より軍立し、李如柏は、寶山に陣を取り、查大受は、臨津といふ

所に陣を取る。此時備前宰相浮田秀家は、龍山に陣取り、兵糧數萬石を積み置かる。查大受、即ち死生不知の溢者を選び、閑道うらみちより廻して、兵糧庫に火をかけて、焼き失はせけり。是より秀家、兵糧乏しくなれり。

今春太夫八郎・觀世太夫左近、名護屋に來る。是れ秀吉の召し給ふ所なり。秀吉公、彼等が家に祕藏する面を見んと、仰ありける故に、持來りて見せ參らす。秀吉公、之を摸うつさせんと思召す。山城宇治郡醍醐といふ所に、隅坊すみのばとて、能く面を摸す者あり、急ぎ彼を召して摸さしめらる。隅坊命をうけて、今春家の名物小面・般若・小尉・三光尉・觀世家の名物ふかひ面・皺尉・近江女等を、十餘日の間に摸し立てたり。秀吉公比べ見給ふに、見分け難く似せたり。秀吉公大に喜び、大権現・利家に議して、隅坊に銀五十枚を下され、摸面うつしめんの天下一の號を給はる。隅坊は、會稽の錦を披きて、醍醐に歸りぬ。

三月、朝鮮王城の諸大將十萬餘騎にて、暫く軍を止めて、徒に數日を送る。加藤遠江守・細川越中守忠興・長谷川藤五郎秀一・木村常陸介等七人心を合せ、他の兵一人も

交へず、手の郎從都合二萬騎を率して、晋州に赴く。晋州は、朝鮮名城の第一として、王城を去る事四日路なり。初め朝鮮國王李哈、王城を落ちて義州に走り、代々の寶物共、皆此晋州の城に運び納めて、武勇の者二萬人を籠めて守らしむ。加藤細川等之をば知らず、只軍兵僅に籠れりと思ひ侮りて、さしも嶮しき山坂を二里計り、息をも繼がず打圍みて、城下に着くと等しく、備をも立てず、各我先にと、城に攻入らんとす。城中には、寄手小勢なり。此城を攻落さんとする事は、螻蛄が斧を上げて、流車に向ひ、蚍蜉の翅を以て、大樹を動かさんとするが如くならんというて、軍兵等突いて出でつゝ急に戦ふ。加藤細川等の七大將、散々に打亂されて、日も漸く暮方になる。城の兵勝に乗り、新手を入替へ、折重りて進みしかば、七大將進みて戦はんとすれば、軍兵疲れたり、退かんとすれば、山嶮しくして引取り難し。進退爰に谷りたり。されども勇氣を勵まして、進む敵を打拂ひ、葛蘿に取付き、山上にかゝり上り、傍々はよく王城に歸る。其間に、討たる者數を知らず。是に於て諸大將評定して曰く、斯くの如くにして日數を送らば、秀吉公、定めて我等を怒り責

め給はん。軍難儀の由告げ奉り、加勢を請うて李如松を打取り、慶尙・全羅兩道の城共を攻め取り、王城と釜山浦との通路を開くべしとて、書を名護屋に遣す。大明の軍兵廿餘萬騎、開城にあり、味方僅に十萬人なり。固く王城を守ると雖も、彼等能く地形を知り、軍兵又日々に増り月々に重なる。是にては中々敵を塵にする事叶ふべからず。此故に先づ試に晋州を攻めさせけるに、城中兵多くして、攻落す事叶はず。黄海・忠清の二道は、手に入ると雖も、國民所々の險難に集りて、通路を切塞ぎ、全羅・慶尙兩道を平げ乍らも、味方往來する時は、跡を切り前を塞ぎて妨ぐ。若し此道々に砦を構へて、軍兵を入置かば、此妨あるべからず。夫も味方に兵少なき故に、人數を分けて遣し難し。今加勢を給はらば、李如松と戦ひ、目の前に大利を得て、直に大明に攻め入らん事、何の恐かあらんとなり。秀吉公、其書を見て宣はく、早く軍兵を遣せとて、安藝侍從毛利秀元二萬人を渡海せしむ。其後秀吉公と、大權現及び前田利家と、晝夜軍評定して、加勢を多く遣さんとす。然れども名護屋在陣の軍勢、僅に十萬騎あり。之を分ちては遣し難し。

京都守護の軍勢も多しと雖も、之も猶分けて遣し難し。大坂の城守護の兵は僅なり。又日本の固も大事なれば、種を盡して、朝鮮に加勢すべき事も叶はず。されば今は朝鮮に遣すべき兵なし。是に於て秀吉公、涙をはらくと流して曰く、口惜しき事かな。我れ小國に生れて、大將軍たりと雖も、軍兵の數少なうして、大明を足の下に、履み從ゆる事の叶はざる事よとて、遺恨深く思ひ詰めて、齒を切り手を拳りて立ち給ふ。之を見聞きける輩、皆其大機なる事を感じず。

岐阜中納言秀信、城介信忠の嫡子なり、朝鮮より名護屋に歸り來りて、淺野左京大夫幸長が家に入りて、夫より秀吉公に對面あり。淺野幸長朝鮮國に渡海せしに依つて、其家に入り給ふ。秀吉接待して、慇懃にもてなし給ふ。

丹波中納言秀勝、御見舞として名護屋に來り、秀吉公に謁せらる。秀吉深く恩顧あり。四月、秀吉公、名護屋にして猿樂の能を催し、諸將を慰め給ふ。又茶湯の興行あり。皆是れ在陣退屈なるべき事を察して、諸軍を慰めらる。

沈惟敬、既に大明の京より開城の陣に來り、李如松に對面して、司馬石星が意を述べて、和睦の事を談す。又小西行長が許に行きて扱ひけり。行長、去年沈惟敬に約して、七ヶ條を立てたり。一には、和睦の事、二には、日本既に朝鮮の四道を攻め取りたり。之を國王李昫に返さず、日本より領知すべき事。三には、朝鮮より運上入貢せん事、古の如くすべき事。四には、明の帝より、秀吉公を、日本の國王と崇むべき事。其餘の三ヶ條は、祕して世に披露なければ人知らず。増田・石田・大谷・小西等、朝鮮在陣の久しきに苦勞退屈して、強ちに歸國の思ひ止め難し。此故に沈惟敬が言葉に従ひ、和睦の議を好む。沈惟敬、如何にもして秀吉公を以て、大明帝の婿にせんと思ひて、屢其才覺を致す。其後惟敬と行長と、約をなして曰く、行長いふ所の七ヶ條の事、皆うけがはら、朝鮮の二人の王子、及び其以下生捕の輩を返し送り、又王城の諸大將及び軍兵、皆王城を開渡して、釜山浦に退きて歸朝せよ。然らば李如松も兵を引き、大明に入るべしといふ。行長、元より和睦の事に張本たり。さり乍ら平壤の軍兵等と沈惟敬と、内通の謀もやあるらんと思ひて、しかとはうけがはず。惟敬既に大明に歸り、司馬石星と密に評議し、監生徐一貫・生員謝用梓を行

長が許に遣し、金子綾羅を多く送りて、和睦の事を調へしむ。小西行長及び増田・石田・小早川等、皆加藤清正と中善からず。此故に清正が、二人の太子を生捕りける大功を捨てんが爲に、行長・長盛・三成・吉隆一同に、和睦の儀宜しからんといふ。其上兵糧漸く乏しく、軍兵等多く瘡を振ひ、疫癘に逢ひて、死する者少なからず。此故に皆先づ釜山浦に行退かんとす。沈惟敬喜びて、いよく相計らふ。行長等、又評議して曰く、朝鮮の王子を送り返さん事は、秀吉公の命おほせにあらずば、計らひ難し。軍兵を退くる事は、増田・石田・大谷が意に任すべしとなり。増田等即ち廿一日を以て、軍兵を退くる日限とす。日本の諸大將、去年より王城に陣取りし故に、朝鮮の農人・商人・細工人、皆町家に歸り來りて、己々が業を務むる。夫れ日本軍兵の數より多し。是に依つて、増田等評議して曰く、若し此農人・商人・細工人等、密に大明の兵と馴合ひて、我等引退く道に取懸らば、釜山浦にも、足をたむる事叶ふまじ。彼農人・商人等を、追拂ひて後に引退くべきや。縦ひ追拂ひたりとも、夫を怒りて、彼等群り集りて妨げば、追はざる方まさらん。若し又農人原一所に呼集めて、片端よ

り打殺し燒殺して後、軍兵を引拂はんか、夫も罪なき者共を、塵にせん事も不憚なりと、區々まちまちにして一決せず。此時小早川隆景は、高枕して、大軒かきて臥し居たり。石田治部少輔三成、呼び驚かして曰く、諸大將評定區々まちまちなるに、此中に寢入りて、之を知らざる眞似するや。今軍兵を引取るは大事なり。能き分別あらば、申さるべしとなり。隆景答へて曰く、人々の仰、悪しからんとはあらず。我れ何事ことごとをか言を費さん。然れども又一つの謀あり。試に申して見ん。悪しからば打捨て給へや。今夫れ諸大將の軍兵等、朝鮮の町人と打交り居て、顔を見知られたり。此方には見知らず。其中に明朝鮮の士も、立交りてあるべきか。先づ小荷駄等を先に立て、次に火を陣々にかけて、煙の紛れに、軍兵共を引取るべし。陣小屋共燃え上らば、明の兵共、後に附く事あるべからずとなり。増田等、誠に此儀然るべしとて、火を陣屋陣屋にかけて燒上げ、煙の紛れに引退く。商人・細工人等の庶民等は、火を通れんとて逃遁る。朝鮮の臣等、李如松が陣に至りて曰く、日本の兵既に退き歸る。追懸けて打止めば、數を盡して亡すべきといふ。李如松が曰く、孫子が詞に、歸る師

をば、こひひ過る事なかれといへり。若し食返くひかへして打ち來らば、味方大なる後れを取るべし。其上臨海・順和二人の太子生捕られてあり。彼日本の兵を追討たば、太子再び國に取返し難かるべきなりとて、後を追はず。

日本の諸大將、既に軍を返して、善山府釜山浦に陣取りて、大明の使者を相待つ所に、沈惟敬と徐一貫・謝用梓と共に、名護屋に來り拜謁す。秀吉大に喜びて、羽柴下總守勝雅を、東照大權現及び前田利家に遣して宣はく、大明の兩使をもてなさるべしとなり。是に於て謝用梓龍岩と號すは、大權現の陣に入り、徐一貫唯吾と號すは、利家の陣に入りたり。

五月に、謝用梓・徐一貫、大權現利家の陣にありて、毎日其もてなしに會ふ。其後秀吉公、淺野彈正少弼・太田和泉守・建部壽德・小西如清・近江觀音寺等を以て、替るべく兩使をもてなさしめ、其後秀吉公、大明の兩使をもてなし、數獻の後、秀吉公より太刀一腰・白銀千枚・小袖廿重・帷子三十を兩使に給はり、白銀五百枚・帷子百羽織百を、其郎從に給はる。又別に白銀三千枚・金作長刀一柄を、沈惟敬に給はる。名護屋は

地形曲り峙ちて、入海廻りて百町計、風景最も勝れて面白き所なり。大明の兩使甚だ愛して、各詩を作りて意を述ぶ。秀吉喜びて、大明兩使の心を慰め、興を催させんとて、數百艘の舟を海上に押浮べ、家の旗を立て、紋附きたる幕走らかし、鹽風に吹揉ませ、三老櫂を動かし、棹の歌を上げらる。秀吉公も舟に召さる。虎革の投鞘差したる鎗二百本・金作の長刀五十柄舟に突立て、歩衆三百餘人、一樣に茜の羽織を着して御供す。秀吉公、舟の中にして酒宴あり。觀世・金春を召して、猿樂の能あり。兩使大に興を催す。次の日秀吉公、兩使に茶を給ふ。斯くて兩使御暇を申す。秀吉公書を遣さる。其趣は、和睦の議若し偽なくば、我れ何ぞ誓約を變へんや。然れば大明皇帝の淑女を迎へて、本朝后妃の位に備へん。兩國久しく不通敵對する故に、近年勘合の舟を送らず。今若し和平あらば、必ず之を遣すべし。和睦なりて後、兩國の臣等、共に誓約の言葉を通せむ。我れ去年より、武勇の將數輩を遣して、朝鮮を征伐せしめ、王城以下打平げ、人民多く殺しぬ。貴國今我が言をうけがはゞ、朝鮮八道の内を、四道・李哈に返し、四道は日本の領地とせん。然らば朝鮮王の子及

び臣下一二人を、日本に質となし給へ。去年我將兵加藤主計頭清正、即ち朝鮮の二人の王子を生捕れり。沈惟敬懇に請ひ求む。此故に今返し遣す。我れ謂はく、朝鮮の貴族數輩、世々日本に背くまじといふ誓約の書を致さば、可ならんとなり。謝用粹徐一貫、之を以て歸る。秀吉公、即ち内藤飛騨守藤原如安を添へて、大明に遣さる。又小西行長・増田長盛・石田三成・大谷吉隆に書を遣して曰く、朝鮮の二王子及び郎従を、本國に返すべしとなり。是に依つて臨海君瑋順和君瑋の二人の太子を、朝鮮の王城に返す。李昭も、義州を出でて王城に歸る。朝鮮の人民、今は安堵の思をなして、皆家々に歸り住む。沈惟敬大に喜び、先づ使を司馬石星に遣す。石星其扱よく致して、和睦の功を立てたる事を賞し、大明帝に勸めて、恩賞厚く行はれ、沈惟敬が威勢富貴なる事、世の人羨みけり。

秀吉公、福原右馬助熊谷内藏允を朝鮮に遣し、諸大將に心を添へ、大友義統を責めて曰く、先陣の諸城、若し急難あらば、加勢すべく救はんが爲め、子城を所々に構へさせしに、小西行長平壤の急難に、義統之を救はず。剩へ大明の軍兵多勢なりと聞

朝鮮との
和詳成る

きて遽てふためき逃げたる事、前代未聞の臆病者なり。尤罪科甚だ重し。抑秀吉公數十年此方、武道を以て業とせしに、我が手の兵、一度も敗北の恥なかりき。而も今我れ大明と兵を構へ相挑む所に、義統初めて逃げたり。是れ身獨りの恥のみにあらず、秀吉が過にして、日本の大なる瑕なり。我れ義統が首を刎ねばやと思ふ事千度百度、胸に湧き滿つると雖も、大友家は頼朝より此方、代々相傳して繼ぎ來れり。我れ此故に宥め許して死ころさず。又其上義統と島津と合戦に及びし時、我に加勢を請ひけるを、我れ見繼ぐべき好なく、相知るべき仔細はなしと雖も、我れ武道の大將となり、人の望を達せずば、武門の本意にあらずと思ひ、早速に加勢を遣さんとせし所に、我加勢を待たずして、忽に戦ひて、島津が爲めに大なる後れを取りて、我が城にも歸り入る事叶はで、妙見龍王に逃籠りける事は、智慮の拙きといひ、大臆病といひ、武士たる者は、同座する事をも恥かしく思ふべきなり。次に先年諸大名禁中昇殿の時に、義統切に我が姓を望む。我れ曰く、大友は久しき家なり。いかでか我姓を許し與へんといひしかども、強ひて懇にいふに依つて、終に豊臣の姓を許

し、其加階も、五三人の外には最も高し。我れ今義統を罪して、安藝宰相毛利輝元に預くる所なり。義統が子も、同じく預くべしと雖も、我身近く仕ふる事久し。其性ちまれつき又父には替りて、曉さき者なれば、許し置くなり。武家を事とせば、父の恥に面を穢されなん。只禁中に召置かれんか。天氣をも伺ひ申入るべし。其程加藤肥後守に預け置く。扶持方五百人の分を相渡すべし。義統堪忍分の事は、重ねて命おほせつ付けらるべしとなり。

又島津又七郎を責めて曰く、其身既に島津兵庫頭義弘に屬して、諸事其計らひに従ふべき事なるに、更に義弘に屬せず。是れ其心を察するに、義弘は深く武略を嗜み、何時も唯先陣を心に懸くる者なり。又七郎先駟を嫌ひて、之を遁れんとするなるべし。次に海邊に陣を取る事を好む。是れ味方若し朝鮮に打負けなば、早く舟に乗り、人より先に逃延びて、急難を遁れん爲めなるべし。誠に是れ勇者の疾む所、臆病者のする事なり。次に先年、我れ九州に出陣の時に、又七郎、何の忠節はなかりしかども、義弘深く望む故に、本領相違なく安堵せしめ、其上、京都普請役、關東の

陣役を許す。其厚恩を忘れて、野心を起さんとす。固まことに罪科至りて深し。次に其身の事、十人計を召連れ、小西攝津守行長が許にあるべし。堪忍分の事、重ねて命付くるべしとなり。

又波多三河守を責めて曰く、三河守は、我れ既に鍋島加賀守直茂に付けたりしを、直茂と同じく軍を出すべきを、直茂には従はずして、潜に熊川の邊に陣取る。大臆病の至り、擧げて計へ難し。次に名護屋は、波多が領内なり。我れ今旅屋の館を構ゆ。三河守は、人より先に罷越ゆべき所ぞかし。唯舟ふなつき着を便り、若しやの時節を相待ちける、眞に憎むべし。次に諸軍勢、朝鮮の王城を出でて、釜山浦に引退く時、三河守、其道に出向ひ、諸大將と同じ働なるやうに、其品を繕ひける、猛惡の比興者、磔くわにかけ轆くわにしても餘りあり。然れども怒抑へて、命を許す所なり。次に先年九州征伐の時、我が本領改易すべき所に、鍋島加賀守、様々詫言せし故に、相違なく安堵せしめ、京都の普請、關東の陣役、皆許しける。其恩を忘れて、今斯くの如し。黒田甲斐守長政に預けらるゝ所なりと。諸大將衆も、謹みて之を聞申さるべしといへり。

小野攝津守は、島津が家臣なり。一の娘あり、菊と名づく。龍造寺が從臣瀨川采女正が妻となれり。采女正も渡海して、朝鮮に至る。菊子は、淋しき閨の中に孤り起臥して、采女正を戀ひ悲しみ、一日片時も忘るゝ隙なし。其思ふ所を文に記して、文篋ぼこに納め、便船に言傳ことづて遣せしに、其舟逆風に打覆され、文篋は博多の浦に、波に寄せられしを、浦人取りて代官に參らす。之を秀吉公の近習に送りけるを、秀吉公、即ち中山城守に封を切らせて讀ましめらるゝに、貞女、夫に寄する書なり。手美しく心深く書きなしける文の有様、世の常ならず。聞く人涙を流す。端書に歌あり。

かくあらん行方を知らで頼みつる我心をば誰にかこたん

是れ菊子が、瀨川采女正に贈る文なりと。秀吉公、其志深き情を哀れがり給ひ、龍造寺に人を遣し、采女正を歸朝せしめ給ふ。采女正肥後に歸る。菊子大に喜び、夫婦連れて名護屋に參り、秀吉公の御情、有難き旨謝し申す。尼孝藏主取次ぎ申しけり。秀吉公、夫婦に御對面あり。菊子又短冊を捧げ奉る。

物ごとのあはれを惠むあまつ神の心に代る君のたゝしさ

秀吉公、御引出物給はりて、返し給ひき。

秀吉公、書を石田三成・増田長盛・大谷吉隆・加藤清正・小西行長に遣して曰く、釜山浦近邊の要害を、固く守るべし。大明の和睦の事、若し僞ならば、軍を進めて王城を攻め落し、大明に入るべし。晋州の城は、先日攻め落さざりし事、大なる遺恨なり。諸大將相圖を定めて、一舉に攻め落すべし。又先づ所々の砦の要害を、能く構へて然るべし。釜山浦の本城及び椎木島登萊の三所は、毛利秀元、其兵一萬七千六十人にて守るべし。熊川の本城は、小早川隆景其兵六千六百人、側城は久留米秀包其兵四百。立花宗茂其兵千百卅三人、筑紫上野介其兵三百卅人、高橋主膳正其兵二百九十人、之を守るべし。唐島は、蜂須賀阿波守家政其兵四千五百。生駒雅樂頭其兵二千四百五十人。長曾我部元親其兵二千五百九十人。福島左衛門大夫正則其兵二千五百人。戸田民部少輔其兵二千三百四十人、之を守るべし。加徳島は、九鬼大隅守嘉隆其兵八百卅四人。加藤左馬助嘉明其兵三百四十四人。脇坂中務少輔安治其兵九百人。來島助兵衛尉其兵四百五十八人。菅平右衛門尉其兵百六人、之を守るべし。加藤主計頭清

正其兵六千七百九十人、及び相良宮内少輔薩摩侍從其兵二千百廿八人・黒田甲斐守長政其兵五千八十二人・鍋島加賀守直茂其兵七千六百四十二人・小西攝津守行長其兵七千四百十五人、及び宗對馬守義智・松浦法印・鎮信有馬修理大夫・大村新八郎・宇久大和守、其外藤堂佐渡守高虎其兵千四百七十三人・堀内安房守其兵五百七十四人・桑山小藤太其兵五百四人、毛利壹岐守其兵千六百廿一人・高橋九郎其兵七百四十一人・秋月三郎其兵三百八十八人・伊藤民部其兵七百六人・杉若傳三郎其兵百八十五人、相代りて、本城十一、側城七所を守るべき者なり。其外城の要害、砦の修造、兵糧の出入は、其人を定め、毎事必ず名護屋に告知らすべしとなり。

將軍記第十八終

將軍記第十九

豊臣秀吉記 下之二

六月、朝鮮の二王子及び臣下等、書を加藤清正が家臣加藤右馬允が許に遣して、清正に披露せしむ。其書の趣は、朝鮮國王の二王子臨海君・順和君・兩府夫人等、壬辰の年四月廿四日、日本大將軍主計頭清正に生捕られたりしを、情深くもてなし、關白殿下秀吉に申して、釜山浦より、再び王城に送り返さる。其慈悲は佛の如し。固にまこと清正は、日本の名將なり。素より聞傳へし關白殿下は、武勇雙なく、智謀兼備へて、諸國皆恐る。又仁慈あり。我等日本關白殿下及び主計頭に對して、違背の意あらば、人情にあらじ。天下鬼神、皆能く知るべしとなり。清正之を得て家の珍とす。秀吉公、書を朝鮮在陣の諸大將に遣す。淺野彈正・黒田如水、之を持ちて行く。其趣

は、前日諸大將、晋州を攻むると雖も、城主牧司能く防ぎて、之を落す事能はず。此度は諸將等しく進みて晋州を破り、牧司が首を我に見せしむべきなり。今淺野彈正・黒田如水を遣す、各軍の事、相談あるべしとなり。淺野・黒田、既に朝鮮に至り、増田・石田・大谷に書を送り、渡海の旨を告ぐる。増田等此由聞きて、先づ備前宰相浮田秀家が許に行きて告げたり。斯くて淺野・黒田は、秀家に對面して、秀吉公の命を述べて歸る。増田・石田・大谷、即ち使を遣して、渡海苦勞の由いせらる。彈正・如水兩人、相向うて圍碁を打ちて、耳にも聞入れず。暫くありて増田等三奉行來りて、遙々渡海の御苦勞、察し入りたる由いへども、淺野彈正・黒田如水、一向耳にも聞入れず、目も見やらず、只征點劫をたつるなど、深く案じ入りて餘念なし。秀吉の命、口上の仔細をも、承らんが爲め赴きける所に、斯くの如くの有様なれば、石田即ち増田・大谷に目加して、潜に出でて歸る。彈正も如水も、猶之を知らず。碁を打納め、石を碁笥に入れて後、初めて曰く、三奉行爰に來らば、秀吉の仰を語らんと。郎從共曰く、三奉行既に歸り給ふと。彈正・如水大に驚き、使を走らかして呼返せども、

三度に及びても立歸らず。叱りて曰く、其我等に逢はんよりは、碁を能く打ち給へとして、終に立歸らず。是に於て彈正・如水は、人の嘲取沙汰を恐れ、又秀吉公の聞きて、怒り給はん事を憚る。然れども増田等、遂に對面せず。此故に彈正・如水は、力なく秀吉公の命を、諸大將衆に申渡して歸る。案の如く此事秀吉聞き給ひて、淺野・黒田が怠りて、無禮なる事を怒り給ふ。或人語られしは、増田・石田・大谷、深く彈正・如水が碁に打入りて、傍若無人の振舞を惡み、秀吉に讒し、さまざま人に逢ふ毎に、此事を語りて、大に手を打ちて笑ひ嘲る。彈正・如水、甚だ之を恨みしが、彈正が子左京大夫と、如水が子甲斐守聞きて遺恨に思ひ、三奉行を惡む事、怨敵の如し。秀吉薨じ給ひて後に、左京大夫と甲斐守と二人して、三奉行の惡逆を大權現に訴へし後に、又關ヶ原の陣に、石田・大谷誅せられ、増田は禁獄せられてこそ、二人は憤を散じけれ。

諸大將一味して、晋州を攻むる。加藤清正・小西行長先陣たり。毛利秀元は一方に向ふ。小早川隆景・黒田長政・淺野彈正・伊達政宗等、之に屬す。浮田秀家一方に向ふ。

島津義弘・鍋島直茂・長曾我部元親・蜂須賀家政・立花宗茂等、之に屬す。凡そ軍兵六萬餘騎なり。彼晋州の城は、大なる江は、前にありて底深く、三方は、岩石峙ちて壁の如く、上に塀を塗り、矢狹間切並べ、牧司は、朝鮮の軍兵二萬人を率して、固く守る。時に劉綎も、兵を率し來りて、大丘府に陣を取る。日本の諸大將皆思はく、此城容易く攻落し難し。されども先日の恥を雪がん爲め、志を勵まして争ひ進む。毛利秀元は西の手に、浮田秀家は東の手に、加藤・小西・黒田・淺野は城の大手に向ひ、或は梯、或は楯、或は竹束、或は熊手、さまざまの攻具を調へ、押寄せ、込登らんとすれども、鐵を湯に沸して蒔散らし、手松明に火を付けて焼立つる故に、攻具に火燃え付きて、皆焼崩されけり。清正は、小西行長が、和睦諸事を取持ちて、朝鮮の兩王子を返し送り、我大功徒らになる事を怒り、晋州を攻潰し、和睦の扱を破らんとす。此故に、諸軍に先立ちて進み、手の郎従を以て、城の高櫓の隅石を引抜かせしを、櫓傾き崩れたり。城中騒ぎ立ちて防ぎけるを、加藤清正、軍を進めて込入りたり。秀元は、西の手より急に攻入りければ、城中あわて騒ぎて、我先にと落行きて、打殺さ

る者、一萬五千三百人、其外或は岩角に倒れ死し、或は河水に溺れ死す。城中凡て死する者、二萬五千餘人なり。城主牧司は、軍兵を左右に立て、突いて出でたるが、打亂されて、林の中に隠れ居たりしを、秀家が郎従岡本權之丞といふ者、探し出して首を取る。歸り來りて、生捕の者に見せしかば、疑ふ所なき牧司が首なりといふ。是に依りて、其首を鹽に浸し、名護屋に遣す。

秀吉公、大に喜び給へり。此度城に乗りけるは、加藤・小西・黒田、其軍功同じと雖も、清正、既に大手の高櫓を引崩しける故に、城中亂れ立ちて落ちければ、加藤清正を第一とす。政宗小勢を以て渡海し、軍忠を盡す。秀吉公之を賞して、感狀を給ふ。秀元大軍を以て、西の手より込登り、首を取りし數、諸大將より多し。晋州の城には、朝鮮數代の寶物多く納め置く。城既に落ちて火かゝりければ、箕子を封せし古より、世々相傳の重寶共、多く焼け失はる。諸大將衆會合して、晋州先陣の事を語る。黒田甲斐守長政、進み出でて曰く、此度は我れ先登たり。誰人か争はんと。清正、其臣飯田角兵衛を呼びて問ふ。飯田答へて曰く、我れ先づ城に入りて、首一つ

取りて出でし時、黒田長政と始めて逢ひたり。いかでか長政を先陣なりといふべきと。黒田長政又曰く、軍將たる者の先陣は、我ならで誰ぞやと。清正笑ひて曰く、誠に然なり。時の人、皆晋州の城落されしを以て、奇特の軍勇を感ず。

朝鮮王李哈は、王城に歸りて、未だ二ヶ月をも過ぎざるに、晋州の城落ちければ、李哈大に打驚き、大明の諸大將に急を告げて、加勢を乞ふ事、櫛の子を引くが如し。吳惟忠は、善山府に陣取り、劉綎は、大丘府に陣取り、駱尙志は南原を守り、李如松は開城にありて、李哈が加勢をなす。李如松即ち沈惟敬を呼びて、いかなる和睦の扱にてかありける。日本と内通して、大明を亡さんとする事かと責めければ、沈惟敬即ち釜山浦に至り、小西行長に逢ひて、和睦の約を違へたる事を咎む。行長大に怒りて曰く、汝和睦の扱を調へたりといふと雖も、大明の軍兵、頻に朝鮮に來る。是れ汝我を欺くなり。沈惟敬夫より大明に入りて、屢々和睦の謀を運らす。

八月、秀吉公、書を浮田秀家・毛利秀元に遣し給ふ。其趣は、兵糧鹽噌等は、増田右衛門・早川主馬首計らひとして倉に込め、薪炭を伐積み、寒天には軍兵に焚火せさせ、舟に居る者をば、小屋を作りて入れられ、大雪降らば、城中に引籠りて、春を待つべしとなり。

九月に至れども、大明和睦の返事なし。秀吉、又書を遣し給ふ。其趣は、諸軍の砦陣々能く固めよ。大明和睦の事、僞ならんか。諸將心を許すべからず。加勢を遣して、朝鮮を打干さんとなり。

沈惟敬大明に歸り、司馬石星に相議し、李如松・劉綎等、軍を引入るべき由を、大明帝に奏聞す。明帝命ありて、李如松は、開城を取拂ひて明に歸る。劉綎は、猶止まれり。日本の兵、釜山浦に充滿す。李如松が明に歸る時に、朝鮮人皆恐る。沈惟敬既にさまざまの物を、小西行長に送る。又日本の旗五本を受けて、藏して披露せず。李如松聞付けて、沈惟敬を殺さんとす。然れども石星が爲めに宥め置きぬ。

大明和睦の返書なき故に、これ僞なりとして、秀吉公、大権現及び前田利家と、晝夜軍謀の評定ある。一日黒田如水出でて曰く、去年大軍を朝鮮に遣す時に、大権現か利家かを遣されば、軍法能く滞る事なかるべし。清正・行長等は、只武勇のみを好と

し、年若くして、軍の道鍛錬あらず。清正と行長と中善からず、互に軍法を破りて用ひず。朝鮮の土民皆山林に逃隠れ、日本人の居する所は、青草一本だになく、人民更に住まざる故に、日本在陣の諸大將、大に苦めり。其間に軍兵退屈せば、内より亂れなんと申す。秀吉實にもと思して、大權現・利家・氏郷・淺野長政に語り給はく、釜山浦在陣の諸軍、故郷を思ひて、兵を進むる氣なし。我れ自ら彼に赴かん。日本の事は、徳川殿に預け奉り、利家を左將軍とし、氏郷を右將軍とし、我れ卅餘萬人を率して、旗を靡かし劔を振りて、三韓を打平らげ、直に大明を攻伏せ、我れ大明皇帝とならんとなり。

大權現宣はく、我れ壯年より武道を嗜みて、此年に至る迄、遂に敗北の恥なし。今日本に居て守り居らんは、武威なき者と思しけるや。たとひ命ありとも用ひじ。渡海して命を捨てんとなり。淺野長政進みて曰く、秀吉公には能く狐の付きたり。日頃の秀吉にはあらず。徳川殿怒り給ふ事なかれと。秀吉公聞きて、髪倒しまに立ち、鬚兩方に分れ、大に怒りて刀を叩け、汝彈正、非禮の言葉は何事ぞやと。利家・氏郷

押へて申す。彈正をば我等誅すべし。君の刃を穢し給はんやと。淺野少しも恐れずして曰く、我が輩數百人を殺し給ふとも、憂ふべからず。抑此頃兵を朝鮮に遣し給ふ。日本の軍兵大半渡海す。往來の傳送、其費少からず。諸軍諸民等、飢に望む事、苦しみ甚し。君今日船を出し給はく、明日は群盜一揆、蟻の如く起り集り、亂をなさん事疑なし。徳川殿日本に止りて、さまざま策ありとも、何ぞ一旦の力を以て、四海の亂を平げんや。君願はくは師を返して、文を治め武をひそむるの政を行ひ給はく、國家太平、貴賤の喜び、何事か之に勝らん。若し斯の如くならずば、我首を刎ねらるべしと申す。秀吉いよく怒り給ふ。利家・氏郷、即ち彈正を睨みて退かしむ。彈正は、家に歸りて打手を相待ち、腹切らんと思ひ定めてあり。數日を経て、肥後國の使者來りて曰く、薩摩人梅北某といふ者、黨を立て類を集めて、熊本之城を攻取る。國中多く梅北に屬すと。秀吉大に驚きて、徳川殿、早く彈正を連れて來り給へと。彈正參りぬ。秀吉公宣はく、汝が罪を宥むべし。汝が子左京大夫幸長を以て、梅北を討たせよと。彈正大に喜ぶ。秀吉公は、大權現に向ひて宣はく、幸長

初めて軍將となる。年猶少し。本多中務大輔忠勝を添へしめんと、忠勝を召す。斯くて宣はく、幸長年少く、軍道うゝしからん。軍事大小となく、忠勝に任するなりと。幸長・忠勝、共に命の辱き事を拜し、肥後に赴かんとする所に、肥後の目代來りて曰く、熊本城主の家老、彼梅北を欺き誅す。殘黨等ちりくになりて、國平かなりと。幸長・忠勝は國境より歸る。秀吉公、淺野彈正を遣して、肥後の仕置をなさしむ。

清正、元より大明和睦の議を破らんとす。内藤飛騨守如安、大明に赴きて歸らず。明人、如安を殺すかと思へり。是に依つて十一月三日、加藤清正軍兵を率して、安康の城を攻むる。此時劉綎は、慶州にありしが、來りて救ふ。清正之を打破りて、首を取る事三百餘級。劉綎逃げて慶州に歸る。

秀頼誕生

秀吉公の嬖妾、淺井備前守長政娘なり、男子を生ず。其名を拾と名づく。後に秀頼と號す。此若君、生れ給ひて平安なり。秀次、書を名護屋に遣して申さる。秀吉聞きて、大に喜びて宣はく、朝鮮の事は、沈惟敬既に和睦の扱を致す。軍旅の事は、徳川殿・利家、之

を擲き給へとて、速舟はやぶねに召して大坂に歸り、喜び給ふ事限なし。秀吉公、後には秀次を捨て、此若君を世に立てんと思ひ給へり。

内藤飛騨守如安、既に經略孫鑛宋應昌を經略とする事年久し。又顧養謙に代へたり。今又孫鑛を經略とす。字をば文融といふ。が計らひとして、大明に入りたり。司馬石星厚くもてなして、問答の事あり。和睦の事成りて、沈惟敬釜山浦に至る。日本の諸大將、大半は歸朝せり。行長等は猶止まる。

同三年、秀吉公、天下を秀頼に譲らんとす。關白秀次、更に辭退するの色なし。秀吉公、若君秀頼を大坂に居らしめ、隱居の家を、大和の多門に建てんとす。されども其地かたくじて、京都・大坂の往來、宜しからずとて、山城國木幡・伏見に城を作らしめ、奉行六人を選び定めらる。佐久間河内守政實・瀧川豊前守・佐渡駿河守・水野龜助・石尾與兵衛・竹中貞右衛門なり。諸國の役歩を集む。凡そ廿五萬人の費なり。石を醍醐・山科・雲母坂より運ばせ、材木を岐岨・土佐山より伐取りて、城既に成りたり。又河邊に小山を築き、樹木を植ゑ、其中に堂を立て、學問所と號す。又沈香木を以て、數寄屋を立てらる。秀吉公、茶湯者を招き、茶を給うて自ら慰む。

朝鮮在陣の諸大將、軍旅の久しきに苦しみて、死せし人々は、丹波少將秀勝・東郷侍從長谷川藤五郎秀一・加藤遠江守なり。中川右衛門大夫秀政は、軍兵を率して合戦す。朝鮮人にたぶらかされ欺かれて討死す。其外討死病死の者、數を知らず。秀吉公大に憐み、書を遣して、釜山浦諸城の軍士は先づ止まり、其外は歸朝すべしとなり。此故に名護屋釜山浦在陣の諸士、喜の眉を開きて、皆伏見の城に集り來る。二月、秀吉公大坂を出でて、吉野山の花を見んとせらる。召連れらるゝ人々迄も、花を飾り金を鏤む。紀伊六田橋を渡り、市坂に至りて見れば、新に作れる家あり。是れ大和中納言秀俊の作り設けて、相待たるゝ茶屋なりと申す。秀吉公、立寄り給ひければ、秀俊大にもてなさる。夫より花園・櫻田・奴太山・隱家松・千本櫻の邊に遊び、關屋の花の下に至りて、詠歌の興あり。秀吉公、既に金花表・二王門を過ぎて、藏王堂に詣で、櫻嶽に登り、後醍醐天皇の皇居の舊跡を見給ひ、今熊野・達天山・聖天山・辨財天山などを巡りて心を慰み、吉水を旅の宿とし、二日逗留あり。御供數萬人、其周圍に宿る。直夜の下々にも、酒肴給ひて喜ばしめらる。斯くて秀吉公、歌の會

を催し、自ら和歌五首を詠じ給ふ。關白秀次・右大臣菊亭晴季・權大納言中山親綱以下、紹巴・由己・昌叱に至る迄、皆詠歌あり。秀吉公、甚だ心を喜ばしめ給ふ。

三月三日、秀吉公高野山に登り、青岩寺を旅館とし、父母の爲め焼香禮拜し、一山の僧徒八千人を召し、米を給ひて、大政所の冥福を修せらる。金堂の大破して傾きたるを見て、米一萬石を施入す。木食上人興山、之を掌る。秀吉公、猿樂を催し、衆徒を慰めんとて、金春太夫等を召し、青岩寺に舞臺を構へて、猿樂の能あり。一山の衆徒萃り見る。秀吉公、斯くて高野を立ちて兵庫に至り、大坂に歸り給ふ。

秀吉公、大坂の本丸にして、金春八郎を召して、由己が新に造れる吉野の花見・高野詣・明智・柴田北條征伐といふ五番の謠を、能にせさしめ、秀吉公も習ひて舞ひつゝ、北政所に見せしむ。

此年、司馬石星、内藤如安が答ふる詞を、大明帝に奏す。明の帝、同四年正月に、日本國王の印を鑄させ、冠束帶の具、多く調へらる。其費、數萬の黄金に當る。監淮侯李言恭が子李宗城を正使とし、都指揮楊方亨を副使として、敕書印章を、日本に

遣す。敕書の中に、秀吉公を封じて日本國王とすといへる文あり。正使・副使・沈惟敬、共に大明を出でて、三浪江に逗留し、釜山浦の軍將歸朝するを待ち居たり。此頃、秀次關白職にあり。天下の上下、尊仰せずといふ事なし。秀次大に驕り惡虐を好み、屢城に上りて鐵炮を放ち、道行人を打殺して戲とし、又諸寺諸山の僧に命せて、謠百番に註を作らせて、世に行はる。黒田如水、既に秀次を諫めて曰く、秀吉公、年來天下に御心を盡し、風に櫛り雨に沐びて、今猶名護屋におはして、朝鮮征伐の事に思を焦し、齡五十に餘り、身疲れ心勞れ給ふ。抑公は元是れ匹夫の人なり。たましく秀吉公の幸に逢ひて、父子の契約をなし、數國を領じて關白に上る。其榮貴、誠に一生に極め給ふ。秀吉公百歳の後に、其遺跡を繼がん者は、公にあらずして誰ぞや。正に今、秀吉公の苦勞を見ながら、知らぬ體にて、之に代りて勤めんと思ひ給ふ心なし。恩を知らざる不孝の人といふべし。公願はくは名護屋に至り、秀吉公に代りて、諸大將を差引し給はば、天下額を傾けて大に悦ばん。京都にありて、腹太らかし足投出し、戯を緯とし給はんは、是れ天道の嫉む處、大に恐れ給ふべし

と。秀次遂に諫に従はず。是より後は、世の人、皆秀次を誹り笑ふ。秀頼生るゝに及びて、秀次の威勢劣り、天下いよゝゝ輕しむ。秀次武具を調へ、假初の田にも兵具を持たせ、從者皆膚に着込を纏ひ、小袖の下に腹巻して、心ある體なり。人皆怪しむ。秀次謀叛の企ありと、私語くことあり。伏見に往還し、山野に遊樂するにも、鏃の垢鏽を磨き、火繩を薰べて、前に敵あるが如く、用心最も嚴しかりければ、事既に顯れ、人民専ら風聞す。遂に秀吉公に聞ゆ。

七月、秀吉公、既に宮部善祥坊法印・德善院玄以・増田右衛門尉石田治部少輔富田左近將監を聚樂に遣し、秀次にいはせられけるは、仄に聞く、野心の企ありと。定めて實なるべからず。其實否を糾しくせんす。若し其事偽ならば、七枚の起請を奉れとなり。秀次驚きて曰く、此事大なる偽なり。我れ君恩を蒙る事山の如し。何に依りてか逆心あらんや。只願はくは君の智鏡を以て、我が丹心を照し給へとて、七枚の誓詞を書きて、五人に渡さる。五人の使歸りて之を申す。秀吉公宣はく、夫れ何ぞ我に叛くべきやとなり。

木村常陸介、秀吉公の命に依りて、淀にありて、普請の營いたしけるが、一夜女房の輿に乗り聚樂に來り、奥迄昇入れて、夜の明方迄、秀次と額を合せて密談して、其夜淀に歸る。常陸介が父隼人佐は、秀吉公の寵臣なり。此故に常陸介、天下の執權を心に懸けしを、石田治部少輔三成に奪はれて、口惜しく思ひ、秀吉に仕へて時を待ちけり。石田・増田彼を惡みて、讒を構へて殺さんとす。斯る所に石田三成は、木村が夜中に、密談せし事を聞付けて、何は知らず斯様の體なりけりと、秀吉公に申入れたりければ、秀吉公領きて聞き給へり。

毛利輝元、使者を馳せて曰く、去年關白秀次の使に、白江備後守來りて曰く、輝元誓紙を書きて、太閤の死後迄も、秀次に叛くまじと申せとあり。此故に逃れ難く、誓紙を血判して參らせたりとて、其案紙を石田三成に渡して、秀吉公へ達しけり。其外方々より、秀次の逆心を告げ來る事多し。秀吉公屢疑ひ給ふ。

秀吉公、重ねて宮部善祥坊・德善院立以中村式部少輔一氏・山内對馬守一豊堀尾帶刀吉晴を聚樂に遣し、秀次に告げて曰く、世間の浮説まらしくなり。直面に聞届け

て、^噂を散すべし。此方へ來り給へとなり。秀次更に思分け給はず。吉田修理亮囁き申しけるは、逆心の思召立、實ならば、伏見に赴き給ふべからず。實ならずとも、聚樂におはして理り給へ。夫にても許されずば、我に一萬騎を付けられよ。伏見を攻落し忠を盡さん。輕々しく伏見に至り給ふ事、勿體なしと申せしかども、秀次心後れけるにや、遂に五人の使者に圍まれ、伏見に至り給ふ。城中へは入れられず、木下大膳亮が家に入れ奉る。秀吉公御使あり、速に高野山に登らるべしとなり。是に依つて秀次、俄に髪を剃下し、高野に赴く。近習の臣百餘人、皆髪を切りて相從ふ。騎馬既に二三百計あり。木下大膳亮、秀吉公の命を受けて、騎馬廿人・歩の者十人の外禁せらる。是に依つて武藤左京亮・生田右京亮・雀部淡路守・津田雅樂助、其外東福寺・南昌院・虎岩西堂等相從ふ。諸大名、使を以て見舞あり。秀次堅く禁制せらる。高野山青岩寺に入り給ふ。

秀吉公、即ち德善院・増田・石田・淺野・長束五奉行の連署、木食與山上人に遣さしめ、秀次切腹の事を告げしむ。福島左衛門大夫・福原右馬助・池田伊豫守に仰せて、高野山

秀次高野山に入る

に赴かせらる。木食興山之を見て曰く、秀次公の事、反逆の企最も悪むべし。我れ秀吉公の命を叛くべからずとなり。福島・福原・池田、軍兵三千人を以て、青岩寺を取圍み、切腹あれと申す。秀次怒りて、淡路守を以て興山に告げて曰く、三使既に寺を圍む。上人之を制せよ。秀次快く切腹あるべしとなり。興山此由申されしかば、軍兵を退けたり。

秀次自盡

秀次沐浴し給ひ、自殺を催さる。山本主水、十八歳にして先づ死す。次に山田三太郎十八歳、次に不破萬作十八歳、次に虎岩西堂死す。次に秀次切腹あり。年廿八。雀部淡路守以下皆死す。福島・福原・池田、伏見に歸りて之を白す。初め正親町院崩御ありて、未だ七日も過ぎざるに、關白秀次屢鷹野鹿狩をして樂とす。一日女房達を連れて、比叡山に登り、晝夜に堂塔を汚し、又山中の鹿猿狐兔諸島を狩殺す事數知らず。大衆憂へて、木村常陸介を以て、此山は、桓武天皇草創より此方、女人は迹を絶ちて影をも入れず、肉食殺生更に例なしと。秀次怒り罵りて曰く、我れ今天下の主なり。爰に遊ぶ事、平人には似るべからずとて、南光房にし

て、鹿猿魚鳥を料理せさせらる。貧僧の僅に蓄へたる鹽噌の中へ、魚鳥の腸骨を投入れさす。一山の大衆彈指をして、大に之を惡む。鳥獸を殺す事、狩漁を好み給へば、世の人殺生關白といふ。秀次或時北野に遊び盲目の杖を撃ひて行くを、召して酒を飲ませ、秀次劔を抜いて、右の手を打落す。盲目大に呼はり、人殺しよといふ。熊谷大膳亮が曰く、汝夫にも命は惜しきかと。盲目其秀次なりと知りて答へて曰く、我れ兩眼を失ひてだに、大なる憂とす。今又右の手を失ふ。命生きて詮なし。只疾く首を切つて、殺生關白の名を後代に傳へよといふ。秀次大に怒つて、寸々に切り給ふ。此等の惡虐數知らず、遂に身の上に報ひけり。

木村常陸介・白江備後守・熊谷大膳亮・栗野木工助・日比野下野守・山口少雲・丸毛不心は、秀次の黨類なり。勸めて惡虐を手傳せし者なれば、皆誅せらる。其外近習外様衆、多く大名に預けて殺さる。延壽院玄朔・法眼紹巴を遠流せられ、其後召返さる。秀次の妻室子息二人、山口少雲が娘、女子を生む。北・寵愛の女房達三十餘人を、徳永法印・壽昌が家に移し、其後又丹波の龜山の城に送り置き、八月に、三條川原に召出し、徳善

院・増田・石田檢使として、皆首を斬りたり。各歌詠みて死す。見る人涙を流す。其首を河原に埋みて、畜生塚と號す。

秀吉公、六箇條の法令を、諸士に下し給ふ。大權現・前田利家・浮田秀家・毛利輝元・小早川隆景加判あり。一には、國主郡長嫁娶を、私になすべからず。公方の命を得て定むべし。二には、大名小名、私に一味の契約すべからず。三には、喧嘩口論は、堪忍の方を理とす。四には、妾多く持つべからず。五には、酒は醉ふを限り、亂酒すべからず。六には、輿を許す人、大權現・利家・景勝・輝元・隆景・公家の老臣・五山の長老なり。其外は國主たりとも、年若きは許さず。五十に及ぶ輩は、一里の道ならば駕籠を許す。病ある人は、此制の外なり。之を背かば、死罪に行はんとなり。又九ヶ條を諸人に出さるゝ。其中に、諸公家・門跡は有職學文、諸寺・諸社は其先例を守り、年貢は、三分二を地頭に、一分は百姓に與へよ。訴訟は十人衆・五奉行評議し、衣裝の紋は、菊桐を用ふべからず。覆面して道を往來すべからずとなり。

大明の使者李宗城・楊方亨、猶ほ三浪口に逗留す。李宗城は、貴族の子なり。始めて正使の救命を受けて、其出立華かなり。大明・朝鮮の諸人、皆集り見る。沈惟敬羨み憤りけるは、和睦の扱は我こそあらめ。今我を副使の救命にだに預からず。只道知への役とせらるゝは何ぞと、恨み居たり。司馬石星使を立て、早く日本に渡れといはすれども、兎角言ことばを飾りて、渡海容易すからずといひて果たさず、今年も暮れたり。

此頃朝鮮在陣の人、一の大虎を討殺して、秀吉公に奉る。之を京中を持たせ渡して、諸人に見せしむ。長一丈餘り、斑なる事、毛色あざやかにして珍らかなり。

文祿の頃かるとよ、石川五右衛門といふ者あり。同類を集め、諸人をかどはかし強盜を致す。遂に河内の立田越にして搦め取る。其母並に妻子同類二十人計、三條川原にして、釜に油さして煎殺さしむ。其釜は今七條邊の川岸に流れ傍うて、水中にあり。世に釜ヶ淵と名づく。

是より三十年計以前に、南蠻の耶蘇といふ者、商人となり、日本に來りて邪法を弘む。文祿年中に、秀吉公、其人民を惑はす事を怒り、即ち伴天連六人・同類廿餘人を捕へ、

京都・大坂を渡して、肥前國長崎に送りて、皆磔にせられ、商船を停止せんとし給ふに、長崎の民、訴へて許さる。

慶長元年、宗城、大に故郷を戀ひて泣きけり。沈惟敬畏して曰く、和睦の事破れたり。日本に赴かば、こたび歸らじと。李宗城大に恐れ、敕書を打捨て形を窺し、竊に釜山浦を夜逃にして、潜れ居たり。次日、方亨、大明に申送る。楊方亨我一人にて、此使叶ふまじとて、大に泣きつゝ、沈惟敬を恐れて、書を石星に遣し、李宗城を誹り、沈惟敬をば譽めたり。大明帝、即ち楊方亨を正使とせられ、沈惟敬をば、神機三營添註遊撃になして、副使の事を行はしむ。六月に、正使楊方亨、副使遊撃沈惟敬、從者四百餘人を率して、釜山浦を立ちて日本に來る。此時加藤清正、小西行長も、連れて歸朝す。朝鮮國王李昫も、沈惟敬に責徵られて、全羅道觀察使黃愼、將官朴弘長を使者として、同じく渡海して來る。

閏七月、大地震あり。土裂け水涌き、京都・伏見の家々、民屋倒れ崩れ、人死する事數知らず。大佛殿崩れて、佛像破れたり。秀吉公行きて之を見て、佛を叱りて曰く、佛像を安置する事は、國家泰平の爲なり。然るを今其身をだに保ち得ずして、裂け摧けたり。何の益かあらんとて、自ら弓を引きて之を射らる。信濃國善光寺の如來を召上せて、大佛殿に置かる。其後又善光寺へ送り返し、新に大佛を鑄立て、納めらる。

八月に、楊方亨、沈惟敬及び黃愼、朴弘長、共に泉の堺に着く。秀吉公の命に依つて、五、六日休息して後、廿九日に伏見に來る。京都近國の人民集り見る。使者、道々管絃を奏せしめて、伏見に至る。此時秀吉公、柳川豊前守調信を以て、朝鮮の使者黃愼、朴弘長を責めらる。朝鮮の王子、自ら來り謝せずして、使を遣す。無禮の至なり。對面すべからずとて、怒り給ふ。九月二日、楊方亨、沈惟敬登城して、正使楊方亨は前に、副使沈惟敬は、大明帝の金印を捧げて、階の下に立ちたり。少頃ありて、殿上の幕を開き、秀吉公、近習二人に太刀腰刀持たせて、ゆるぎ出で給へば、並居たる大名頭を地に附く。沈惟敬深く恐れて、金印を持ちて、匍匐ひ出でたり。楊方亨同じく匍匐うて、震ひ慄き、足すくみ口噤みて、色を失ふ。小西行長進みて、大明の使者

其禮を行ふべしといふに、沈惟敬、即ち金印敕書封王の冠裝束を捧げ、日本諸大名へも、冠服五十餘具を出しけり。對面の後、先づ宿に歸る。秀吉公さまももてなし給ふ。次の日、上壇の中央厚疊は、秀吉公の座なり。威儀を輝かさん爲めに、秀吉公は、赤き裝束に唐冠して、邊あだりを拂ひて座し給ふ。中壇の右に、大明の兩使を座せしめ、左は徳川殿・前田以下七人座して、皆大明より送れる冠裝束を着し、其外の諸大名は、南の縁に座し、諸大夫以下は、廊下庭上にみちくたり。膳部は、大明の法に従ひ、膳の高さ、三尺に五尺四方なり。牛羊豚鶏等、金銀を鏤め、軌則花を立法に従ひ、膳の高さ、三尺に五尺四方なり。盃を兩使に給はり、斯くて猿樂の能あり。秀吉公、花島の山庄にして、承兌・靈三・永哲の三僧を召して、大明の璽書を讀ましむ。秀吉聞き大に目を瞋いらかし、大音に宣はく、大明我を封じて、日本國王とすといへり。是れ何ぞ、憎きこと甚し。我れ武略を以て、日本の主となる。何ぞ大明の力を借らんや。行長が曰く、大明封じて、我を大明國王とすといへり。我れ信にして軍を返したり。行長志を大明に通じて、我を欺くなり。行長が首を斬りて、腹を居るなん

とて、大明より送りし冠裝束をかなぐり捨て、敕書を投げほふりて、行長を召す。其聲雷の如し。行長參りて、是れ我が所爲わざにあらず。三奉行の旨を受けて定めたりとて、數通の文を取出して證據とす。秀吉公怒りを押へて、少し止みぬ。行長は、虎の牙を逃れ、鰐の涎を免れ出でて退きたり。秀吉公、加藤清正・石田・増田・大谷を召して宣はく、大明我を封ず、心に叶はねども、先づ姑く堪忍するなり。朝鮮は許すべからず。明の使は、明朝泉堺に追下せ、再び大軍を以て、朝鮮を攻干すべし。朝鮮の使者は、首を刎ねよとありしを、承兌・靈三・永哲、諫めて止む。次の日兩使は、泉の堺に歸る。秀吉公、やがて清正及び西國・九州の諸大將を集め、朝鮮征伐の軍陣を定めらる。

楊方亨・沈惟敬相議して曰く、我等萬里を越して使節となり、返書を取らで歸朝せば、何の面目あらん。只有の儘に語らずば、大明・朝鮮亡びなんかとて、泉の堺より船を出して、面おもなく歸朝す。

秀吉公命に、加藤清正・小西行長は前陣を致し、中國九州の諸國軍兵等、悉く渡海し

て、新羅・高麗・百濟の三韓を攻平げよ。去ぬる七月の地震に崩れし伏見の城は、東國・北國畿内の大名小名、改め築くべしとなり。

秀吉公、大明の使者の徒に歸る事を憐み、柳川豊前守調信を以て、金銀等を使者に給ふ。豊前守、竊に朝鮮の使者黄慎に語りて曰く、來年朝鮮征伐の事、既に定まりぬ。汝歸國せば、必ず太子を日本に來らせ、謝し申すべしとなり。黄慎大に恐れて、大明の使者に語る。斯くて肥前國に至りて、順風を待ちて日を重ねし所に、加藤清正は肥後に下り、黒田長政は豊前に歸り、各軍兵を催して、朝鮮渡海の用意を致す。

再び朝鮮
征伐

楊方亨等、色を失うて大に驚く。沈惟敬思はく、我だに死なすば、和睦の扱は、又調ふべきなりとて、更に驚く色なし。此時寺澤志摩守正成、既に秀吉の書を持ち來りて、大明の使者に示す。是れ定めて使者を喜び給ふ書ならんと思ひ、急ぎ開きて見れば、夫にはあらで、朝鮮を責むるに、三の罪科を記したる文なり。其趣に曰く、前年朝鮮の使者來りて、委しく其情を言上せしかども、大明の事をば、隠して申さざりし、其罪一つ。沈惟敬強ちに歎き請ふ故に、朝鮮二人の王子后妃以下を、許して

返し送りき。然れども速に來りて恩を謝せず。大明の使の來るを待ちて、やう／＼臣下を遣せし。王子は來らずして、黄慎・朴弘長の卑しき使を渡海せしむる、其罪二つ。大明・日本の和睦、竝に使を遣せし事、皆朝鮮の王の心として、手の裏を覆すが如き表裏を作る。故に使遅く來れる、其罪三つなりと。朝鮮國王李哈、此書を見て大に驚き、少しも隠さず別に一通を寫し、有の儘に大明に言遣して、加勢を給はらん事を申す。

大明の使楊方亨・沈惟敬、先づ朝鮮に歸る。此時朝鮮京畿道都體察使李元翼といふ者、秀吉公重ねて大軍を以て、渡海せしむべしと聞きて、軍勢を駈集めて、之を防がんと術を運らす。楊方亨・沈惟敬に逢うて問ふに、委しく語りけり。李元翼が曰く、速に釜山浦の城を守り、日本の軍勢寄せ來らば、足をもためさせず、急に之を追打つべしと、いと諱もなくいひければ、沈惟敬が曰く、命の如くに追打たれなば、目出度かるべし。然れども日本人が武勇勝れて、命を塵芥ともせず。悔りて、初度の軍に利を失はば、ゆゑしき後の大事なるべし。深く智慮を運らされよといふに、李元翼心

迷ひ、畏神おぢがみつきて、軍兵を押出す事を得ず。斯くて楊方亭沈惟敬は、大明に入りたり。沈惟敬、和睦の扱仕損じて、人の笑種にならん事を思ひて、伴りて曰く、秀吉既に明帝の天恩辱なき事を拜し、冠を戴きて、懇に謝せられたりといふ。又小西行長に頼みて、猩々緋の毡、天鵝絨及び大小の金器等卅餘種を調へ、其箱の上に大文字に、日本國王豊臣秀吉所餽遺之什物也と書付けて、返禮なりとて明帝に捧ぐ。明人皆笑ひて祝ひ、猩々緋・毡・天鵝絨は、是れ南蠻の土産なり。日本の方物なりといはん事は、腹を抱へて笑ふべしといふ。されども明帝、咎めずして納め置かる。司馬石星は、信の返禮と思へり。然りと雖も秀吉の返書なし。此故に人皆疑ふ。沈惟敬又釜山浦に行きて、秀吉の謀書謀判を似せて文章を作り、恩を謝する由を書認めて之を奉る。是にも年號月日を書かず。是に依つて大明の臣下皆いふ、惟敬が似物の書なりと。沈惟敬恐れ恥ぢたり。

異國の大船一艘流れて、土佐國桂濱浦戸の湊十八里許の澳に寄り來る。國主長曾我部元親聞きて、小舟を出し見せに遣す。是れ南蠻の商船なり。大なる惡風に逢ひ

て、檣折れ楳碎け、舟損じて舳前より潮込入り、水に渴えて、五百餘人果敢なくなり。崑崙兒くろこ二百五十人、商人三十人計しんによ郎十人計僅に生残りて、爰に漂へりといふ。元親憐みて、糧米酒肴を與へ、次の日、増田右衛門尉長盛に書を遣して、秀吉公に申す。増田長盛土佐に赴き、船中の物を點檢しけるに、舟の長三十間横廿二間あり。通事出でて目錄を見せつ、小舟百五十艘に移し乘せて大坂に至り、長盛元親同道して、目錄に合せて秀吉公に奉る。烏捌絲五萬端・唐木綿廿六萬端・金襴鈍子五萬端・白糸十六萬斤・印子金千五百個・麝香一箱・生麝香十頭・生猿十五頭尾長き猿なり、尾の形鼠の尾の如し、鸚鵡二羽あり。秀吉公大に喜び、鸚鵡一羽・麝香箱及び金襴鈍子二萬端を禁中に參らせ、其外攝家・清花・雲客・諸大名に頒ち給ふ。京・大坂・泉境・奈良の町人等迄、ほどに從ひて給はる。黒舟の者には、價銀を多く給はり、米八百人扶持・酒肴炭薪、毎日五百人分を下行あり。船大工に命せて、船を修理せさせ、本國に歸らしむ。米五百石・豚百頭・鶏千羽を望み請ふ所に、秀吉公之を倍して、酒樽百個・肴五十箱・餛飩の粉五百石を添へて賜はる。南蠻人大に喜び、謝して歸朝す。

同二年正月、小西行長肥後にありて、渡海の用意を取急ぐ。秀吉公の命には、二月に出陣すべしとありけれども、秀吉の甚だ怒り給ふ事を、憂ふるが故なり。加藤清正は、小西が爲に先をせられじとて、諸大將に先立ちて渡海す。

二月、秀吉公、仰出さるゝは、前陣は加藤清正、小西行長圍を取りて、日替りに勤むべし。前陣にあらざる日は、二陣にあるべし。三陣は、黒田甲斐守長政、毛利壹岐守高橋九郎、秋月三郎、相良宮内大輔、伊藤民部大輔。四陣は、鍋島加賀守、同子息信濃守勝茂。五陣は、島津薩摩侍従。六陣は、長曾我部元親、池田伊豫守、藤堂佐渡守、高虎、中川修理大夫、加藤左馬助、嘉明、菅平右衛門。七陣は、蜂須賀阿波守家政、生駒讚岐守、脇坂中務少輔安治。八陣は、備前中納言浮田秀家、安藝宰相毛利秀元、之を勤むべし。釜山浦の城は、筑前中納言豊臣秀秋之を守り、太田小源五、城中の事を掌るべし。安骨浦の城は、立花左近將監宗茂之を守り、加徳の城は、高橋主膳正、筑紫上野介守るべし。竹島の城は、久留米の秀包之を守り、西生浦の城は、淺野左京大夫幸長、之を守るべし。我れ今毛利豊後守、竹中源助、垣見和泉守、毛民部大輔、早川主馬首、熊

谷内藏允を、朝鮮に遣して奉行とす。諸大將の善惡を見聞くに任せて、偏頗なく最良なく、實を以て註進すべし。船軍は、藤堂高虎、加藤嘉明、脇坂安治、之を奉行とし、四國の軍兵を加勢とすべし。諸大將互に誓約して、中違ふ事なかれ。大明若し大軍にて、朝鮮の王城近く陣取らば、早く註進すべし。我れ必ず渡海して、悉く打平げ、直に大明國に馬を進めて破らん事、掌を巡らすべからずとなり。

加藤清正、既に船を出して朝鮮に至り、竹島の城に入りつゝ、機張に陣を取りて、梁山を攻落し、西生浦に赴き、城の近邊を巡り見て、札を書きて、朝鮮の人民に示して曰く、日本國加藤主計頭清正、受太閤殿下之命、今再航于朝鮮。朝鮮人民必不疑此牌文、莫恐怖而退逃。故先遣我臣金大夫、以告焉と書きたり。

小西行長が船は、釜山浦の外より進み、豆毛浦に至り、釜山浦の古城を修理し、筑前中納言秀秋を以て城主とし、又砦を諸所に構へて、久しく住すべき計をなす。是より後、諸大將皆相繼ぎて渡海す。

朝鮮には、日本の大軍又來るを見て大に驚き、國王李昫も、先年俄の敗軍に手創し

て、即ち王子后妃を率して、海州に落行く。從臣等あわてふためきて、山里遠く隠れたり。李昫が寵臣に、柳承寵といふ者は、一方の大將軍にもと、頼もしく思ひしに、王城に兵糧を籠め、用意をせさするにかこつけ、財寶を運び取りて、尙州に逃落ちたり。大將軍の官に補せられ、日頃は鬚を撫で臂を張りて、威勢に誇りし權慄は、敵の旗をも見ずして、逃げて東境に隠れたり。朝鮮大に亂れて、防ぐべき力なく、急を大明に告げ來る事隙なし。其説には、日本軍兵、百萬騎を十三段に備へて、大明に攻め來る。秀吉は名護屋にありて、自ら軍法を出して進退すと風聞して、恐れ慄きあわて騒ぎ、資財雜具を取隠す事、往來の道狭し。

將軍記第十九終

將軍記第二十

豐臣秀吉記 下之三

黒田長政等の諸大將十萬餘騎、皆朝鮮に入りて、登萊・機張・西生浦・豆毛浦・安骨浦・竹島・梁山・蔚山・加徳に砦の城を構へ、熊川・金海・昌原・咸安・晋州・固城・泗川・昆陽の間に、押懸けく、村里を打破り追捕しければ、大明・朝鮮の通路なし。然れども朝鮮、年の兵亂を以て米穀少し。諸大將甚だ苦めり。

朝鮮の軍兵等、唐島に於て、軍船數百艘を調へ、日本の兵を防がんとす。時に藤堂佐渡守高虎・脇坂中務少輔安治、之を打破らんとす。即ち軍評定して、使を加藤左馬助嘉明に遣して曰く、我等唐島の軍船を打取らんとす。足下も先づ是へ來らるべしとなり。嘉明未だ來らざる間に、高虎安治、既に軍兵を唐島に遣して相戦ふ。嘉

明は之をば知らず。高虎・安治が許に行きて評定す。時に此由を告知らする者あり。是に於て加藤嘉明、大に驚き怒りて、高虎・安治に出抜かれたりとして、急き打つて出でつゝ馳せ向ふ。郎從追々に駆付くる。高虎・安治も皆唐島に至り、軍兵を進めて大に戦ひ、敵の船多く乗取る。安治が軍兵、討死する者少なからず。加藤嘉明馳せ來りて見れば、一の大船に弓を連ね、弩を張り旗を立て戈を擧げて、向ふ敵を待ちける所に、嘉明飛乗りて、只一人切つて參り、手の下に數十人を切倒す。敵大勢集り、嘉明危く見えし所に、嘉明が甥權七郎及び郎從等、續いて飛入り、攻め戦ひ、終に彼大船を乗取りぬ。數多の敵船、之に恐れて漕退くる。加藤嘉明は、藤堂高虎・脇坂安治が、我を欺き出抜きける事を怒り、我が武勇を見せんとて、又或敵船に打つて向ひ、蹶きて海に落ちけるが、舳先に取付き跳上りて戦ひつゝ、又其の船をも取りたり。敵、船毎に、矢尻を揃へて、雨の降る如く放つ矢に、嘉明が股を射させ、血の流るゝ事瀧の如し。夫を物ともせず戦ひけり。鍋島信濃守勝茂、船を寄せ來りて讚上げ、苦戦の功を感ず。嘉明が曰く、我れ又敵船を乗取りぬ。是れ見給へ鍋

島殿と、勇みける有様、意氣凜々として撓まず。斯くて書を京都に遣し、軍功を註進すべしとす。時に藤堂高虎が曰く、今日の先陣の功は我にありと。加藤嘉明進み出でて、太刀に手をかけ、皆に睨み見て曰く、佐渡は何といふぞ。今若し一言を出さば、我れ必ず只一刀に試みに決せん。船師の一陣は我にあらずやと、其怒れる眼差、光り輝きて炬の如し。高虎聞きて大に怒り、一刀に試みんとは、我れ之に恐れんやと、座中皆取静め、高虎物な宣たまひそやと扱ひしかば、事故なくなりたり。戸川肥後守、傍にして聞きけり。然るに肥後守は、備前中納言浮田秀家の家老なり。人性武勇なり、其上文祿元年朝鮮征伐の時、肥後守、陣屋を構へて居たりしに、朝鮮の土民等恐れ逃ぐる。肥後守が曰く、汝等を殺すべきにはあらず、恐るゝ事なかれとて、木札六百を出して分ち與へ、此札持たらんものは、爰に來るとも、殺す事あるべからずといふ。土民等大に喜び、其札を油紙に包み頭にかけて、心安く入り來る。四方の商人・職人等、皆肥後守が陣屋に集りしかば、萬に手づまる事なし。材木薪炭魚鳥までも乏しからず。斯くて肥後守、陣屋を替へて餘所に移り、其跡に別

人屋渡して居たりけるを、土民等知らで、木札を首に懸け來りて、肥後のくといふ。陣屋の者共は、其仔細を知らで、敵軍偽り窺ふかと心得て、己等何をかいふ。肥後の肥後のとは心得ずとて、皆捕へて殺す。是より朝鮮の土民等皆曰く、日本人は虎狼なり、情を知らず。近付くべからず。其軍法定まらずとて、恐れ惑ひて、山深く逃籠るとかや。又いにしへ神功皇后三韓を平げ、新羅の地に上り給ひ、弓の筈を以て、大石の面に書付け給ふは、高麗王は、我が日本の狗なりと。其石今にありと。肥後守歸朝の後に、人に語りて曰く、秀吉公自ら朝鮮に赴き給は、軍法厳しく亂れざらん。然らば諸大將、何ぞ人を殺すこと、麻を薙倒す如くに多かるべき。あたから人數を多く殺しけるよと、語りきとなり。されば高虎・嘉明が喧嘩も、戸川肥後守能く見聞きて、浮田秀家に語る。後に秀吉公聞きて、感状を加藤嘉明に賜ふ。大明の諸臣下僉議して曰く、此度日本再び大軍を起す事は、是れ司馬石星が罪なり。沈惟敬に何とか計らひ聞かせて、扱を破りけん。石星は、沈惟敬が仕損じなりと責めければ、惟敬が曰く、日本の起り來るは、朝鮮の無禮を數る所なり。大明の命

を背くにはあらずといふ。徐成楚之を難じて曰く、軍兵數十萬、海に浮ぶ事數千里、是れ無禮なるのみならんやと。諸臣下、皆其罪は石星にありとて、捕へて牢獄に下し入れたり。其後萬曆廿七年の夏、終に死したり。朝鮮頻に加勢を請ふと雖も、大明打續き兵亂起る故に、諸軍兵疲れ苦しみて、其召に應せず。大明大に亂れ騒ぐ。

四月に、大明帝、即ち邢玠を以て經略とし、楊鎬を以て經理とし、劉綎・麻貴を南北大帥とし、浙東・浙江・四川・廣東の軍兵を催して、朝鮮に加勢せらる。朝鮮國王李哈は、大明帝の救命に依つて、新總督となる。即ち左兵使成允門・防禦使權應銖を遣して、慶州に陣取りて、烏嶺の敵を防がしめ、右兵使金應瑞を宜寧に置きて、釜山浦の敵を防がしむ。統制帥元均を以て、船軍の大將となし、竹島・加徳の敵を防がしむ。

秀吉公、使を沈惟敬に遣して曰く、速に朝鮮の全羅・慶尙・忠清の三道を、日本の領知になすべしとなり。大明帝は、沈惟敬早く日本の軍兵を引取るべしと申せ、日頃の扱は如何にしつるとなり。兩國より數められて、沈惟敬すべきやうなく、只茫然と

して居たり。

五月、加藤清正、既に柳川調信を日本に遣す。六月に歸朝して、秀吉公に謁す。秀吉公宣はく、朝鮮我言を聽かず。是れ全羅忠清の二道を、其儘置く故なり。諸軍進みて全羅道に入りて、兵糧を集め諸城を踏潰し、大に進みて攻め入るべし。夫若し叶はずば、先づ慶尙の城に歸り、固城を過ぎて西生浦に入りつゝ、敵地深く攻め詰め、力を盡して戦ひ、味方多く死すとも顧みずば、必ず大功を建つべし。若し我言に従はずば、汝等が妻子皆日本にあり。我れ皆磔にかくべしとなり。清正・行長聞きて大に驚く。又調信にいはせけるやう、近日大明より、大軍既に全羅に押寄す。其勢、更に手向ひなり難しと。秀吉公聞きて、大に怒りて宣はく、往年李如松が大軍を率して、開城に陣取りし時、味方片時に晋州を追潰し、城主牧司を打取りぬ。今以て恐るべからず。浮田秀家は、宜寧より全羅に向ひ、毛利秀元は、慶州より密陽大丘を経て、全羅に向ひ、兩方より夾打はさまにせよ。清正・行長等、何ぞ明兵の大軍を恐るゝや、蓬さたなきこころ心かなと宣ふ。調信歸りていふ。清正・行長、恐れ敬うて承る。

沈惟敬は、兩國より責められ、如何せんと案じけるが、朝鮮の僧惟政松雲を倩まかひて、書を清正に送りて曰く、大明の軍將邢玠といふ者、七十餘萬騎を率して、既に朝鮮に赴く。公等諸大將、早く軍兵を引入れて然るべしとなり。清正、其時は西生浦にあり。即ち答の書を遣す。松雲がいふ、大明の多勢來る由。是れ我が願ふ所なり。夫れ朝鮮の軍兵は弱く臆して、味方の兵に向つては、楯を突き弓を引く事叶はず。此故に我れ誠に之を憐む。然も今大明の軍兵と合戦し、首を薙捨てん事、麻を茹るが如く、一時に塵にし、朝鮮を打破りて、直に旗を大明に進め、悉く明京を燒拂はん。此事僞らず。我身の幸、何事かまさらん。唯怨むらくは明兵遅く來ることを。我れ軍を調へて待つなりといへり。惟敬及び大明の兵朝鮮人、共に此書を見て驚き騒ぎて、武勇の程を恐れ、彌手足を空になし、安き心もなかりけり。邢玠、元より沈惟敬が表裏なる事を深く惡み、之を捕へんとす。彼れ若し日本に走りて、大明の有様を、敵に語らんかと思ひ疑うて、先づ書を遣して、心を易くせしむ。沈惟敬も、身の科に心の鬼を作り、大明の諸大將を恐れ疑ひて、釜山浦に走り行か

んとするに、便なし。邢玠、既に楊元に、三千餘騎を副へて南原に遣し、吳惟忠、麻貴及び朝鮮の軍將元均に心を合せて、沈惟敬が釜山浦に走り遁れんとするを、防ぎ守らしむ。沈惟敬が手勢二百人あり。若し惟敬が、夜に紛れて逃んかと恐れ、別兵二百人を遣して之を替へたり。惟敬密に郎從婁國安、張龍二人を釜山浦に遣し、小西行長に降人にならん事を望む。行長即ち柳川調信に、五百人を副へて出し、宜寧といふ所に至りて、惟敬を迎へんとするに、朝鮮の斤候のひか、之を押止めて走らせず。張龍は閑道わきみちより歸り、惟敬に逢うて、早く立退きて行くべしと勸む。楊元聞付けて宜寧に至る。沈惟敬財寶を下人に取持たせ、忍びて釜山浦に行くに逢うて、日本の事如何にせしと問ふに、惟敬答へて曰く、和睦の事は叶ふべからずといふ。楊元が曰く、其事叶ふまじくば、大明に行きて、邢玠にいはすやと。惟敬が曰く、我れ今一度慶州に赴き、加藤清正に逢ひて扱うて見ん。三十日は過ぐべからず。頓て歸らんといふに、顔の色變じ動轉したる體なり。楊元、夫れ逃げ走らんとするなりと見咎めて、軍兵を以て取圍み、惟敬が馬を引戻し明に歸りぬ。邢玠即ち明帝に申して、牢獄に

小早川隆
景逝去

入れ置く。時に萬曆廿五年なり。同廿七年九月廿四日、終に誅せらる。

從三位中納言筑前守小早川隆景卒す。隆景は、大膳大夫毛利元就が子、中納言輝元には伯父なり。輝元既に秀吉公に屬して、後に秀吉公、筑前國を隆景に給はる。隆景思はく、我は秀吉公に、大國を給はるべき好なし。是れ我意にあらずと。即ち秀吉公に白して曰く、我れ願はくは、金吾中納言秀秋を養ひ參らせ、我れ死して後に、筑前國を譲り奉らんとす。秀吉公大に喜びて許し給ふ。是より後に隆景、屢秀吉公の大恩を蒙る事厚し。五大老の數に加へられ、六十三歳にして卒す。遺言して曰く、天下亂るゝとも、輝元に與すべからず。只我領國を守り居るべし。其故は、毛利家若し天下を取るべき勢力あらば、さもあるべし。然れども其勢なき事を、我れ能く察したり。後々若し領地の國を出でて軍をせば、國削られ身亡ぶべし。此事忘るゝ事勿れ、疑ふ事勿れとなり。此後關ヶ原陣の時、隆景の言葉、果して驗ありけり。七月沈惟敬は、楊元が我を捕へし事を恨み、郎從婁國安を、小西行長に遣して告知らせける。南原の城は、楊元及び全羅道の兵馬節度使李福男が守る所なり。城中

無勢なり。諸大將と合せ攻めなば、城は落つべし。南原の地形は、東に雲峯・鳥嶺の嶮しきあり、南に三浪・大江の深きあり。其道は、金海・竹島に通ず。是れ朝鮮要害の地なり。足下の軍兵を爰に置くべし。其右の方に、閑山島あり。邢玠即ち遼東の軍兵三千人を籠めて守らしむ。陳愚衷は、二千餘騎にて全州にあり。朝鮮の軍將金應瑞・李元翼は雲峯にあり。權慄・元均は、閑山島の邊にあり。皆南原城の加勢なり。足下若し軍兵を分けて、此等を防がせて後に、南原を攻められれば、一時の内に、大功をなさんとなり。行長元より思ふ所なり。即ち諸大將に評議して、南原城を攻めんとす。

朝鮮の軍將元均と、大明の軍兵と相圖を定め、釜山浦の城を攻めんとす。小西行長之を聞きて、軍勢を催して、元均が船軍の兵を打散らし、進みて閑山島を攻め取る。是より日本船軍の便よし。此故に船を押進めて、光陽豆恥津に亂れ入りたり。

八月、諸大將既に南原の城に向ふ。金羅・慶尙・忠清の三道よりして進む。一手は浮田秀長を大將とし、小西行長先陣たり。島津兵庫頭義弘・蜂須賀阿波守家政・長曾我

部土佐守元親・加藤左馬助嘉明・生駒讚岐守等五萬餘騎相從ふ。一手は毛利秀元を大將とし、加藤清正先陣たり。黒田長政・淺野幸長等五萬人相從ふ。慶州を出でて、密陽大丘を過ぎて、全義館に入りたりしが、朝鮮王城に籠る大明の軍兵と戦はんとす。中納言秀秋は、釜山浦にあり乍ら、山口玄蕃允・伊藤雅樂助・南部無右衛門等八千人を遣して、秀元・清正と同じく、忠清道に赴く。權慄・李元翼等は、雲峯に陣取ると雖も、防ぎ戦ふに及ばず、皆東境に逃げたり。秀家・行長等備を立て、南原城を攻めんとする時に、圍取して、全州に向つて、南原に來る加勢共の道を取切らんとす。義弘・嘉明圍を取り得て、軍兵を率して全州に向ふ。此故に陳愚衷等の輩、南原を救ふ事叶はず。秀家・行長四萬餘騎、同時に進みて南原を攻むるに、城主楊元及び李福男堅く守り、打出す鐵炮の音は、百千の雷の鳴るが如く、射放つ矢は、五月雨の篠を突きやうなし。息をも繼がせず、四日の間攻めたりけれども、固く防ぎて落つべし。中此間急に攻められて、機疲れ心屈しけるを、今は心安しとして、各城中の軍兵共、鎧

甲を脱ぎて臥したり。夜明方に行長軍兵を進め、南門を攻め破りて、急に突入りけり。秀家元親家政高虎各瞳と攻め寄せ、城に駈入りければ、楊元は帳中に臥して、未だ起きも上らざりしが、大に驚き周章て、衣をだに着る隙なく、盤礫あかはだかに跳にして、逃出でつゝ落行きければ、李福男は討死す。秀家行長等、城中に亂れ入りて、切伏せ突伏せ、首を取る事三千餘級、生捕る者又少なからず。即ち人を釜山浦に遣し、書を日本に送る。行長が武威大に振ひけり。

陳愚衷は、全州にありけるが、義弘嘉明が押寄せ来るを見て、南原の城に、加勢する事叶はず。

斯る所に、南原既に落ちて、李福男討死せしと聞えしかば、全州の土民驚きあわて、資財雜具を取隠し、妻子を携へて逃げ惑ふ。陳愚衷之を制して止めんとす。土民等大に怒り起りて、急に全州を攻めつゝ、兵糧庫に火をかけ、四方に逃散りたり。陳愚衷驚き、城を捨て、逃げければ、日本の兵、即ち全州を取り、兵糧、鐵炮、弓等を集め貯へて、暫く休息す。

邢玠は、南原全州の城落ちたりと聞きて、陳愚衷が罪なりとて、明帝に奏達す。又朝鮮國王李哈せを數めて曰く、日本既に朝鮮を打つ事は、大明の恥なり。此故に明帝、即ち軍兵數十萬騎を遣し給ふ。久しく在陣して、雨露に打たれ身を苦しめ、心を惱ますと雖も、李哈を初めて其臣下等、更に出でて戦はんと思ふ心もなく、只大明の軍兵にのみ打任せて、其身は引籠りてある事、是れ主辱めらるれば、臣死すといふ語に背く。此度南原、全州の敗北は、皆是れ李哈が過なりと。是に依りて李哈恐れ驚きて、朝鮮八道の兵を催して、邢玠が命に従ふ。

九月、毛利秀元、黒田長政等、軍を進めて全義館に至る。全義館は、王城を去る事遠からず。時に副總兵副將解生といふ者、日本の軍兵の、直に王城に攻入らん事を恐れて、我手の軍兵を、稷山、水源の兩所に分ち遣して、之を防がんとす。黒田長政、先陣を勤めて進む。朝鮮の軍兵等は、日本人の武勇を恐れ、城を守りて、更に出でて戦はず。此故に秀元等、向ふ所に敵なし。長政、忽に解生と相戦ふ。長政が家臣栗山備後守、後藤又兵衛五十餘騎にて、解生が陣に駈入り、面も振らず切つて廻る。參將楊

登山・遊撃牛伯英等、來り加はりて、栗山・後藤を取圍む。栗山・後藤少しも恐れず、解生・登山・伯英の三大將と、東に打ち西に突き、左に廻り右に返し、終に圍を出でて萬死を遁れ、一生の武勇を顯す。黒田長政之を見て、二千餘騎を進めて打つて懸る。毛利秀元が先陣も、同じく續いて進みけり。解生等打靡かされて、傾き逃ぐる。李益喬・劉遇節、兵を進めて馳せ來る。解生等力を得て、又取つて返して戰ふ。長政大に之を破りける所に、秀元等の諸大將備を立て、後より押し來る。解生叶はじと思ひて、兵を退けて引いて行く。日既に暮れ懸りければ、長政等も、追懸けずして止まりぬ。

十月、麻貴將軍、既に李如梅を遣して、筑紫上野介久留米秀包が籠りし星州谷城を攻めしむ。南部無右衛門等、星州を取拂ひて、退道のくみちにして、はしたなく李如梅に行合ひて戰ふに、李如梅叶はずして引退く。日本の軍兵等、寒氣甚しきを以て、兵を納れて守り居る。

十一月、邢玠既に軍兵を調へて、鴨綠江を渡り、朝鮮王城に入りて、楊鎬・麻貴と軍評定す。日本の諸大將は、大明の軍勢大に攻め來ると聞きて、斥候ものかを遣して、其有様を見せしむ。此時小西行長は松島にあり。加藤清正は蔚山にあり。清正蔚山に城を作らんとして、暫く普請の事を營ましむ。其後清正、又水邊の諸城を構へんとして、西生浦に行きて、機張に逗留す。加藤清兵衛は蔚山に止まり、毛利秀元が軍兵相加はりて守る。大明の軍兵皆思はく、清正蔚山にありと。此故に、恐れて押寄せんともせず。中納言秀秋は、釜山浦にあり。凡そ日本の軍兵、朝鮮に在陣する者十三萬餘人なり。

邢玠既に軍兵を分ちて三とす。左の軍は、副總兵李如梅一萬三千六十餘騎、盧得功、董正誼、茅國器、陣寅、陳大綱之に従ふ。中軍は、副總兵高策一萬一千六百九十餘騎、祖承訓、頗貴、李寧、李化龍、柴登科、苑進忠、吳惟忠之に従ふ。右の一軍は、副總兵李芳春、解生一萬一千六百廿餘騎、牛伯英、方時新、鄭印、王載、盧繼忠、楊萬金、陳愚聞之に従ふ。彭友德、楊登山、擺賽、張維城等は遊軍たり。監軍軍奉は、監察御史陳效なり。朝鮮の軍勢も、又三軍の中に加はる。鐵炮一千二百四十四位、火箭十一萬八千支、鐵炮

の藥六萬九千七百四十五斤、大小の鉛玉百七十九萬六千九百六十七。是れ遼陽分守張登雲といふ者奉行す。其外に三眼銃、鐵鬚、箕銃、悶棍、火砲、火筒、團牌、佛郎機などいふ大筒、石火箭、様々の兵器を集め、軍法最も厳しくして、如何なる通力武勇ありとも、面を向ふべくも覺えず。

十二月、邢玠將軍、壇に上り天地を祭り、諸大將を勇めて、數萬の鐵炮をつるべ放す。其有様嚴重なり。斯くて楊鎬、麻貴、軍兵三列を進めて、慶州に赴き、蔚山を攻めんとす。蔚山の南に島山あり、加藤清正が軍兵之を守る。麻貴、即ち高策、吳惟忠を、彦陽梁山に遣して、蔚山と釜山浦との通路を取切る。宍戸備前守、淺野左京大夫、幸長、太田飛驒守は、蔚山に籠らんとて、彦陽に陣取り、先づ斥候を遣して、敵の體たらくを見せしむるに、高策、吳惟忠が兵之を見付けて、蟻の如く集りて、斥候を打殺しけり。幸長怒りて曰く、今既に蔚山に入るといふとも、斥候の多く打殺されしを見乍ら、敵にも合はずして歸らば、後の嘲なりとて、打つて懸らんと馬を進む。宍戸、太田之を止めて、是誠に武士の本意なりと雖も、明兵は大軍なるべし。我等小勢を

以て打懸らんは、卵を石に投ぐるが如くならん。只速に蔚山に入りて然るべしと。幸長今年廿二歳、勇氣甚だ盛なり。宍戸、太田が諫を用ひずして曰く、我れ今敵を見ずば、歸るべからずとて、自ら旄を取つて進む。宍戸、太田も、打捨て難くて共に進む。明の兵其小勢なるを見て、真中に取籠め、一人も餘さじと打つて懸る。幸長、宍戸、太田、大に駈破り馳せ出でたり。明兵手繁く追懸けゝるを、引返し、其道三里が間に數度戦うて、幸長數々所の創を蒙り、蔚山の近邊にしては、既に危かりける所に、幸長が郎從龜田大隅守、踏み止まりて戦ひ、敵の大將を打取りしかば、敵軍亂れ惑ふ。加藤清兵衛、城の門を開き迎へたり。幸長、太田は蔚山に入りたり。宍戸備前守は、大明の軍兵に押隔てられて、城に入る事叶はず。やうく閑道わきみちより入りたり。加藤清兵衛、城中の手賦し、幸長は大手を守る。毛利秀元は、兵を分ちて島山を守らしむ。太田飛驒守は遊軍として、何方なりとも、危き所に加はらんとす。城中糧かて少なし。近郷の土民等は、大明大に攻め寄するを見て、皆妻子を連れて城に籠る。此故に彌兵糧乏しかりけり。

李如梅、楊登山、其軍兵を率して、蔚山を攻む。遊撃擺賽は、五百餘騎にて城下に詰め寄せ、急に進む。城中鐵炮を打立て弓を射出し、関の聲夥し。城中一萬餘騎、門を開きて嘩と駈出でつゝ、手繁く戦ふに、擺賽打立てられて崩れ逃ぐる。城兵、勝に乗りて追懸くる。明の兵、之を取巻きけるを、四方八面追捲りて、軽々と引入りけり。城の兵四百餘人討たれしかば、明の兵は、三千餘人討たれたり。蔚山、島山の間に大河あり。李方春、解生、此川に舟を浮べ漕廻りて、近郷の在家を焼拂ふ。此煙の紛れに、城に攻め入らんとす。城中之を察して、急に鐵炮を放つ。李方春、解生が舟覆りて、四五艘沈みければ、之に乗りたる明の兵、多く溺れ死す。方春、解生、僅に遁れて歸る。

加藤清兵衛、使者を機張に遣して、清正を蔚山に召入ればやとて、其使を選ぶ。幸長が郎從木村頼母が曰く、我れ行くべしとて、馳せ出でて至り、清正に逢うて此由いふ。清正が曰く、速に小舟を用意せよ。我れ日本を出でし時に、淺野彈正、既に子息幸長を我に預けたり。幸長死せば我が恥なり。再び日本に歸りて、彈正に對面

すべきや。我も同じく死して、契約を黄泉の下に届けんとて、五百餘騎にて蔚山に赴く。

麻貴、茅國器、又大軍にて攻め寄せ、柵を引退け壁を打破り、城に乗らんとす。城中鐵炮を以て防ぐに、あだ矢なし。寄手多く打殺されしかば、叶はずして引退く。

麻貴、又大軍を以て島山を攻む。島山は岩石峙ち、道羊腸つらおちにして登り難し。日本の軍兵尾崎に立並び、鐵炮を打出す事雨の如し。寄手、上り兼ねて引退く。麻貴怒をなして軍兵を勵まし、又打つて上りけるを、城中下立ちて、大石をまろばし、大木を投懸くるに、寄手之に當らじと、前なる兵を楯になして、色めき亂れたる所を、又鐵炮を打かくれば、あだ矢なく當りける程に、引退かんとすれども、後より打懸くる。前に進めば打殺され痛手負ひ、一人も残るべきとも見えす。麻貴攻めあぐみて引退きけるに、大軍、残り少なになりけり。

加藤清正五百餘騎を率し、舟十艘に取乗りて、蔚山に入らんとす。大明の兵、清正が武勇に恐れ、打止めんとする者なし。清正、白銀の帽子甲を着て、長刀をかい込み、

舟端に立ちて軍兵を調へ、蔚山の城に静々と入りたり。城中大に喜びて、勇氣日頃に十倍せり。大明の軍兵多勢を催し、二方より一同に進み、急に攻め上らんとて、蟻の如く集りて、城の石垣に付きたり。城中、清正が來りしに、彌力を得て大に勇み、大石大木を投懸け、鐵炮を雨雹の如く打出しけるに、寄手の大勢、甲を手割られ、頭を打碎かれ、手足を打折られ、半死半生になる者數知らず、打殺さるゝ者多かりければ、楊鎬等相議し曰く、此城を力攻にせんとすれば、軍兵多く打たれて、今に仕出したる事一つもなし。城中は、水の手自由ならず、兵糧多からず。只遠攻にせば、味方の人數を費さずして、城は自ら落つべしとて、城の攻口を引退き、陣屋を嚴しく構へて、遠攻にこそしたりけれ。城中之に氣を屈し、其上水の手を取切られて乏しくなり、密に池水を汲みて渴を養ふ。池中には死骸多く、其水は血に混じて、穢はしけれども、せめて之なくば如何せん。既に又兵糧盡きて、牛馬を殺して食す。城中密に忍び出でて、大明の軍兵の、死倒れたる腰を搜り、僅に燒米・牛あぶりのの炙などを拾ひ取りて、飢を助る事もありけれども、中々堪へ忍ぶべきやうもなし。清正既に

大明の兵を誘あざむん爲めに、使を以て、楊鎬に和睦せんといふ。楊鎬僞りて和睦をなし、對面して生捕りつゝ、日本の軍兵を塵にせんとす。淺野幸長之を慮おもんばかりして堅く止む。楊鎬、其誘き難き事を怒りて、急に城を攻落さんとするに、寒氣烈しき故に、諸軍うけがはず。

同三年正月朔日、小西行長、三千騎を率し、舟を順天より押出して、蔚山の城を救ふ。毛利秀元中納言秀秋・黒田長政、三萬騎を率して、蔚山の後詰をせらる。四國の軍兵二萬餘騎馳せ來りて、蔚山の近邊に陣を取る。家々の旗を靡して風に翻す。軍兵野山に滿みち々て、夥しともいふ計りなし。楊鎬之を見て、大に驚き色を失うて、策いかにともすべき心もなく、周章てふためき、我前われまきにと逃歸る。清正之を知らず。此故に出でて追懸くる事なし。次の日之を知りて、城を出でて追懸くる。吳惟忠茅國器、命を捨て、返し合せ、防ぎけるにこそ、大明の軍兵は、傍々遁れ歸りけれ。されども弓・鐵炮・馬・旗等を、捨てたる事數知らず。路々取納め、車に載せて持ちて城に歸る。楊鎬は名を流して、世の笑草となりぬ。

邢玠、既に楊鎬が蔚山を落し得ず。日本後詰の軍兵を恐れて、逃げたる事を開きて大に怒り、諸軍を朝鮮の王城に集めて、重ねて大軍を擧げて、蔚山を攻めんと相謀り、明帝に申して、楊鎬が官を削りぬ。

二月に、劉綎・陳璘・張榜・鄧子龍・藍芳威などいふ兵を大將として、軍兵を率して朝鮮に入りたり。巡撫使萬世徳を、楊鎬に代へて經理とせらる。

邢玠、即ち李如梅を中路の大將とし、麻貴を東路の大將とし、劉綎を西路の大將とし、陳璘を水軍の大將とし、各軍兵を分けて、諸城を守りて、日本の兵を防ぐ。

三月、秀吉公、若君秀頼を携へて、醍醐の花見に赴き給ふ。北の政所・女房達、皆召連れらる。去ぬる正月に、徳善院玄以に仰付けられ、醍醐の院房を修理せしめらる。

既に今日出立ち給ふ。醍醐に至り、三寶院に入り給ひければ、御供の衆皆歸らしめ、暮方に來るべしと仰付けらる。北の政所、三寶院より、歩にて所々を巡り見給ふ。

其道の兩方に埒を結び、五色の段子の幕を張らせ、秀吉・秀頼・北の政所・女房達計りなり。男たる者は、一人も召連れず。此故に諸大名、所々に茶屋を構へて、興を催

さるゝも、皆其妻を亭主とせられたり。秀吉立入り、茶酒を飲みて、樂しみ興せさ

せ給ふ。敕使來りて、花見の興を賀し給ふ。其外攝家・清花、皆使を奉り、諸大名、京

境の名ある輩は、酒肴を捧げて山の如し。敕使は、廣橋中納言兼勝なり。今日風靜に雨降らず、天曇ら

ず塵立たず、其空麗に、花の匂香しく、梢に來鳴く鳥の聲、谷に響く泉の音迄も、千

世萬代の歌を唱ふかと、いと目出度かりし花見なり。増田右衛門尉長盛が茶屋に

は、浴室を構へたり。秀吉公衣を脱ぎて浴び給ひ、御膳を勧め奉る。別に一の家を

構へ、扇はり子・ひるな・疊紙人形以下の商賣物の棚を飾り、紅の綱に鈴を付けて、

花の枝に掛けしかば、松風落ちて鈴を鳴らし、群鳥は驚き飛ぶ。谷水をうけたためて

池を作り、池に小舟を浮べ、人形を操りて漕巡らす。是れ秀頼を慰め參らする爲な

り。新庄入道東玉が茶屋は、苔生したる岩の狭間、朽木を便にしつらひ、柴の垣・竹

の編戸、物さびたる有様なり。秀吉公内に入りて、焼餅を聞食し、棚にありける瓢

箆の酒を飲み給へば、茶屋の亭主茶を參らせ、其價を強く乞ひて許さず。秀吉公大

に興を催し給ひ、只今は何もなし、歸らば頓て算用すべしと宣ひしを、只今給はらず

ば、歸し奉るまじとて、御手を取りて引入れ奉れば、秀吉公大に喜び給ひ、既に酒宴始まり、數刻に及びて歸らせ給ふ。次の日、秀頼の御方よりは、銀二百枚・小袖十重、北の政所より鳥目百貫・羽二重廿疋、秀吉公より、千六百石の寺領を、三寶院に遣し給へり。

加藤主計頭清正・毛利秀元等の諸大將、蔚山の城の要害、堅固ならずとて、修理經營あり。小西攝津守行長等は、大明百萬騎の軍兵を差向け、順天の城を取圍むべき由風聞ありと聞きて曰く、若し大軍に圍まれなば、悔むとも歸るべからず。速に順天を去りて、釜山浦に籠らんといふ。加藤左馬助嘉明、進み出でて曰く、未だ敵の旗をだに見ず、聞逃にするならば、人の嘲、遁るべからず。方々は左も仕給へ。某に於ては、残り止まらんといふ。諸大將又、嘉明を捨て、行かんも道ならずと、評定まぢまぢなり。此由蔚山に聞ゆ。清正・秀元、即ち安樂寺の僧惠瓊を順天に遣して曰く、順天を退きて、釜山浦に籠らん事、先づ秀吉公に伺ひて、定められよとなり。行長・嘉明、此儀然るべしとて、使を以て秀吉公へ白す。秀吉公大に怒りて宣はく、大

明の大軍來らば、來らん迄よ。何ぞ恐れて城を開退くべきや。要害能くして、固く守るべくば、大軍といふとも、防ぐに憂なかるべし。秀秋・秀家・秀元及び四國の軍兵は、先づ歸朝すべし。九月に又渡海せしめんとなり。時に五月なり。

六月に、秀元・秀家、歸朝して伏見に赴き、秀吉公に謁す。

頃年朝鮮在陣の諸大將、其切取る敵の首數を、皆鼻を切り耳を切りて、日本に遣す。秀吉公其手輕き事を賞し給ふ。首數を奉るには、鼻・耳若干と記し送る。秀吉公、之を都の東大佛殿の邊に埋めませ、耳塚と名づけらる。其後朝鮮人來りし時、彼塚の下に至り、祭文を讀みて弔ひけり。此輩は、死して國恩を報せしなりというて、涙を流す者も多かりし。

七月に、大明の軍將劉綎は、水源といふ所に陣取り、順天を攻めんとす。先づ小西行長をたばかり生捕りて、猛威を振はんと企み、吳宗道といふ者を、順天に遣して、和睦の事をいはしむ。行長、初めは疑ひけるが、吳宗道辯舌を盡し、誠がましくいひければ、行長心迷ひて、對面の地を定め、和睦の日を極む。劉綎が陣中に日本人

あり。密に順天に來りて、此事、僞の策なりと告げたり。行長大に驚き、其約義を變ず。監軍陳效、即ち劉綎が謀拙く、泄れ易き事を責むる。劉綎大に愧ぢけり。八月に、軍將麻貴、既に頗貴・牛伯英等を率して、溫井といふ所に陣取り、蔚山に向ふ。然れども清正が武勇に恐れて、攻め懸らず。清正も城を出でず。兩軍相向ふたるのみなり。

島津兵庫頭義弘、其子又八郎忠恒後家久と號す一萬餘騎を率して、諸城を構へて守る。新寨を居城とす。新寨は三面は海にして、一方は陸に續き、望津・永春・昆陽の三ヶ所の城、其前に聳えたり。金海・固城の兩城は、其左右に構へ、東陽といふ所に、兵糧多く詰め置き、又能き兵を泗川の砦に籠めて後、陝州・宜寧・咸陽・高靈などいふ村里を、掠め取り打破る。大明中路の總大將董一元は、高靈・晋州に出張せしかども、義弘が武勇に憚り、城の要害の堅固なるを見て、更に攻めんともせず。

秀吉薨去

十八日、前關白太政大臣從一位豊臣秀吉公、伏見の城にして薨じ給ふ。年六十三歳なり。其遺言には、我れ死せば、暫く隠して沙汰すべからず。淺野彈正・石田治部少

輔、早く筑紫に赴き、朝鮮の諸將を歸朝せしめよ。若し夫れ軍兵引取り難くば、得川殿及び利家、能く智謀を運らし給へ。十萬の軍兵を、異國の土になす事なかれと、いひ終りて息絶え給ふ。洛の東南たつみの方阿彌陀が峯に葬禮し、鎧・甲・太刀を棺に入れたり。木食興山上人、其事取賂ひ、墓を其嶺に築き、祠を其麓に構へ、并に家を作りて、卜部氏萩原某を神主とす。其外禰宜等あり。其後月忌に至る毎に、妙法院にして、諸宗の僧徒に齋を設け、聖護院門跡道澄後に照高院と改むを、大佛殿の住持とす。淺野彈正長政・石田治部少輔三成・増田右衛門長盛等、皆髪を切りて恩を報ず。

九月董一元は、晋州にありて謀を運らし、新寨を攻めんとす。時に一人の女ありて、新寨より出でたるを、茅國器が郎從、之を捕へたり。彼の女楮かたを取出して示す。其趣は、此女正に虜とらとなりて、日本に渡らんとす。我れ甚だ憐みて賞たからを出し贖ひ、故郷に歸らしむ。大明の軍兵、其憐みを垂れて、殺害する事なかれとなり。其尾おしに、吾姓を知らんとならば、令公の後埋兒の父。吾名を問はば、有或の口無手の按と書止めたり。諸軍士更に其心を解く者なし。時に諸葛鏞といふ者、之を解きて曰く、

令公の後は郭氏なり。口の中に或あるは、國の字なり。按に手なきは、安の字なり。思ふに是れ郭國安なるべしといふ。軍將史世用、茅國器、共に聞きて曰く、郭國安は、今既に日本の軍中にあり。是れ我等に、新寨の城を破らせん爲なるべしとて、朝鮮の商三人を以て、史世用が書を持たせて、望津に行きて、郭國安に逢ひたり。約して曰く、今月廿日に、望津にある兵糧庫に、火をかけて焼くべし。其時我等川を渡りて、城を攻めんとす。茅國器、其日軍兵を率し川を渡る。日本の兵、之を渡さじと防ぐ所に、望津の城焼上る。日本の兵城に引入りて、火を消さんとす。茅國器勝に乗りて、望津に攻め入りて、火をかけたなり。董一元は、軍兵を遣して永春の城を破り、近郷を火拂ふ。其夜又急に昆陽を攻む。島津が軍兵、大に働きて、寄せ來る敵を、切伏せ薙倒す事多しと雖も、大軍なれば絆ともせず、終に攻め破りしかば、日本の兵共、泗川の城に引籠る。

董一元は、謀を運らし、茅國科といふ者に、黄金、絹布を持たせ、新寨の城に遣して、島津義弘に與へて、和睦の議をいふに、義弘従はず。其金帛を返しけり。董一元は、

廿八日の夜半に、泗川に詰懸けたり。城中には、島津が兵三百騎計りあり。大同驍將李寧、一陣に進み、城下に至りて打殺され、大明の後軍、白けて見ゆ。董一元、大軍を以て攻懸る。城中、加勢を新寨に乞ふ。其間に、城の兵三百騎打つて出でつゝ、戦ふに、驍將盧得功、鐵炮に中りて死しけり。城兵勝に乗ると雖も、董一元が大軍、終に城に入りて火をかけたなり。島津が兵五六百騎、泗川に加勢すべしとて、駈出でたり。義弘止めて曰く、泗川の軍兵を捨てん事は、口惜しけれども、彼大軍勝に乗りて、此新寨に押懸けなば、味方敗北すべし。只陣を固めて守るべし、駈出づる事なかれといふ。義弘が家老伊勢兵部少輔貞昌馬を馳せて、泗川より落ち來る兵を迎へて、新寨に歸る。大明の軍兵、東陽の兵糧庫を燒きて、新寨に攻寄せけれども、義弘出合はず、夜に入りて、董一元如何思ひけん、泗川に引退く。

十月朔日、董一元が命によりて、茅國器等、新寨を攻む。茅國器、葉邦榮、彭信古、既に城下に詰寄せ、木槓を以て城門の扉を、こち破らんとするに、木槓折れて火出でつゝ、鐵炮の藥に燃え付き、黒煙になりしかば、大明の寄手、燒殺さるゝ者多く、

亂れ騒ぐ所を、島津義弘父子打つて出でつゝ、堅横さまに打つて廻るに、彭信古が三千餘騎皆討たれて、僅に五六百人になりて引退く。其外茅國器等が兵一萬人進みけるを、義弘五千餘騎、大に戦ふに、諸軍皆打靡かされて落行きけり。董一元諸將を勵まし、又押寄せたり。中軍の大將徐世卿、生捕られて殺されしかば、大明大に敗北し、死する者數知らず。義弘軍兵を軽々と城に引上げ、打取る所の首三萬餘を、鼻を殺ぎて大樽十個に入れて日本に遣す。是より大明・朝鮮の兵共、いよゝ石曼子まっしが武勇を恐れて、戦ふべき心なし。

石田治部少輔・淺野彈正は、大權現の仰をうけて、筑前博多に下り、使を朝鮮に遣して、秀吉公の事を告げて、諸大將の歸朝を催す。郭國安聞付けて、大明に告越したり。然れども義弘が武勇に恐れて、進み來らず。

大明、既に日本の軍兵、歸朝すべき由を聞きて、陳璘を以て舟軍の大將とし、陸路五千餘騎・水兵三千騎を相添へ、副總兵陳璘・鄧子龍・遊擊馬文煥、其兵一萬三千人、軍船數百艘に取乗り、忠清・全羅・慶尙三道の湊に陣取りて、日本の兵を防ぐ。

清正は蔚山を出で、行長は順天を立ち、義弘泗川を打出でつゝ、皆歸朝せんとす。陳璘大に喜び、是れ日本の軍兵を、塵ちりに殲ころすべき時節至れりとして、鄧子龍及び朝鮮の李統制を遣し、其兵一千餘騎、鼓金に艤して、日本の兵を遮らんとす。島津義弘は歸り去りぬ。小西行長と戦ふ。鄧子龍二百人を率して、小舟に乗りて押廻しけるが、石火矢に中りて舟打碎け、大將共に、一人も残らず死にけり。行長が兵勝に乗る。李統制舟を漕ぎ寄せしが、又切殺さる。陳璘等、行長が舟を取巻きて戦ふ。行長打破りて加徳に至り、義弘に逢ひたり。大明中軍の大將陶明宰も、此時に討死す。清正・行長・義弘・直茂・幸長等の諸大將、皆歸朝し、博多に着きて、石田三成に對面す。加藤清正は、先づ名島に赴き、淺野彈正に逢ひて、打連れて博多に來る。次の日石田・淺野は、諸大將に、在陣の苦勞を感じ申して、秀吉公の遺言・遺物の事を語りければ、諸大將、皆涙を流して悲しむ。石田・淺野申して曰く、各伏見に來りて後、本國に歸り、七ヶ年此方の、在陣の苦勞を慰み給ひ、來年上京の時に、互に會合して、心を慰まんと。斯くて各伏見に至りて、大權現に謁し奉りて、皆本國に歸らる。

出征の軍
悉く凱陣

大權現は、鳥津義弘が軍功を感じて、領知四萬石を加へ給はる。時の人羨みけり。同四年三月五日、加賀大納言利家・備前中納言秀家・會津中納言景勝・安藝中納言輝元・德善院僧正法印玄以・淺野彈正少弼長政・増田右衛門尉長盛・石田治部少輔三成・長束大藏大輔政家、連判誓詞を以て、大權現に捧げて謝し奉る。是れ風聞する事ある故に、堀尾帶刀吉晴・中村式部少輔一氏・生駒雅樂助、屢解説を請ふ故に、大權現之を聞き給ひ、即ち九人に誓紙せしめ給ふ所なり。

四月十八日、敕して、秀吉社に、豊國大明神と諡を賜ふ。

本朝將軍記は、古來書傳に記す所、粗考へて集め著せり。近代の雜記等、其外いひ傳へし事又之あり。略して載せたり。文の短き事は短く、事の實なることは、實なりと知るべし。

將軍記第二十大尾

續撰清正記

序

英雄の士は常にあれど、能く知る將なし。其知らせ給ふは、太閤秀吉公なり。秀吉公の見出し給ふ諸士の中に、加藤主計頭清正、若年にしては秀吉公の供奉し奉り、忠を盡し、中年にしては朝鮮國元良哈大明國迄も高名を顯し、終には源家康公豊臣秀頼公御對談の勤をなし、名を天下に顯し、能く終始を慎まれける。清正一世の振舞の有増あらましを、大和假名の一字々に綴り、清正記と爾いふ。

清正先祖の事は、加藤美作守といふ人、書き置かれける。清正若年より天草迄の働は、古橋又助といふ者書置き、又助は、天草にて痛手を蒙り、歸陣ありて死す。朝鮮陣中の事は、下川兵太夫・木村又藏といふ者書置く。又助が覺書は、あらまし計りを書付く。兵太夫は清正右筆を勤めし者なり。兵太夫が覺書にいふ、朝鮮陣中始より終迄の事を、一々書付く。然れども毎度の小競合こせりあひ、又朝鮮人・大明人との筆談は、

事繁きにより、兵太夫書留めず。此故に爰に記さず。朝鮮より歸陣ありての儀は、古橋清介氏保といふ者書置くなり。清正活潑の勢ありて、胸中鏡の如くなる生付うまれつきなれば、中々筆力に及び難し。活潑金鏡の所に目を付けて、此書を読むべきものなり。予は文盲なるが故に、唐大和の理に通せず、美作守又助兵太夫が覺書、次第の違はざる所、やうく爰に記し侍る。此書物は、清正若年より逝去迄の主要を書集め、小事は事長きにより略す。其名は世にありて、其品、書留めざることを悔み、愚筆を染め、書物となし畢ぬ。

次序

竊おろんみに以れば、萬物と生死を同うして、衆物復歸するものは、暫く聚るの形なり。萬物と共に盡きずして、卓然として朽ちざるものは、後世の名なり。所謂荆山の璞は天下の寶なり。石中に晦くらますこと、其幾何年といふことを知らず、和氏に遇うて後世に顯れ、豊城の劍は天下の寶なり。地中に晦くらますこと、幾何年といふことを知らず、

電氏に遇うて、而して後時に顯る。物の顯晦、固まことに各時あり。一物だも且然り。況や君子の徳をや。爰に加藤肥後守源清正朝臣は、若年の頃より武勇に達し、天下の相として、凜々たる威風日域に振ひ、而して堂々たる意氣朝鮮を動す。加之、内三寶うちさんぼうに歸し、外五常ほかごころを守る。故に一生身修むねをこつて家齊ひ、國泰平にして、萬民仁澤に濡ふこと、豈近世の英雄ならざらんや。蓋積善の家に必ず餘慶あらば、長く子孫を保ち、國家繁興たるべきに、天なる哉命なる哉、二世忠廣代に當つて、國破れ家亂れて、剩へ遠流の身となり給ひ、而して子孫跡を晦し、群臣皆離散す。然るに清正世を相去ることは、殆ど遠くして又遼はるかなり。故に其名のみ残りて、其事を知る者稀なり。斯くて今十箇年も過ぐれば、其名を知る者、曾てあるまじきと思ふ所に、何れの許ところの人といふことを知らず、又其姓字を詳にせずと雖も、他家の臣とは見えざる者、清正先祖より逝去迄の事を書記かきしるして、清正記と名付け、去ぬる年の孟春に、梓に鋳めて、世に行ひて以て之を顯す。其志豈盛ならざらんや。復快またこころよからざらんや。恰白骨再穴枯樹重榮ならざらんや。予、去中春の頃、武州江戸に於て、斯書を求め、一覽する

に、清正先祖のことは委細なり。肥後入國より天草の合戦・高麗陣中の事は可なり。朝鮮歸朝の後逝去迄の事は、粗にして又不可なり。宜なる哉此書の作者、其頃の事を見ず聞かずして、唯美作・又助・兵太夫・古橋等が覺書の少々遺りたるを拾ひ集めて、推量に編みたる故に、志は至厚なりと雖も、相違ある事は、若年たるにより、短臂、痒所に及ばざるものなり。然りと雖も、法華經に曰、五十展轉隨喜功德無量無邊とあれば、先君への忠心は至れり盡せり。情思ふに、戦場の事は、人々の説々區々にして、定ならざるものなれば、少々相違は、不可の甚しきにはあるべからざるもの歟。然りと雖も、尾州名護屋普請の事、清正逝去の時の遺書、并に家中への七個條の法度書は、大きに相違したる事ありて、後人の嘲哂たるべき事共なる故に、斯を刪り斯を正さんと思ふに、又退いて觀れば、前編を謗るに似たる故に、兩端を持して、模陵の手の如くなる所に、朋友來りて、斯事を聞きていふ、孔夫子の曰、過則勿憚改といふ事あれば、如かじ之を撰みて之を改めんにはと、諫められしにより、先集の作者の誹は任他、先君への忠にも、若しはなりなんかと思ひ、指を屈して見

れば、清正逝去慶長十六年より、今茲寛文四の曆までは、五十有四年に相當れり。五十四は六九の數なり。易に曰、六は偶にして陰の數なり。九は奇にして陽の數なり。陽は天なり、陰は地なり。彖辭に曰、天地交而萬物通也。上下交而其志同也。亦程子曰、小謂陰大謂陽也。人事を以て之をいへば、大は則ち君にして上なり、小は則ち臣にして下なり。君、誠を推して以て下に任じ、臣は誠を盡して以て君に仕ふまつり、上下志通る時至れる哉。故に唯愚慮の及ぶ所を誌して、以て先君の厚恩を報せんと思ふ者、恰も一毫を大虚に出すが如く、一滴を巨壑に投ぐるに似たる者歟。抑予が祖父は、秀吉公の播州に坐します時に、清正と因ありけるにより、肥後へ入國の翌年、招るゝに應じ來りて家臣となりたる故、愚父も若年の頃より、天草の合戦・朝鮮陣中、清正傍を離れず相働き、宇土・柳川の働の時も、忠功を盡したる故に、重恩を蒙り、逝去以後まで、近臣として仕ふまつりけるに、忠廣代に至つて、不幸にして一族に事ありて、官を退き去りて、風光を埋み柴扉を掩ひ、東關の邊に蟄居して、正保年中迄、暮齡八十歳に及び、存へられたる故に、清正一世の行狀の品の詳なる物

語聞置きけれども、予が素、至愚極陋たる故に、前後漫みだりにして、品々連續せずと雖も、少々書留め置きたる反古を求め出して、猶疑しき事は、中川入道に尋ね問ひ、先集の誤を撰び之を改め、脱ありて足らざる事をば、之を續つぎて以て續撰清正記と號するものなり。然るに前編に書きたる家臣共の名、後代に替りたるを、前に書きたるもあり、或は昔の名を後に書きたるもこれあり。今予が記すには、之を改めて書くべきなれども、後覽の兒童、曉し易からざるべき爲に、前編の如く其名を書くものなり。吾今頭白く齒黃み、命を延ぶるの日なき故に、斯編を忽すまやかに撰びて、以て子孫に附與す。曾て以て他人に見せしめん爲ならず。然も與麼なりと雖も、詳に知り悉く覺えたる老翁ありて、一覽の後に重ねて之を正さば、先君への忠心、至大至厚ならん。予も亦慶娛ならざらんや。

清正系圖

| | | | |
|----------------------------|---------------------------------|-----------------------------|----------------------------|
| 大織冠 | 淡海公 | 武智麿 | 魚名公太政大臣 |
| 良繼内大臣 | 眞格號京家 | 内麿右大臣 | 冬嗣右大臣 |
| 良房中納言 | 長良太政大臣 | 基經 <small>號堀川</small> 太政大臣 | 忠平一條太政大臣 |
| 師輔九條太政大臣 | 時平左大臣 | 保忠中納言 | 元輔清原祖 |
| 兼家法興寺 | 道長御堂關白 | 賴通内大臣 | 孝通大二條 |
| 師通内大臣 | 忠實中納言 | 忠通法性寺 | 賴長惡左府 |
| 實季關白 | 公實惡相國 | 長實太政大臣 | 基實關白 |
| 基房大納言 | 家實猪隅殿 | 通家明峯寺 | 兼經太政大臣 |
| 良實二條左大臣 | 兼平近衛 | 家經大納言 | 忠孝中納言 |
| 師教左大臣 | 兼定左大臣 | 教藤中納言 | 教尊大納言 |
| 忠家 <small>教尊長子</small> 中納言 | 正家 <small>號美濃國加藤武者</small> 忠家二男 | 家久 <small>三郎四郎</small> 正家二男 | 長賴 <small>伊勢守</small> 家久長子 |

三高源太長頼三男

三虎三郎三高長子

虎時宮内少輔三虎三男

義時虎時長子

正時義時二男

正吉正時四男三郎大力

頼方正吉長子四郎尾張國愛智郡中村に住

清方頼方三男二郎

清信清方長子號三因幡守仕齋藤山城守討死

清忠清信長子號三彈正右衛門兵衛

清正清忠二男號三主計頭後改三肥後守任從三五位上侍從永祿五年壬戌六月二十四日誕生本卦履

忠廣清正四男號三肥後守任從四位下侍從

女子

女子阿部修理大夫妻

續撰清正記 卷第一

第一 清正、秀吉公へ奉公に出でらるゝ事

清正の先祖

一、前の肥後の州くにの太守加藤主計頭豊臣朝臣清正の先祖を尋ぬるに、大織冠の末葉加藤因幡守藤原清信といふ人なり。清信、尾州犬山に住みて、齋藤山城守幕下なり。山城守と織田信長公と犬山に於て一戦の刻、清信討死し畢ぬ。清信死去の節、子息一人あり、鬼若といひて二歳なり。孤となりて母に養育せられひとしな生長り、尾州愛智郡中村といふ所にて光陰を送る。後、彈正右衛門兵衛と號す。彈正、三十八歳にして死す。一人の男子あり、年三つ、虎之助と名づく。漸々やうやく母に育てられ、五歳迄は中村に住す。太閤秀吉公の母公と虎之助母とは從姉妹いとこなり。此故に虎之助母思はれるは、木下藤吉殿、今近江の長濱にて、五萬貫の領地しるしめを知召され、裕なる體なり。

秀吉に仕
ふ

此子田舎にて育てたらんには、武士の作法も知り難し。只々秀吉を頼み奉らんと分別し、虎之助を召連れ、長濱に至りて、秀吉公の母公へ委細申入れられければ、母公殊の外馳走まし〜て、兩人共に藤吉殿御目に懸け、母公の御傍にて養育なり。虎之助十五歳の時、母公へ申上げられけるは、我れ御蔭を以て成人仕る。年十五といへども、背も高く御座候間、前髪落し、奉公を勤め申すべき由、申されければ、おとなしく申したるものかなと、藤吉殿へ細々と御語りあれば、藤吉殿一入機嫌宜しく、内々彼者が眼差を見るに、能く祖父清信に似つるものかなと存候ひし。前髪落し申さんとて、即ち男になし、加藤虎之助と名づけ、初めて百七十石の領地を給はり、奉公の身となる。藤吉殿内に、塚原小才次といふ兵法者あり、ト傳遠類の武士なり。彼に従ひ兵法修行す。或時長濱の町人所へ、人を誤り取籠る者あり。中々町中騒がし。虎之助、右の様子聞付け、常々傳受の兵法は此時なりと思ひ、彼の町人所へ走り行けば、四方に人充滿たり。大勢の中を潜り入り、狼藉人を打倒し、綱を懸け、手疵一個所も蒙らず、搦めて出でられけり。取籠る者は、秀吉公足輕に、市足久兵衛といふ者なり。右の首尾、秀吉公具に聞召され、常々彼者は、常の若者のやうにもなく、物の役にも立つべきと思ひしに、能くも仕たりと仰せられ、二百石の加恩ありて、木村大膳與の小物見役に仰付けられ、朝暮勤仕申さるゝなり。

第二 秀吉公因幡國鳥取城攻附加藤虎之助働の事

鳥取城を
攻む

一、天正九年三月三日、信長公、秀吉公を安土へ召され、播磨國を給はり、中國の探題職を下されけり。同六月二十五日、因幡國鳥取の城攻の刻、秀吉公、彼の城を見廻り給ひ、地の利能き城なり。容易く攻め崩すべきやうなし。遠卷にすべし、搦手の體を見て參れと、蜂須賀彦右衛門を召されて、委しく彼に仰含めけり。秀吉公何と思召しけん、加藤虎之助も彦右衛門と同前に參れとの仰なり。虎之助、彦右衛門に申されけるは、城の體を見るに、東の森の陰に伏兵あり。老功の人にいかゞなれど、足輕二三十人も召されまじくやと申さる。彦右衛門返答に、氣の利いたる人かな。我度々斯様の所見覺えたり。何の障もあるまじ、急ぎ乗り候へと、城を左に見

て、搦手の様を見られける。案の如く森の中より、敵二十人計、鎧押取りく出でければ、彦右衛門、虎之助々々と聲を懸く。虎之助常々半弓を射たりければ、腰に附けたる半弓押取り、懸る敵を射拂ひく、彦右衛門と詞をかく。敵も半弓に射立てられ、手負數多出來し、少し躊躇ふ所に、虎之助馬より下り、跡立つて退く敵一人討留め、首を取り、袋に入る。彦右衛門も敵一人討取り、兩人共に馬に乗り、秀吉公の御前指して參られける。秀吉公、早其體を御覽じて、伏兵ありて手に合ひ、高名したるか。參れくとの御誕なり。彦右衛門、御前へ參り、競合の様子并に城の體を委細に言上申されければ、仰には、虎之助若輩たりと雖も、目も心も利きたる仕方、今日の働、彦右衛門には拔群増したりと、御手づから金一掬給はり、加増の領地を給はる。御感書にいふ。

因幡國鳥取の城爲可攻崩着陣、爲物見遣候刻、伏兵起り候處、以半弓敵を射退け、其上太刀打之高名、誠以神妙之至也。因茲爲加増百石宛行之畢。彌於抽軍忠者可加増者也。仍如件。

天正九年六月二十九日 秀吉御判

加藤虎之助殿此時二十歳也

第三 秀吉公備中國冠の城攻并清正働の事

冠の城を攻む

一、秀吉公二萬八千の人數を率し、備中國冠の城攻めの刻、秀吉公、虎之助を召され、杉原七郎左衛門が攻口見て參れと、仰付けられけり。即ち七郎左衛門攻口に行き、伊賀・甲賀の忍の者と一つになりて、彼方此方と見廻りし所に、冠の城の北の門脇に、手弱き堀あり、いかにも自由に乘らるゝ地形なれば、行くと等しく乗上り、敵なければ幸と、加藤虎之助一番に乗り、續けや武士共と、曳々聲を上ぐる。甲賀の者の内に、美濃部十郎次郎、二番乗と名乗る。杉原が内、山下九藏、三番と名乗り、三人寄合頭に攻入りけり。敵二十人計一度に突いて出づ。虎之助十文字の鎧を押取り、互に突合ひけるが、武士一人突伏せ首を取る。十郎次郎も九藏も、敵と鎧を合せければ、味方の大軍續いて攻め入るを見て、二十人餘りの敵も、城内へ引退く。さて落